

IBM Endpoint Manager for Remote Control



コンソール・ユーザーズ・ガイド

バージョン 9.1.0

IBM Endpoint Manager for Remote Control



コンソール・ユーザーズ・ガイド

バージョン 9.1.0

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、93 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Endpoint Manager バージョン 9 リリース 1 モディフィケーション・レベル 0、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： IBM Endpoint Manager for Remote Control
Console User's Guide
Version 9.1.0

発行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2014.3

© Copyright IBM Corporation 2003, 2014.

目次

第 1 章 IBM Endpoint Manager for Remote Control システムの概要	1
---	---

第 2 章 定義	5
--------------------	---

第 3 章 IBM Endpoint Manager for Remote Control コンソールの使用	7
コンポーネント	7

第 4 章 ダッシュボードの概要	11
インストール分布データの表示	11

第 5 章 IBM Endpoint Manager for Remote Control の使用	15
---	----

IBM Endpoint Manager for Remote Control コンポーネントのデプロイ	15
Windows インストール	16
Linux インストール	27
IBM Endpoint Manager for Remote Control コンポーネントの更新	39
Windows コンポーネントの更新	40
Linux コンポーネントの更新	45
リモート・コントロール・セッションの開始	50
P2P セッションの開始	50
サーバーから起動されるリモート・コントロール・セッションの開始	53

警告への対処	54
ターゲット構成およびサーバー構成の管理	54
IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー・インストール・タスクの作成	55
IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット構成タスクの作成	63
IBM Endpoint Manager for Remote Control タスクの実行	79
分析	80
ターゲットのインストールおよびセキュリティ・データの取得	81
監査イベント・データの取得	82
ユーザー、セッション、およびパフォーマンス・データの取得	82
セッション接続データの取得	83
セッション・アクティビティ・データの取得	84

第 6 章 Web レポートの表示	87
-----------------------------	----

付録 A. よくある質問	89
------------------------	----

付録 B. サポート	91
----------------------	----

特記事項	93
----------------	----

索引	97
--------------	----

第 1 章 IBM Endpoint Manager for Remote Control システムの概要

IBM® Endpoint Manager for Remote Control システムに含まれる主なコンポーネントを以下に示します。

IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット

このターゲットは、IBM Endpoint Manager for Remote Control を使用してリモート側で制御する必要があるすべてのコンピューターにインストールされます。このターゲットは、コントローラーからの接続要求を **listen** します。また、このターゲットとブローカーを使用して、インターネット経由でリモート・コントロール・セッションを開始することもできます。

イントラネットの外部に存在するターゲットを構成して、そのターゲットの詳細をサーバーに登録することができます。これらのターゲットとのセッションは、サーバー・ポリシーによって管理されます。これらのターゲットをデプロイするには、**Managed** プロパティを「Yes」に設定する必要があります。また、**ServerURL** プロパティと **BrokerList** プロパティも構成する必要があります。ターゲットの詳細をサーバーに送信しないようにターゲットを構成することもできます。これらのターゲットは、未登録ターゲットとして分類されます。未登録ターゲットを構成する方法は 2 とあります。ターゲット・ソフトウェアをインストールして、**Managed** プロパティを No に設定します。**BrokerList** プロパティも設定する必要があります。また、オンデマンド・ターゲット機能を使用して、ターゲット・ソフトウェアが事前にインストールされていないコンピューターとのリモート・コントロール・セッションを開始することもできます。オンデマンド・セッションの管理にはサーバー・ポリシーが使用されます。ターゲット・ソフトウェアはセッションの最後に削除されます。IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲットは Windows、Linux、および Solaris オペレーティング・システムで実行できます。

IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー

ピアツーピア・セッションで使用するために提供されているインストーラーまたは Fixlet を使用してインストールできます。また、リモート・コントロール・サーバーまたは IBM Endpoint Manager コンソールからコンテキスト起動することもできます。どのような場合でも、コントローラーを使用することで、リモート・コントロール・ターゲットがインストールされているリモート・コンピューターをユーザーが制御できるようにすることができます。コントローラーには、コントローラー・ユーザーが使用できる、リモート・コントロール、ガイダンス、チャット、ファイル転送、コラボレーションその他の多数のアクションへのインターフェースが備わっています。IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラーは、JRE のバージョン Sun 1.6、Oracle 1.6、1.7 または IBM® 1.5、1.6、1.7 をサポートします。

IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー

管理対象モードで動作し、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーの URL を指すように構成されているすべてのデプロイ済みターゲット

を管理する Web アプリケーション。サーバーは、既存の WebSphere® サーバーにデプロイするか、組み込みバージョンの WebSphere とともにインストーラー・パッケージでインストールできる Web アプリケーションです。このサーバーは、デフォルトで HTTP または HTTPS 接続を listen します。組み込みの WebSphere オプションでインストールされると、ポート 80 および 443 で listen します。既存の WebSphere サーバー上にデプロイすると、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーはポート 9080 および 9443 で listen します。このサーバーは、データベース・サーバーを必要とします。サポートされているオプションは、組み込み Derby (PoC デプロイメントの場合のみ)、DB2®, SQL Server、および Oracle です。また、Active Directory や Tivoli Directory Server など、LDAPv3 サーバーからのユーザーとグループのデータが同期および認証されるように構成することもできます。このデプロイメント・シナリオのネットワーク特性はピアツーピアと同じです。このため、すべてのコントローラーとすべてのターゲットとの間には、直接的な TCP 接続が必要です。ただし、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーでは中央集中型のより詳細なポリシー制御方法を使用できます。この方法では、リモート・コントロール・セッションを開始しようとしているユーザーによって決定されるさまざまなポリシーをターゲットで使用できます。また、サーバーは、セッションの完全な自動記録の一元的な監査と保管の機能も提供します。このシナリオでは、コントローラーはスタンドアロン・アプリケーションではなく、リモート・コントロール・セッションを開始するために、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーの Web インターフェースから Java™ Web Start アプリケーションとして開始されます。

注: ピアツーピアと管理対象は排他モードではありません。 IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲットは、以下の方法で構成できます。

- 厳密な管理対象として構成する。
- サーバーにアクセスできない場合に P2P モードにフェイルバックするように構成する。
- P2P モードおよび管理対象モードの両方のリモート・コントロール・セッションを受け入れるように構成する。

以下のコンポーネントは、管理対象モードでのみ使用できます。

IBM Endpoint Manager for Remote Control CLI ツール

ターゲット・コンポーネントの一部として常にインストールされますが、別個にインストールすることもできます。CLI は、以下のタスクを行うためのコマンド・ライン・ツールを提供します。

- 管理対象リモート・コントロール・セッションの起動をスクリプト化または統合します。
- 管理対象ターゲットがインストールされたコンピューターでリモート・コマンドを実行します。

IBM Endpoint Manager for Remote Control ゲートウェイ

セキュア・ネットワーク境界にあるコンピューターにインストールされるサービス。セキュア・ネットワーク境界では、セキュア・ネットワーク間でのトラフィック・フローが厳密に制御されます。例えば、境界にあるファイアウォールは、特定の IP アドレスとポートのペア間のトラフィックのみを許

可します。このようなシナリオでは、ゲートウェイのネットワークをデプロイできます。このゲートウェイは、特定のネットワーク・ゾーン内のコントローラーから別のネットワーク・ゾーン内のターゲットへのリモート・コントロール・トラフィックについて、ルーティングとトンネリングを行います。ゲートウェイは Windows または Linux オペレーティング・システムがインストールされているコンピューターにインストールできるネイティブ・サービスです。これは、デフォルトのリスニング・ポートを持たず (ただし、通常は 8881 が選択されます)、また複数の着信リスニング・ポートおよび発信接続用に構成できます。

IBM Endpoint Manager for Remote Control ブローカー

企業ネットワーク外 (インターネット・カフェや自宅) にあるコンピューターから到達できるようにするために、通常は DMZ 内のコンピューターにインストールされるサービス。IBM Endpoint Manager for Remote Control ブローカーは、コントローラーおよびターゲットからのインバウンド接続を受け取り、この 2 つのコンポーネント間でリモート・コントロール・セッション・データをトンネリングします。このブローカーは、Windows コンピューターまたは Linux コンピューターにインストール可能なネイティブ・サービスです。デフォルトのリスニング・ポートはありませんが、443 が推奨オプションです。これは、通常、このポートがアウトバウンド接続用に開かれており、コンテンツ・フィルタリングに関する問題が比較的 (80 の場合などよりも) 少ないためです。

第 2 章 定義

このセクションでは、IBM Endpoint Manager for Remote Control の使用時に使用される、いくつかの共通用語を定義します。

リモート・コントロール・セッション

環境内のコンピューターと接続を確立して、コンピューターをリモートで監視したりアクティブに制御したりすること。セッションでは、コントローラー・ユーザーのキーボードおよびマウスが、リモート・システムのプライマリー・キーボードおよびマウスになります。リモート・コントロール・セッションで利用できるオプションとして、チャット、ガイダンス、再起動、およびファイル転送などの機能があります。確立できるセッションのタイプ、コントローラー GUI の機能、およびこれらのセッション内で使用できる機能について詳しくは、「IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー・ユーザーズ・ガイド」を参照してください。

P2P セッション

コントローラーとターゲットの間に直接確立されるリモート・コントロール・セッション。コントローラー・ユーザーはコントローラー・コンポーネントをローカルで開始し、リモートで制御するターゲットを指定します。セッションでは、ターゲットに設定されているローカル・プロパティーが使用されます。詳しくは、54 ページの『ターゲット構成およびサーバー構成の管理』を参照してください。セッション確立後のコントローラー GUI の使用について詳しくは、「IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー・ユーザーズ・ガイド」を参照してください。

管理対象リモート・コントロール・セッション

コントローラー・ユーザーが IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーからセッションを開始するリモート・コントロール・セッション。コントローラー・コンポーネントはここから開始され、ターゲットに接続してセッション要求を送信します。ターゲットはサーバーと接続して要求を認証し、セッションに設定されるポリシーおよび権限を取得します。管理対象リモート・コントロール・セッションのポリシーおよび権限について詳しくは、「IBM Endpoint Manager for Remote Control 管理者ガイド」を参照してください。ターゲットがサーバーに到達できない場合、セッションは拒否されます。

セッション・ポリシー

セッション・ポリシーは、コントローラー・ユーザーによって実行可能なアクションと、リモート・コントロール・セッション中にターゲット・システム上で使用可能な機能を定義します。P2P セッションでは、これらはターゲットに定義されているローカル・プロパティーによって決定され、管理対象セッションでは、ユーザーとターゲット・グループとの関係から解決されるポリシーと権限によって決定されます。管理対象リモート・コントロール・セッションのポリシーおよび権限がどのように得られるかについての詳細は、「IBM Endpoint Manager for Remote Control 管理者ガイド」を参照してください。

第 3 章 IBM Endpoint Manager for Remote Control コンソールの使用

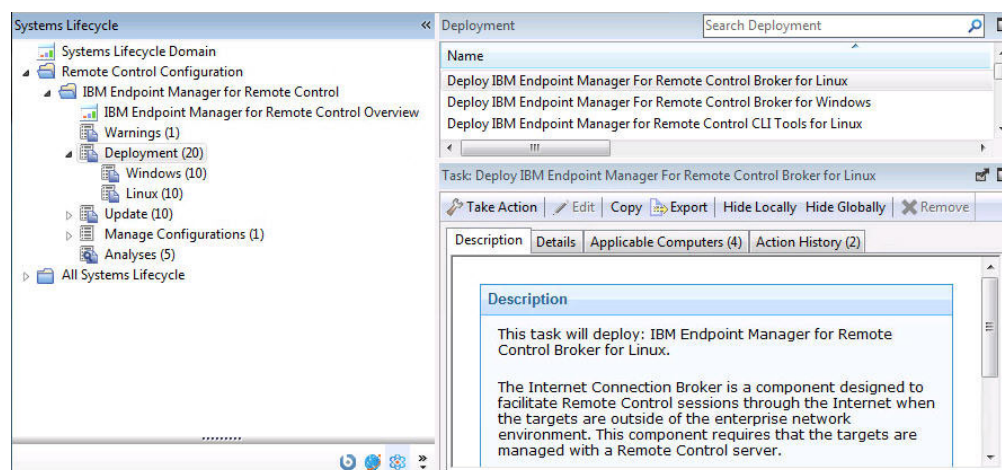
IBM Endpoint Manager for Remote Control には、デプロイメント内のワークステーションおよびサーバーのリモートでの制御とモニタリングに必要なコンポーネントを提供する、多数の新機能が含まれています。

また、IBM Endpoint Manager コンソールがバージョン 7.2 以降で変更され、データへのアクセスについて、いくつかの新しいナビゲーションの更新が加えられました。このセクションでは、新しいコンソールを操作する方法について説明します。IBM Endpoint Manager コンソールのナビゲーション・ツリーはすべての IBM Endpoint Manager 製品で使用でき、IBM Endpoint Manager for Remote Control のすべての機能の中心的なコマンドとして機能します。ナビゲーション・ツリーからは、すべてのレポート、ウィザード、Fixlet メッセージ、分析、およびネットワーク内のターゲット・マシンの制御および管理に関連したタスクに簡単にアクセスできます。

コンポーネント

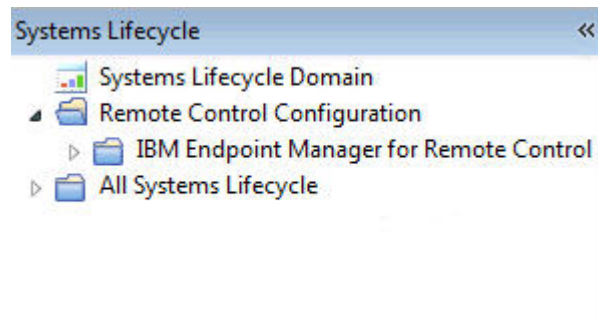
IBM Endpoint Manager コンソールの内容は、以下の 4 つの部分に編成されます。

- ドメイン・パネル – ナビゲーション・ツリーとすべてのドメインのリストを含みます。
- ナビゲーション・ツリー – サイト・コンテンツを格納するノードとサブノードのリストを含みます。
- リスト・パネル – タスクおよび Fixlet のリストを含みます。
- 作業域 – Fixlet およびダイアログが表示される作業ウィンドウです。



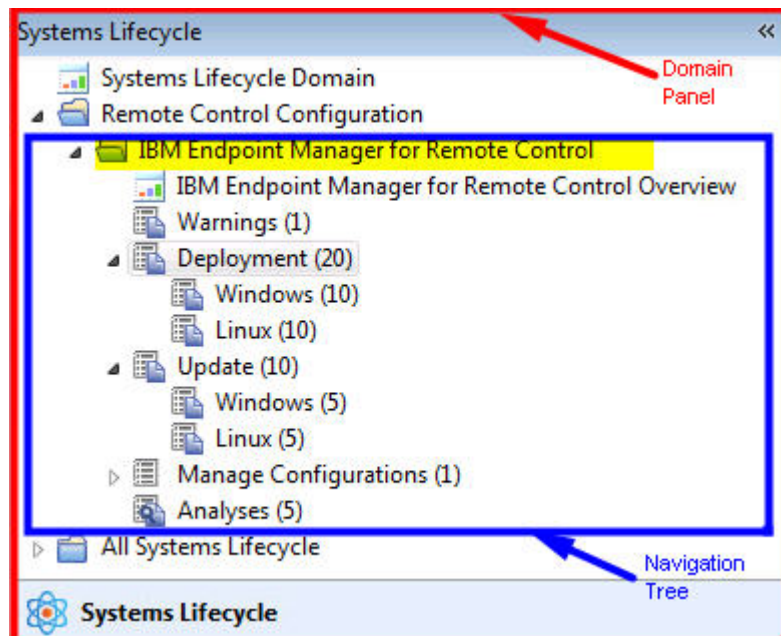
IBM Endpoint Manager コンソールのコンテキストでは、製品またはサイトはカテゴリー別またはドメイン別にグループ化されます。例えば IBM Endpoint Manager for Remote Control は、「リモート・コントロールの設定」ノードの一部として「シス

テム・ライフサイクル」ドメイン内部に含まれるサイトの 1 つです。



ドメイン・パネルはコンソールの左側の領域で、ナビゲーション・ツリーとすべてのドメインのリストを含みます。ナビゲーション・ツリーは、サイト・コンテンツを格納するノードとサブノードのリストを含みます。

以下の画像では、展開および省略が可能なノードを持つナビゲーション・ツリーが上部に表示され、下部にはドメインのリストが表示されています。ドメイン・パネルの下部にある「システム・ライフサイクル」ドメインをクリックすると、その特定のドメインに関連付けられたサイトのリストが上部のナビゲーション・ツリーに



表示されます。

赤色のアウトラインで囲んだ領域は、ドメイン・パネル全体 (ナビゲーション・ツリーおよびドメインのリストを含む) を表し、青色のアウトラインで囲んだ領域は、IBM Endpoint Manager for Remote Control サイトのナビゲーション・ツリーのみを含みます。

IBM Endpoint Manager for Remote Control のタスクは、上部および下部のタスク・ウィンドウでソートされ、これらはコンソールの右側に配置されます。

The screenshot displays the IBM Endpoint Manager for Remote Control console. The top section, outlined in blue, shows a list of analyses. The bottom section, outlined in red, shows the details for the 'Remote Control Controller Logs' analysis.

Status	Name	Site	Applicable Computer C
Activated Globally	Remote Control Installation and Security Options	Tivoli Remote Control...	0
Not Activated	Remote Control Controller Logs	Tivoli Remote Control...	4
Not Activated	Remote Control User, Session and Performance Options	Tivoli Remote Control...	0
Not Activated	Remote Control Target Logs (Start/Stop)	Tivoli Remote Control...	0
Not Activated	Remote Control Target Logs	Tivoli Remote Control...	0

Analysis: Remote Control Controller Logs

Activate Deactivate Edit Export Hide Locally Hide Globally Remove

Description Details Applicable Computers (4)

Description

This analysis shows the logs of IBM Endpoint Manager for Remote Control Controller audit events. The information is retrieved from each computer's local logs.

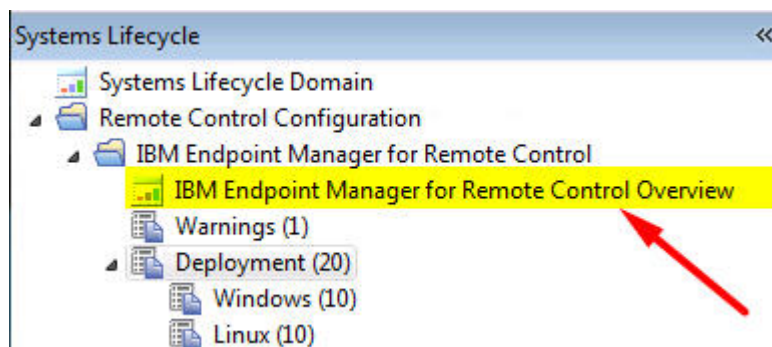
Note that this information is pulled back once every 6 hours.

Click [here](#) to activate this analysis.

上部パネル (青色) はリスト・パネルと呼ばれ、「ステータス」、「名前」、「サイト」、「適用可能なコンピューターの数」などのタイプによってデータをソートする列を含みます。下部パネル、つまり作業域 (赤色) には Fixlet が表示されます。これは、デプロイメント内のコンテンツをカスタマイズするための特定のアクションを実行するように指示するタスク画面です。

第 4 章 ダッシュボードの概要

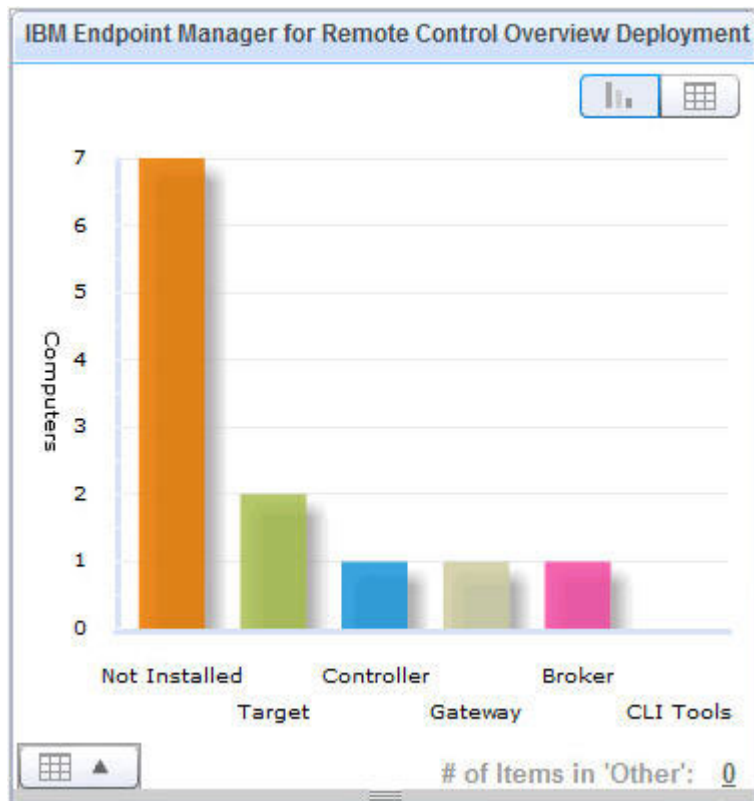
IBM Endpoint Manager for Remote Control には、環境内における IBM Endpoint Manager for Remote Control コンポーネントのインストールの分布と、実行されるターゲット・デプロイメント・タイプの分布を表示するための便利なダッシュボードが提供されています。このダッシュボードには、IBM Endpoint Manager for Remote Control ナビゲーション・ツリーの先頭で「**IBM Endpoint Manager for Remote Control の概要**」を選択することによってアクセスできます。



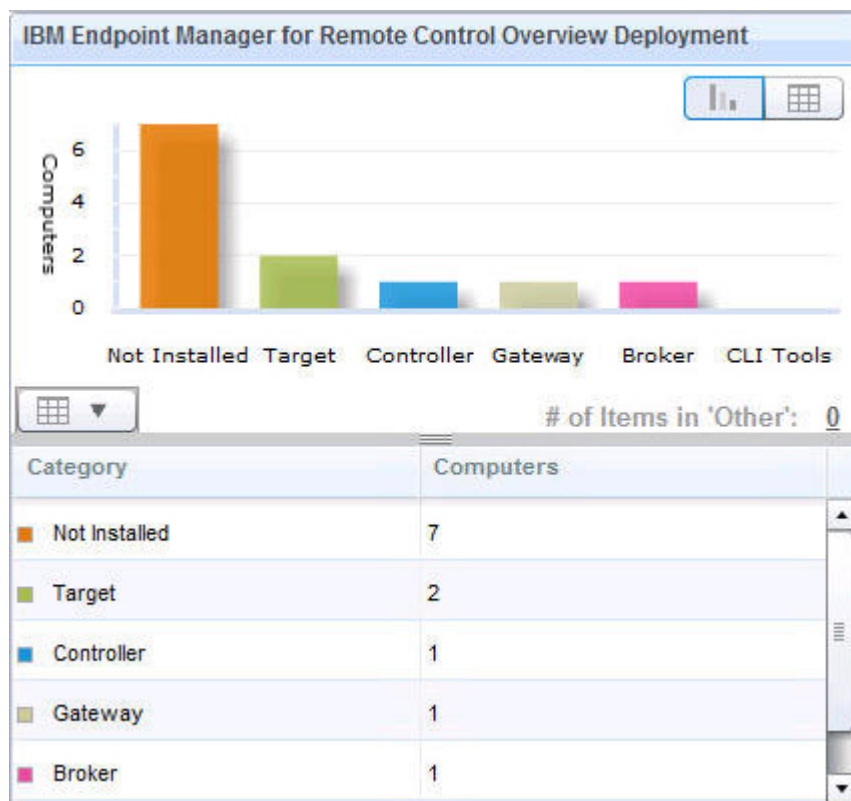
インストール分布データの表示

「IBM Endpoint Manager for Remote Control の概要」ダッシュボードには、IBM Endpoint Manager for Remote Control のインストールの分布と、ターゲット・インストール・タイプの分布を表示する 2 つの別々のセクションが含まれています。各セクションについて、以下で説明します。

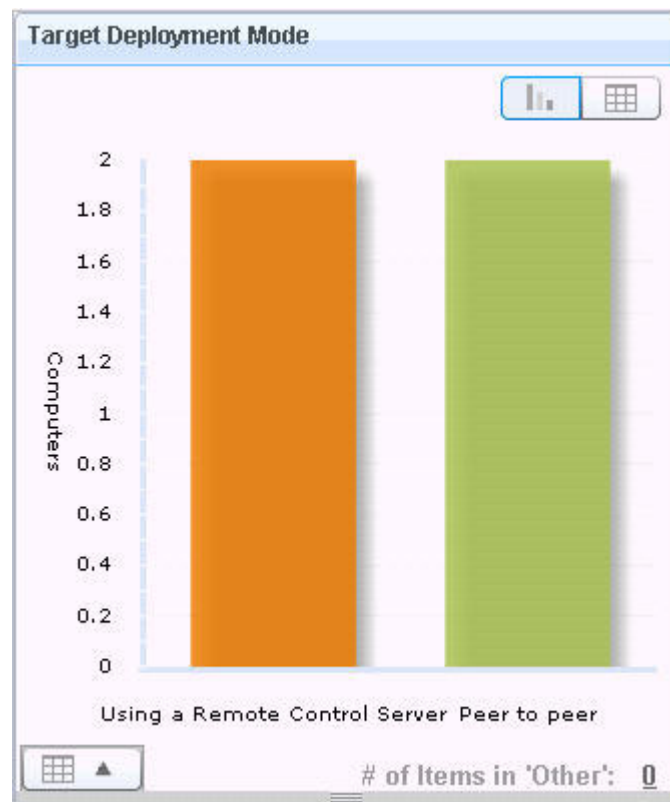
「**IBM Endpoint Manager for Remote Control 環境の概要**」セクションには、各種の IBM Endpoint Manager for Remote Control コンポーネントがインストールされた、デプロイメント内のコンピューターの数が表示されます。セクションの右上にある、グラフィック・バージョンまたはデータ・テーブル・バージョンを表示するためのボタンをクリックすることによって、データの表示方法を変更することができます。



また、グラフの左下にあるボタンをクリックすることによって、両方の方法でデータを表示することもできます。



「ターゲットのインストール・モード」セクションでは、IBM Endpoint Manager for Remote Control エージェント・ソフトウェアが実行されている環境内のコンピューター上で実行された、ターゲット・インストール・タイプの分布が表示されます。さまざまなターゲット・インストール・タイプの詳細については、15 ページの『IBM Endpoint Manager for Remote Control コンポーネントのデプロイ』を参照してください。セクションの右上にある、グラフィック・バージョンまたはデータ・テーブル・バージョンを表示するためのボタンをクリックすることによって、データの表示方法を変更することができます。



前のセクションと同じ指示を使用して、両方の方法でデータを表示することができます。

ダッシュボードの右上には、最新のグラフィック・データを表示したり、あるいはデータを印刷したりするために使用できる 2 つのアイコンがあります。

更新アイコン  は、最新のインストール分布データを表示するために使用できます。

印刷アイコン  は、ダッシュボード・データを印刷するために使用できます。データは PDF ファイルに出力され、指定された場所に保存して後で印刷できます。

第 5 章 IBM Endpoint Manager for Remote Control の使用

IBM Endpoint Manager for Remote Control ナビゲーション・ツリーには、環境内のコンピューターの構成、モニター、および制御に必要となるコンポーネントをインストールまたは更新する場合や、それらのコンポーネントからデータを収集する場合に使用できる、一連の Fixlet、タスク、およびウィザードが用意されています。

IBM Endpoint Manager for Remote Control コンポーネントのデプロイ

IBM Endpoint Manager for Remote Control ナビゲーション・ツリーの「インストール」ノードには、オペレーティング・システム固有の 2 つのサブノードがあります。これらのサブノードでは、リモート・コントロール・セッションを確立するために必要なコンポーネントのほかに、コマンド・ラインを使用したターゲット接続や、各ネットワーク上のマシンにアクセスするためのサポートのインストールに使用できるユーティリティーが提供されます。ご使用のオペレーティング・システムに関連したノードを選択すると、必要な IBM Endpoint Manager for Remote Control コンポーネントおよびユーティリティーのインストールまたは削除に使用できるタスクのリストが表示されます。

注: IBM Endpoint Manager for Remote Control は、インストール・メディアを使用してインストールすることもできます。詳しくは、IBM Endpoint Manager for Remote Control インストール・ガイドを参照してください。

コントローラー

IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーへのアクセス権限を持っていない場合は、リモート・コントロール・セッションを開始する予定のコンピューター上にコントローラー・コンポーネントをインストールする必要があります。

ターゲット

ターゲット・コンポーネントは、リモート・コントロール・セッション時に制御されるコンピューター上にインストールする必要があります。IBM Endpoint Manager for Remote Control には、ターゲット接続の確立方式に応じた 2 とおりのターゲット・コンポーネントのインストール方法があります。この 2 つのセッション・タイプについては、5 ページの『第 2 章 定義』セクションで説明されており、「IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー・ユーザーズ・ガイド」では、より詳細に説明されています。

注: 「IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーの使用」の方法を実行する場合は、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーが環境内に既にインストールされていなければならないことに注意してください。

CLI ツール

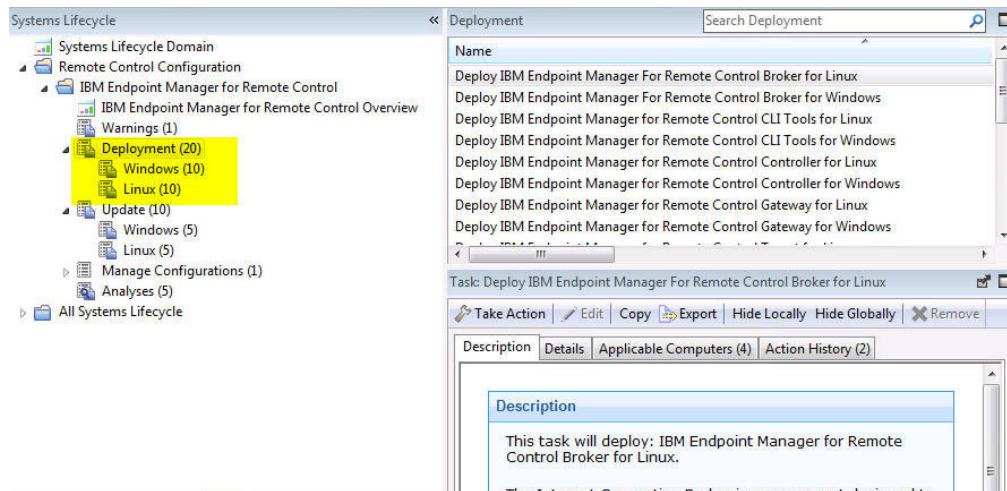
コマンド・ライン・ツールには、コマンド・ラインから実行できる 2 つのユーティリティーが含まれています。これらのユーティリティーを使用すると、ターゲットとのリモート・コントロール・セッションを開始したり、タ

ターゲット・ユーザーによる操作なしにターゲット・システムでコマンドを実行したりできます。これらのツールをインストールすると、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー・インターフェースにアクセスせずにターゲットに接続する場合に役立ちます。これらのツールは、複数のコマンドを自動的に実行するスクリプトの一部として使用することもできます。

注: CLI ツールをインストールするには、アクセス権限がある IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーの URL を知っている必要があります。

「ゲートウェイ」

ターゲット、コントローラー、およびサーバーが、相互に直接接続できない別々のネットワーク上にある場合は、ゲートウェイ・サポートをインストールし、構成することができます。ゲートウェイ・サポートを使用すると、これらの接続が確立されるようにネットワークを構成できます。



Windows インストール

Windows デプロイメント・ノードには、Windows 環境で以下のコンポーネントをインストールまたは削除するために使用できる一連のタスクが用意されています。

- ターゲット・ソフトウェアおよびコントローラー・ソフトウェア
- CLI ツール
- ゲートウェイ・サポート
- ブローカー・サポート

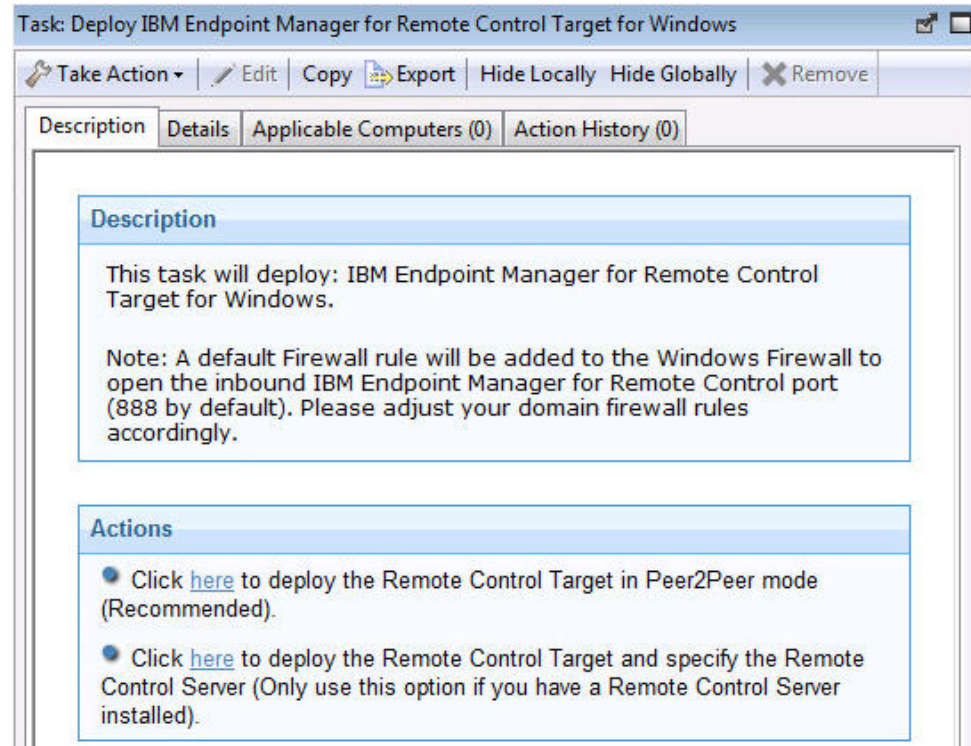
Windows ターゲットのインストール

「IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲットのインストール (Windows 版)」タスクを使用すると、ターゲット・ソフトウェアを Windows コンピューターにインストールできます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーで、「インストール」 > 「Windows」をクリックします。

2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲットのインストール (Windows 版)」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。

このタスクで有効なアクションは 2 つあります。必要なインストール方法を決定し、提示された指示に従ってください。



リモート・コントロール・ターゲットを P2P モードでデプロイ

このインストール方法を使用すると、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーを必要とせずに、コントローラーとターゲットの間に直接リモート・コントロール・セッションを確立できます。このインストール方法では、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー URL を指定する必要なしにターゲットがインストールされ、リモート・コントロール・セッションを確立するときには、このインストール方法により設定されたローカル・ターゲット・ポリシーが使用されます。ターゲットのインストール・プロパティについて詳しくは、54 ページの『ターゲット構成およびサーバー構成の管理』を参照してください。

「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲットをデプロイするターゲット・コンピューター (複数可) を決定するために必要なオプションを選択します。

「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

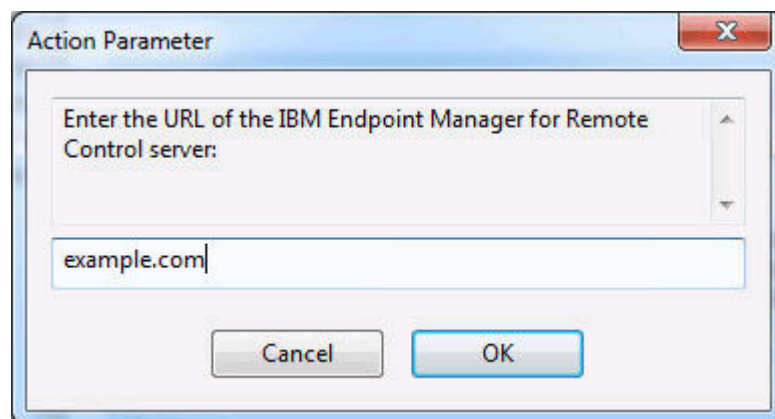
概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

注: ターゲットを将来 IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーに登録する場合は、IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット・ウィザードを使用すると、構成タスクを作成して、必要なサーバーのサーバー URL を指定することができます。選択したターゲットでこのタスクを実行すると、ターゲットは再構成され、サーバーに接続できるようになります。詳しくは、63 ページの『IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット構成タスクの作成』を参照してください。

リモート・コントロール・ターゲットをデプロイし、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーを指定

ターゲットを IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーに登録し、サーバーから起動されたリモート・コントロール・セッションに参加させるには、このインストール・オプションを選択します。このインストール方法では、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー URL を指定する必要があります。このターゲットに対して、Remote Control サーバーから起動したリモート・コントロール・セッションが要求された場合は、要求を認証するため、指定されたサーバーに接続します。要求が認証されると、セッションに対して設定されたポリシーが Remote Control サーバーからターゲットに渡され、セッションが確立されます。ターゲットのインストール・プロパティについて詳しくは、54 ページの『ターゲット構成およびサーバー構成の管理』を参照してください。

IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーの URL を入力し、「OK」をクリックします。



「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲットをデプロイするターゲット・コンピューター（複数可）を決定するために必要なオプションを選択します。

「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

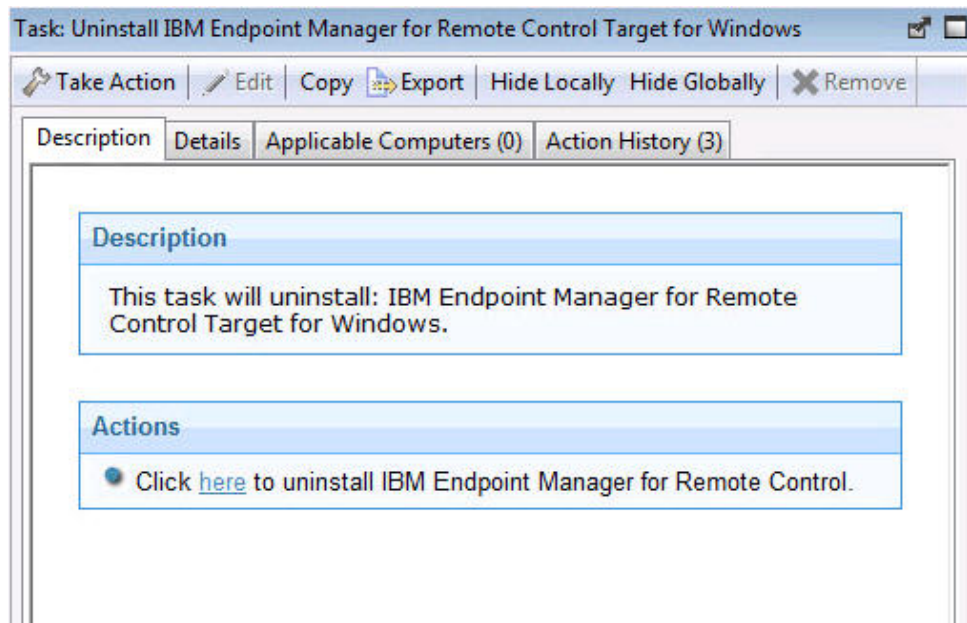
概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

注: このインストール・オプションは、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー・コンポーネントがインストールされ、稼働中である場合にのみ選択するようにしてください。

Windows ターゲットの削除

「IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット (Windows 版) のアンインストール」タスクを使用すると、ターゲット・ソフトウェアが既にインストールされている Windows コンピューターからターゲット・ソフトウェアを削除できます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「インストール」 > 「Windows」をクリックします。
2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット (Windows 版) のアンインストール」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲットを削除するターゲット・コンピューター (複数可) を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

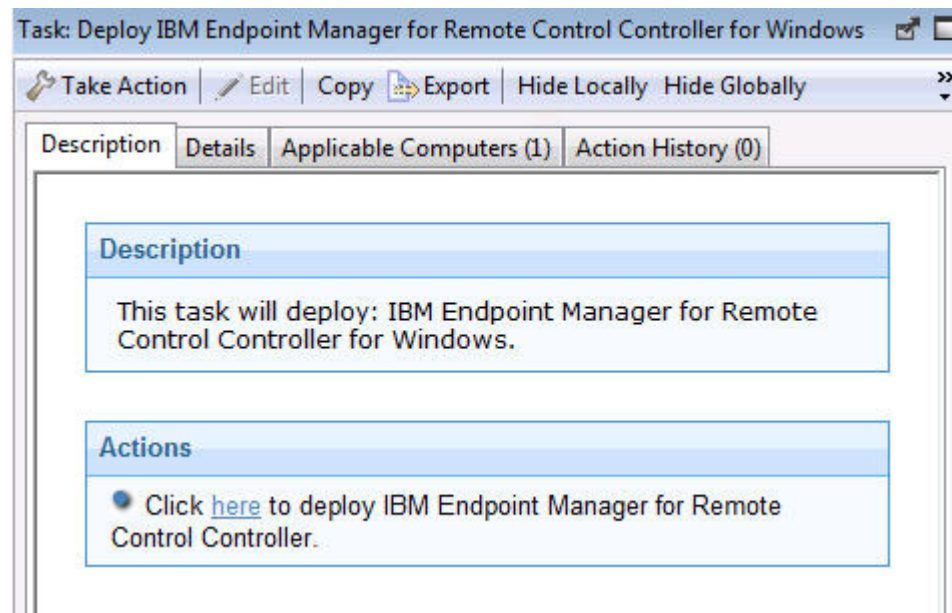
注: ターゲットの削除後に、いくつかのファイルが残っていることがありますが、これらはターゲット・プログラムの通常実行の中で作成されたものであり、自動的には削除されません。これらのファイルは、Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥IBM¥Tivoli¥Remote Control にあります。

Windows コントローラーのデプロイ

「IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー (Windows 版) のインストール」タスクを使用すると、コントローラー・ソフトウェアを Windows コンピューターにインストールできます。

注: ターゲットとのリモート・コントロール・セッションを IBM Endpoint Manager コンソールから開始できるようにするには、コンソールがインストールされているのと同じマシンにコントローラーをデプロイします。ただし、コントローラーがインストールされた場合、セッションを開始するためのメニュー項目の表示権限があるのは、インストール対象のマシンにログオンしている現行ユーザーのみであり、他のユーザーにはこのメニュー項目が表示されないことに注意してください。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「インストール」 > 「Windows」をクリックします。
2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー (Windows 版) のインストール」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、コントローラーをデプロイするターゲット・コンピューター (複数可) を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

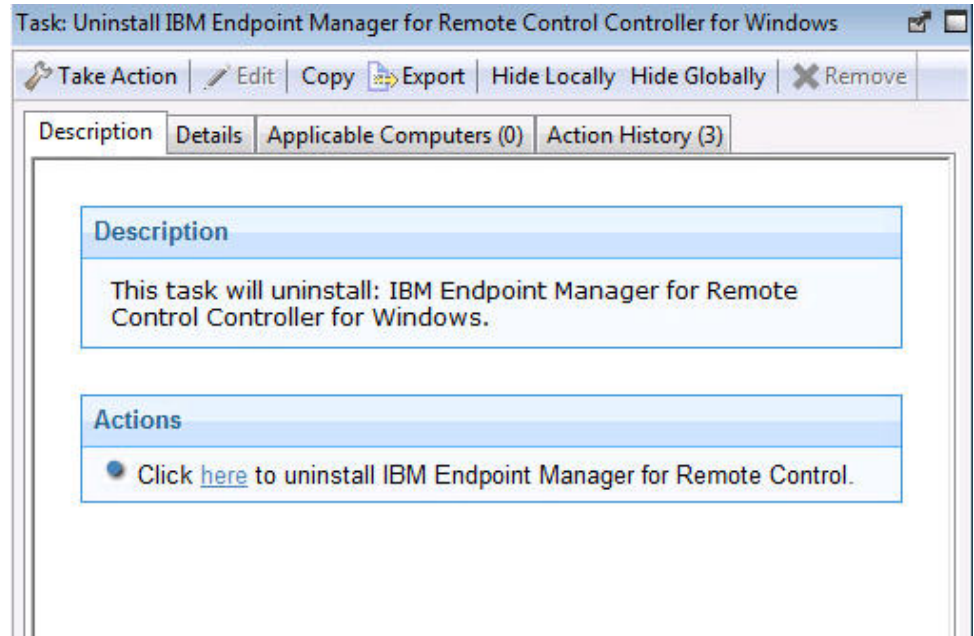
概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

Windows コントローラーの削除

「IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー (Windows 版) のアンインストール」タスクを使用すると、コントローラー・ソフトウェアが既にイ

インストールされている Windows コンピューターからコントローラー・ソフトウェアを削除できます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「インストール」 > 「Windows」をクリックします。
2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー (Windows 版) のアンインストール」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラーを削除するターゲット・コンピューター（複数可）を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

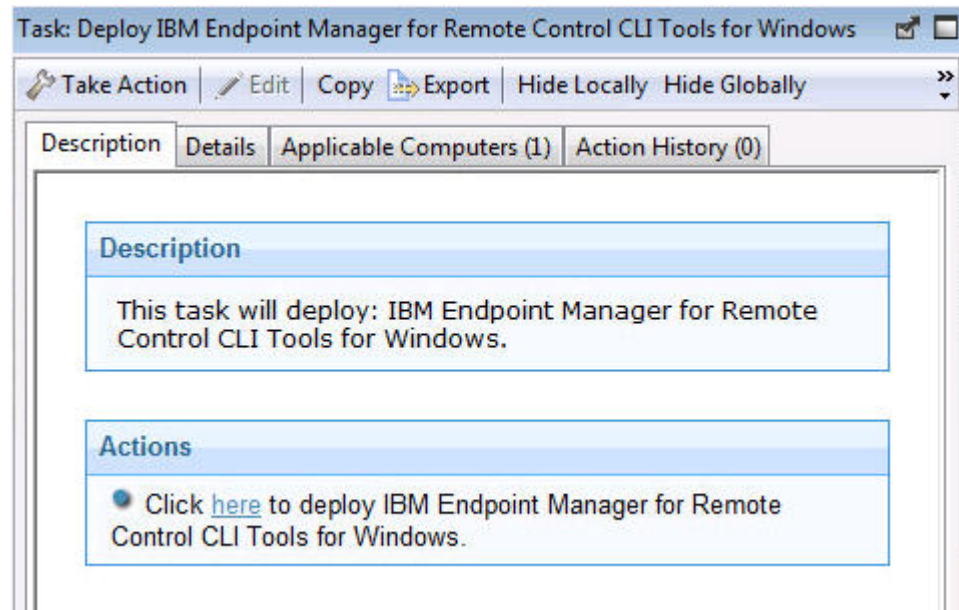
Windows CLI ツールのデプロイ

「IBM Endpoint Manager for Remote Control CLI ツール (Windows 版) のインストール」タスクを使用すると、CLI ツールを Windows コンピューターにインストールできます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

注:

1. ターゲットをインストールしたコンピューターには、ターゲットと共に CLI ツールが既にインストールされているため、これらのコンピューターに CLI ツールをインストールする必要はありません。
2. このタスクを適用するには、アクセス権限がある IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーの URL が必要です。

1. ナビゲーション・ツリーの「インストール」 > 「Windows」をクリックします。
2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control CLI ツール (Windows 版) のインストール」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーの URL を入力し、「OK」をクリックします。
5. 「アクションの実行」ウィンドウの「対象」タブで、CLI ツールをインストールする対象コンピューター (複数可) を決定するために必要なオプションを選択します。
6. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

これで、デプロイメント・タスクを実行するときに選択したターゲット・コンピューターの %Program Files%\IBM\tivoli\Remote Control\Target ディレクトリーに、次の 2 つの CLI ユーティリティーがインストールされているはずです。

wrc.exe

このツールを使用して、ターゲットとのリモート・コントロール・セッションを開始します。

wrcmdpcr.exe

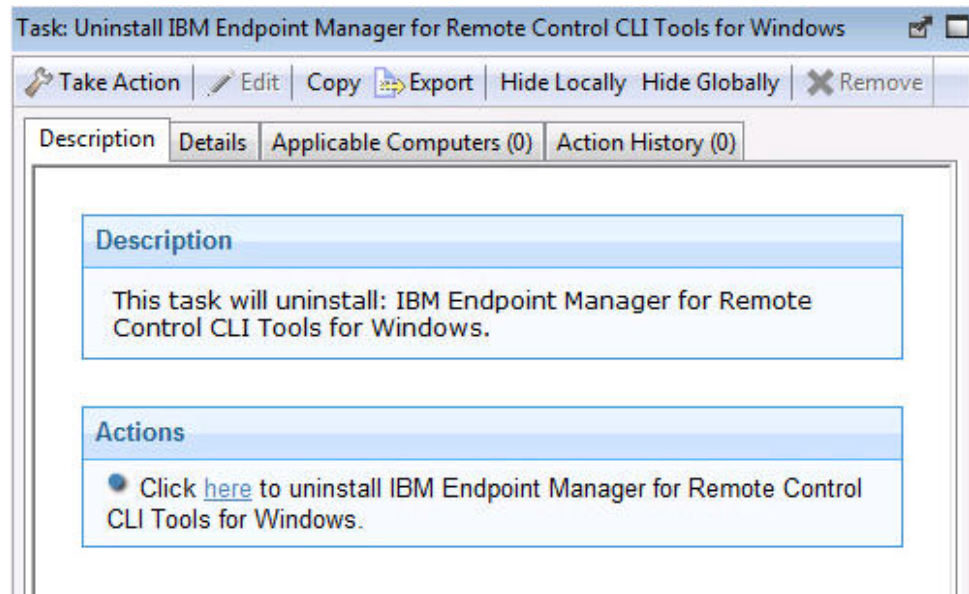
このツールを使用して、ターゲットでコマンドを実行し、そのコマンドからの出力を表示する操作を、コマンドが発行されるマシン上で行います。

コマンド・ライン・ツールの使用方法について詳しくは、「IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー・ユーザーズ・ガイド」を参照してください。

Windows CLI ツールの削除

「IBM Endpoint Manager for Remote Control CLI ツール (Windows 版) のアンインストール」タスクを使用すると、CLI ツールが既にインストールされている Windows コンピューターから CLI ツールを削除できます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「インストール」 > 「Windows」をクリックします。
2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control CLI ツール (Windows 版) のアンインストール」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、CLI ツールを削除するターゲット・コンピューター (複数可) を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

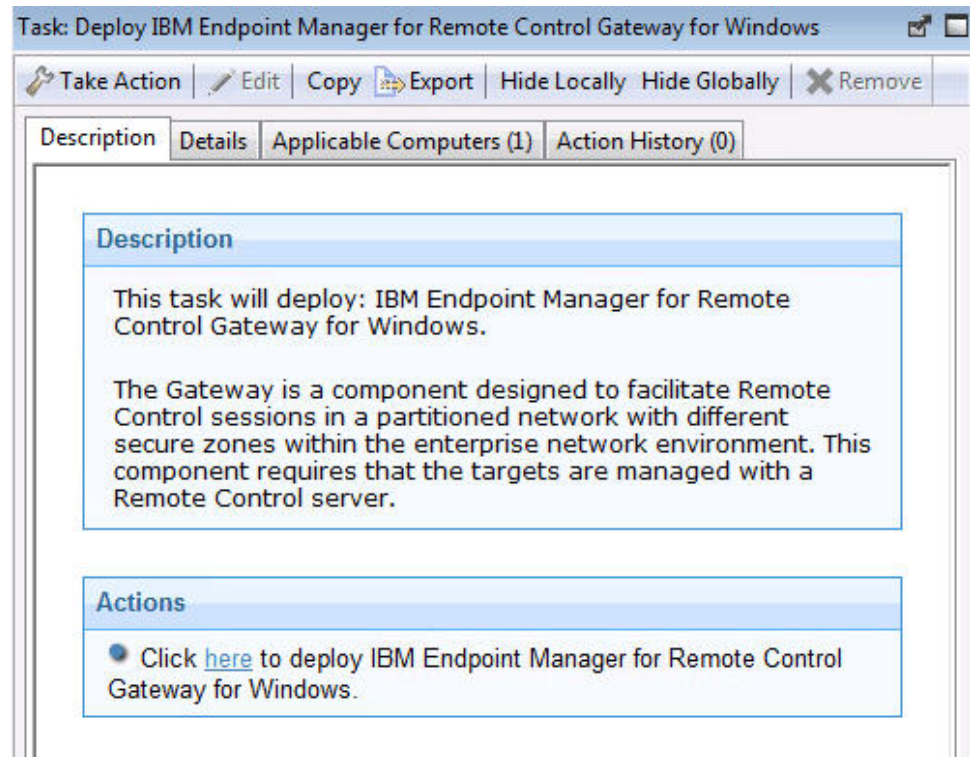
概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。CLI ツールは、選択されたターゲット・コンピューターにはもう存在しないはずです。

注: CLI ツールの削除後に、いくつかのファイルが残っていることがありますが、これらは CLI インストール・プログラムの通常実行の中で作成されたものであり、自動的に削除されません。これらのファイルは、Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥IBM¥Tivoli¥Remote Control にあります。

Windows ゲートウェイ・サポートのインストール

「IBM Endpoint Manager for Remote Control ゲートウェイ (Windows 版) のインストール」タスクを使用すると、ゲートウェイ・サポートを Windows コンピューターにインストールできます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「インストール」 > 「Windows」をクリックします。
2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control ゲートウェイ (Windows 版) のインストール」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、ゲートウェイ・サポートをデプロイするターゲット・コンピューター (複数可) を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

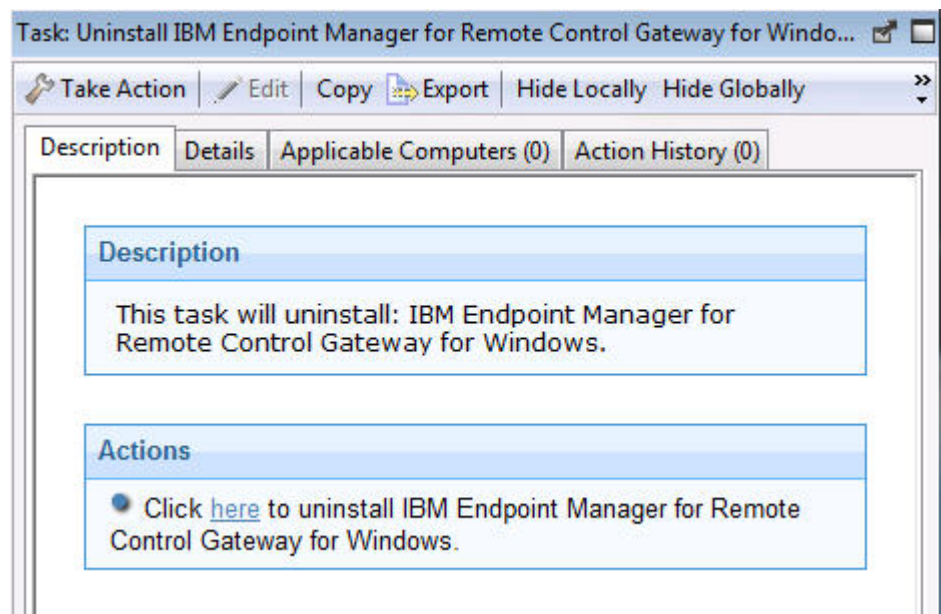
これで、デプロイメント・タスクを実行するときに選択したターゲット・コンピューターにゲートウェイ・サポートがインストールされているはずです。このサポートのファイルは、選択したターゲット・コンピューターの %Program Files%\IBM\tivoli\Remote Control\Gateway ディレクトリーにインストールされています。

ゲートウェイ・サポートを使用するには、ご使用の環境に合わせてゲートウェイ構成をセットアップする必要があります。詳しくは、「IBM Endpoint Manager for Remote Control 管理者ガイド」を参照してください。

Windows ゲートウェイ・サポートの削除

「IBM Endpoint Manager for Remote Control ゲートウェイ・サポート (Windows 版) のアンインストール」タスクを使用すると、ゲートウェイ・サポート・ファイルが既にインストールされている Windows コンピューターからこれらのファイルを削除できます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「インストール」 > 「Windows」をクリックします。
2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control ゲートウェイ (Windows 版) のアンインストール」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「対象」タブで、ゲートウェイ・サポートを削除する対象コンピューター（複数可）を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

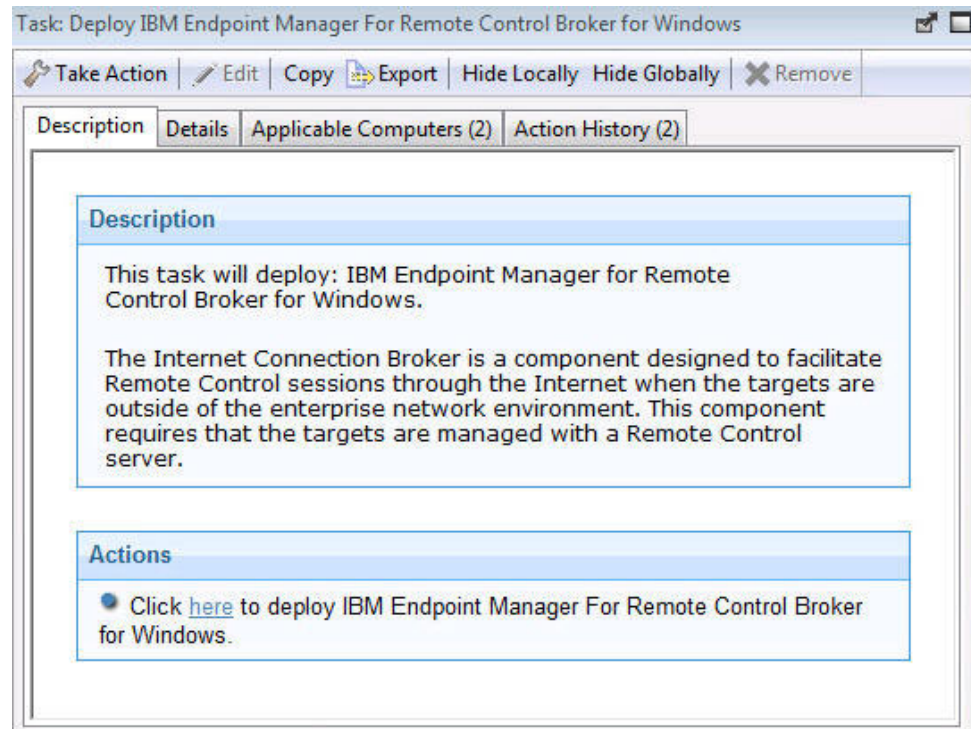
ゲートウェイ・サポート・ファイルは、選択されたターゲット・コンピューターにはもう存在しないはずです。

Windows ブローカー・サポートのデプロイ

「IBM Endpoint Manager for Remote Control ブローカー (Windows 版) のインストール (Deploy IBM Endpoint Manager for Remote Control Broker for Windows)」タスクを使用すると、ブローカー・サポートを Windows コンピューターにインストールできます。

このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「インストール」 > 「Windows」をクリックします。
2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control ブローカー (Windows 版) のインストール (Deploy IBM Endpoint Manager for Remote Control Broker for Windows)」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、ブローカー・サポートをデプロイするターゲット・コンピューター (複数可) を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

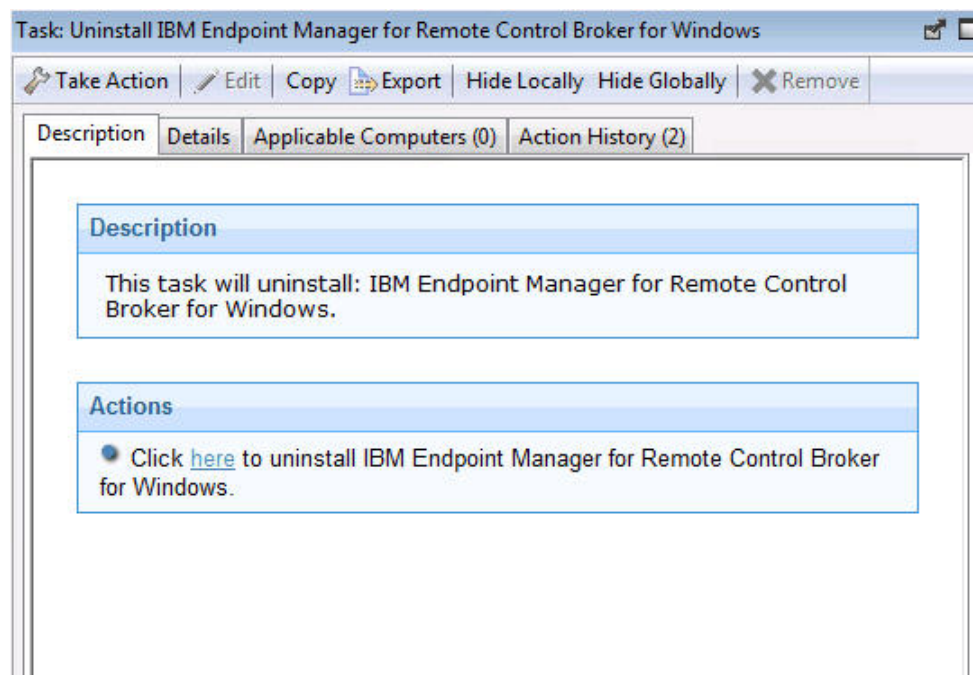
概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。これで、デプロイメント・タスクを実行するときに選択したターゲット・コンピューターにブローカー・サポートがインストールされているはずです。このサポートのファイルは、選択したターゲットの *[working dir]*¥Broker ディレクトリにインストールされています。*[working dir]* は、ブローカー・サポートをインストールする Windows のバージョンによって決まります。例えば、
C:¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥IBM¥Tivoli¥Remote Control になります。ブローカー・サポートを使用するには、ご使用の環境に合わせてブローカー構成をセットアップする必要があります。詳しくは、「IBM Endpoint Manager for Remote Control 管理者ガイド」を参照してください。

Windows ブローカー・サポートの削除

「IBM Endpoint Manager for Remote Control ブローカー (Windows 版) のアンインストール (Uninstall IBM Endpoint Manager for Remote Control Broker for Windows)」タスクを使用すると、ブローカー・サポートを Windows コンピューターから削除できます。

このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「インストール」 > 「Windows」をクリックします。
2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control ブローカー (Windows 版) のアンインストール (Uninstall IBM Endpoint Manager for Remote Control Broker for Windows)」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、ブローカー・サポートを削除するターゲット・コンピューター (複数可) を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。ブローカー・サポート・ファイルは、選択されたターゲットから削除されます。

Linux インストール

Linux インストール・ノードには、Linux 環境で以下のコンポーネントをインストールまたは削除するために使用できる一連のタスクが用意されています。

- ターゲット・ソフトウェアおよびコントローラー・ソフトウェア

- CLI ツール
- ゲートウェイ・サポート
- ブローカー・サポート

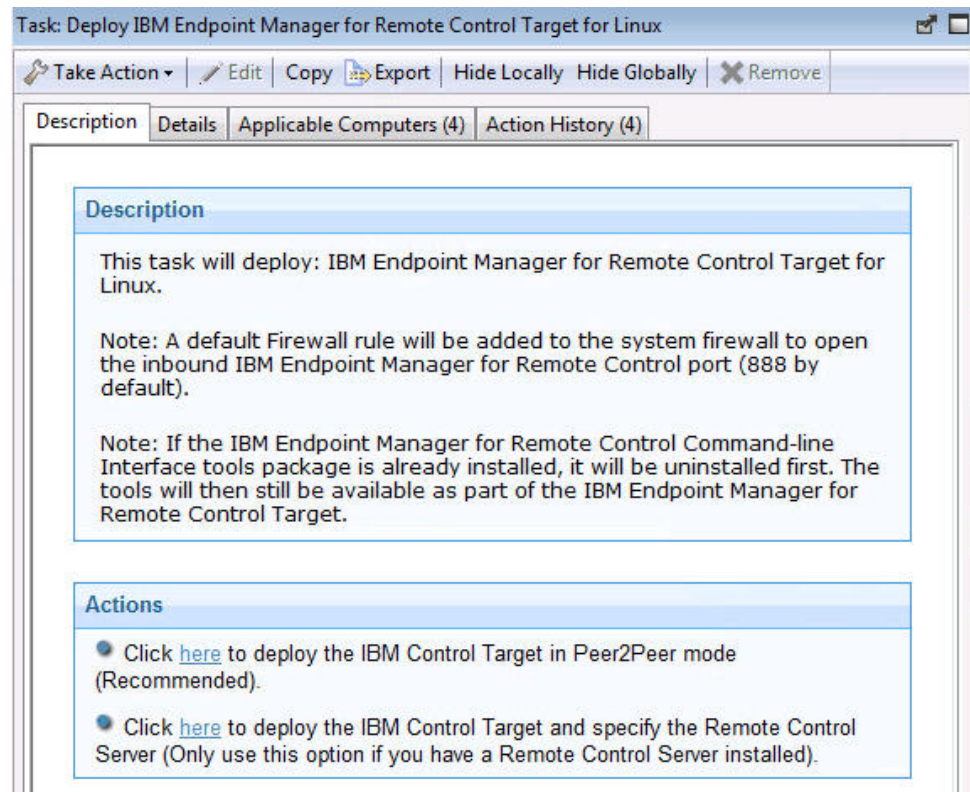
注: ターゲット、CLI、およびゲートウェイのコンポーネントを Red Hat 6.0、64 ビット・マシンにインストールするときに、ある特定のライブラリーがまだインストールされていない場合は、それらをその依存関係と共にインストールする必要があります。具体的には、すべてのコンポーネントにおいて glibc.i686 が必要であり、ターゲット・コンポーネントの場合はさらに libXmu.i686、libXi.i686、libXtst.i686 が必要となります。

Linux ターゲットのデプロイ

「IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲットのインストール (Linux 版)」タスクを使用すると、ターゲット・ソフトウェアを Linux コンピューターにインストールできます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「インストール」 > 「Linux」をクリックします。
2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲットのインストール (Linux 版)」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。

このタスクで有効なアクションは 2 つあります。必要なインストール方法を決定し、提示された指示に従ってください。



リモート・コントロール・ターゲットを P2P モードでデプロイ

このインストール方法を使用すると、IBM Endpoint Manager for Remote

Control サーバーを必要とせずに、コントローラーとターゲットの間に直接リモート・コントロール・セッションを確立できます。このインストール方法では、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー URL を指定する必要なしにターゲットがインストールされ、リモート・コントロール・セッションを確立するときには、このインストール方法により設定されたローカル・ターゲット・ポリシーが使用されます。ターゲットのインストール・プロパティについて詳しくは、54 ページの『ターゲット構成およびサーバー構成の管理』を参照してください。

「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲットをデプロイするターゲット・コンピューター（複数可）を決定するために必要なオプションを選択します。

「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

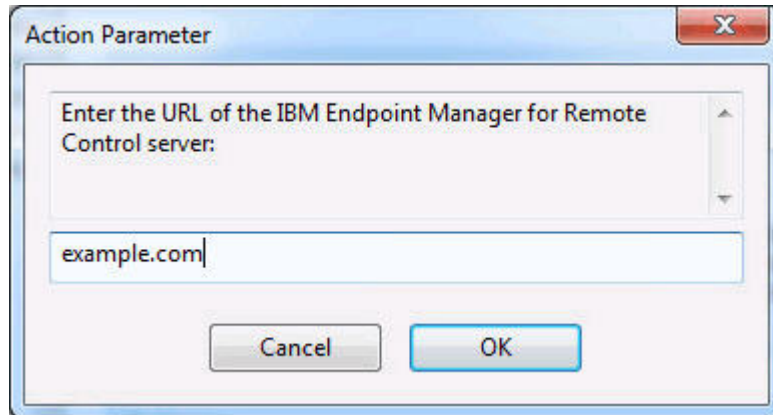
概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

注: ターゲットを将来 IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーに登録する場合は、IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット・ウィザードを使用すると、構成タスクを作成して、必要なサーバーのサーバー URL を指定することができます。選択したターゲットでこのタスクを実行すると、ターゲットは再構成され、サーバーに接続できるようになります。63 ページの『IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット構成タスクの作成』を参照してください。

リモート・コントロール・ターゲットをデプロイし、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーを指定

ターゲットを IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーに登録し、サーバーから起動されたりリモート・コントロール・セッションに参加させるには、このインストール・オプションを選択します。このインストール方法では、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー URL を指定する必要があります。このターゲットに対して、Remote Control サーバーから起動したりリモート・コントロール・セッションが要求された場合は、要求を認証するため、指定されたサーバーに接続します。要求が認証されると、セッションに対して設定されたポリシーが Remote Control サーバーからターゲットに渡され、セッションが確立されます。ターゲットのインストール・プロパティについて詳しくは、54 ページの『ターゲット構成およびサーバー構成の管理』を参照してください。

IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーの URL を入力し、「OK」をクリックします。



「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲットをデプロイするターゲット・コンピューター（複数可）を決定するために必要なオプションを選択します。

「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

注: このインストール・オプションは、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー・コンポーネントがインストールされ、稼働中である場合にのみ選択するようにしてください。

Linux ターゲットの削除

「IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット (Linux 版) のアンインストール」タスクを使用すると、ターゲット・ソフトウェアが既にインストールされている Linux コンピューターからターゲット・ソフトウェアを削除できます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「インストール」 > 「Linux」 > をクリックします。
2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット (Linux 版) のアンインストール」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。

4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲットを削除するターゲット・コンピューター (複数可) を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

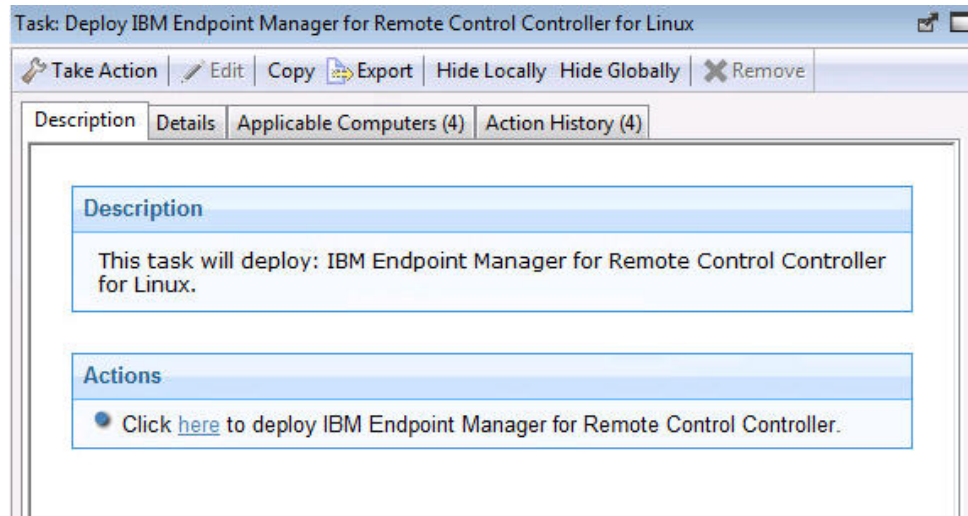
注: ターゲットの削除後に、いくつかのファイルが残っていることがありますが、これらはターゲット・プログラムの通常実行の中で作成されたものであり、自動的には削除されません。これらのファイルは、/opt/ibm および /var/opt/ibm/trc/target のディレクトリーにあります。

Linux コントローラーのインストール

「IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー (Linux 版) のインストール」タスクを使用すると、コントローラー・ソフトウェアを Linux コンピューターにインストールできます。

注: コントローラーを Red Hat 6.0、64 ビット・マシンにインストールする場合は、追加ライブラリー libXft.i686、libXmu.i686、libXp.i686、libXtst.i686 を、すべての依存関係と共にインストールする必要があります。
このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「インストール」 > 「Linux」をクリックします。
2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー (Linux 版) のインストール」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



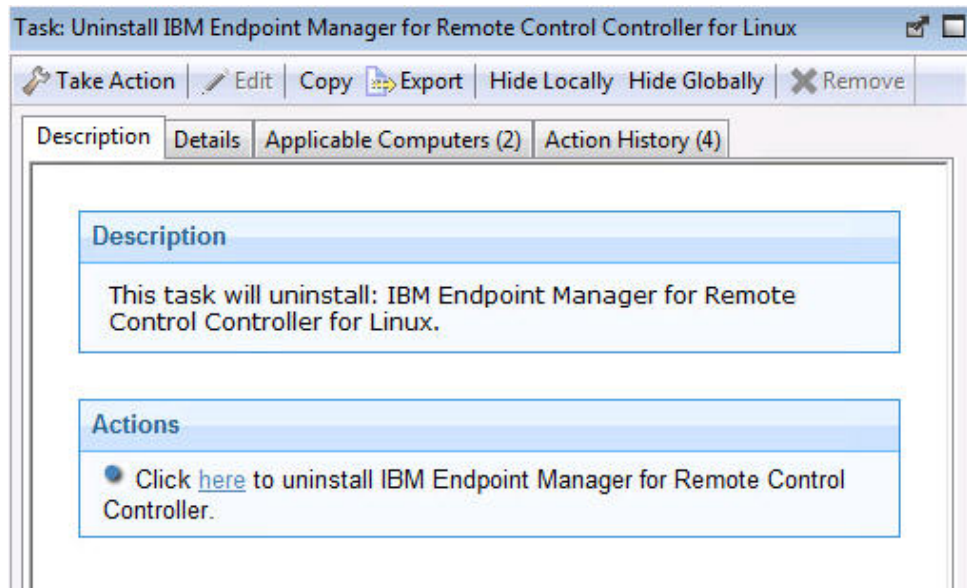
4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、コントローラーをデプロイするターゲット・コンピューター (複数可)を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

Linux コントローラーの削除

「IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー (Linux 版) のアンインストール」タスクを使用すると、コントローラー・ソフトウェアが既にインストールされている Linux コンピューターからコントローラー・ソフトウェアを削除できます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「インストール」 > 「Linux」をクリックします。
2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー (Linux 版) のアンインストール」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラーを削除するターゲット・コンピューター (複数可) を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

Linux CLI ツールのインストール

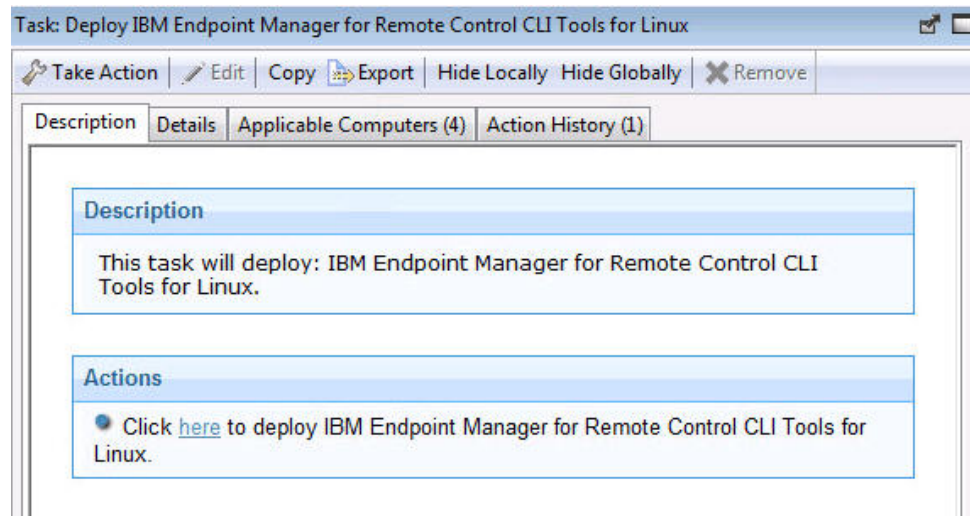
「IBM Endpoint Manager for Remote Control CLI ツール (Linux 版) のインストール」タスクを使用すると、CLI ツールを Linux コンピューターにインストールできます。

注:

1. ターゲットをインストールしたコンピューターには、ターゲットと共に CLI ツールが既にインストールされているため、これらのコンピューターに CLI ツールをインストールする必要はありません。
2. このタスクを適用するには、アクセス権限がある IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーの URL が必要です。

このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「インストール」 > 「Linux」をクリックします。
2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control CLI ツール (Linux 版) のインストール」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーの URL を入力し、「OK」をクリックします。
5. 「アクションの実行」ウィンドウの「対象」タブで、CLI ツールをインストールする対象コンピューター（複数可）を決定するために必要なオプションを選択します。
6. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

これで、デプロイメント・タスクを実行するときに選択したターゲット・コンピューターの `/opt/IBM/trc/target` ディレクトリーに、次の 2 つの CLI ユーティリティーがインストールされているはずです。

wrc このツールを使用して、ターゲットとのリモート・コントロール・セッションを開始します。

wrcmdpcr

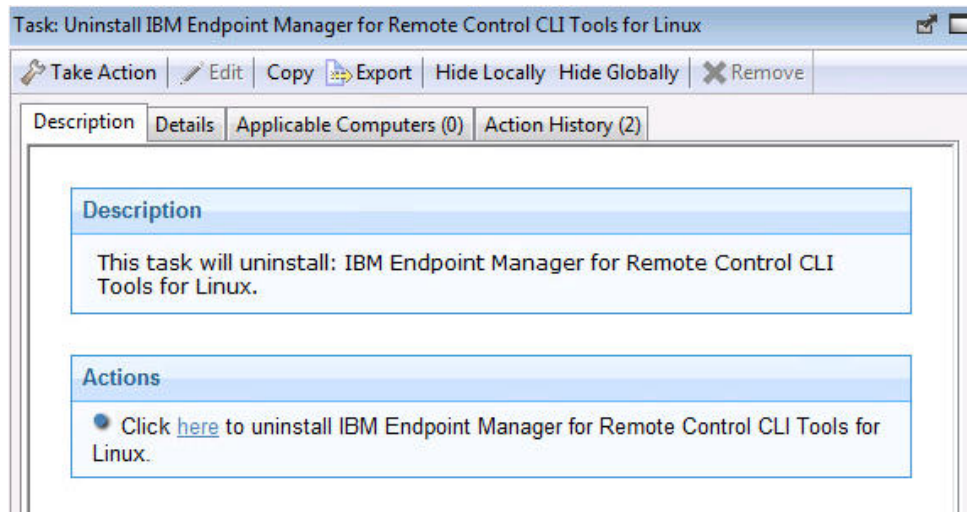
このツールを使用して、ターゲットでコマンドを実行し、そのコマンドからの出力を表示する操作を、コマンドが発行されるマシン上で行います。

コマンド・ライン・ツールの使用方法について詳しくは、「IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー・ユーザーズ・ガイド」を参照してください。

Linux CLI ツールの削除

「IBM Endpoint Manager for Remote Control CLI ツール (Linux 版) のアンインストール」タスクを使用すると、CLI ツールが既にインストールされている Linux コンピューターから CLI ツールを削除できます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「インストール」 > 「Linux」をクリックします。
2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control CLI ツール (Linux 版) のアンインストール」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、CLI ツールを削除するターゲット・コンピューター（複数可）を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

CLI ツールは、選択されたターゲット・コンピューターにはもう存在しないはずで

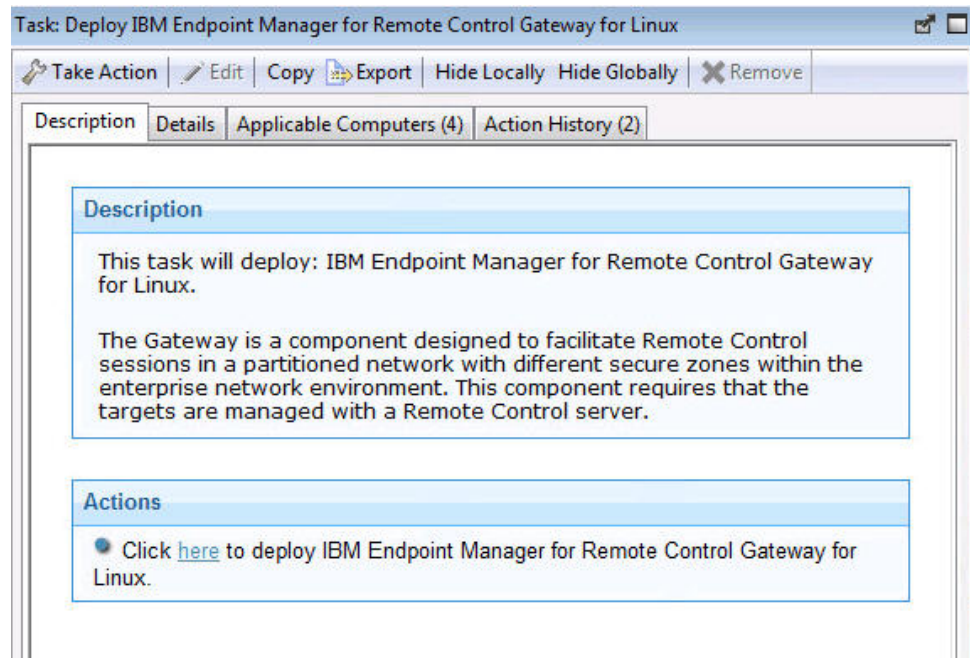
す。

注: CLI ツールの削除後に、いくつかのファイルが残っていることがありますが、これらは CLI ツール・プログラムの通常実行の中で作成されたものであり、自動的には削除されません。これらのファイルは、/etc、/opt/ibm、/var/opt/ibm/trc/cli、および /var/opt/ibm/trc/target のディレクトリーにあります。

Linux ゲートウェイ・サポートのインストール

「IBM Endpoint Manager for Remote Control ゲートウェイ (Linux 版) のインストール」タスクを使用すると、ゲートウェイ・サポートを Linux コンピューターにインストールできます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「インストール」 > 「Linux」をクリックします。
2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control ゲートウェイ (Linux 版) のインストール」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、ゲートウェイ・サポートをデプロイするターゲット・コンピューター（複数可）を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

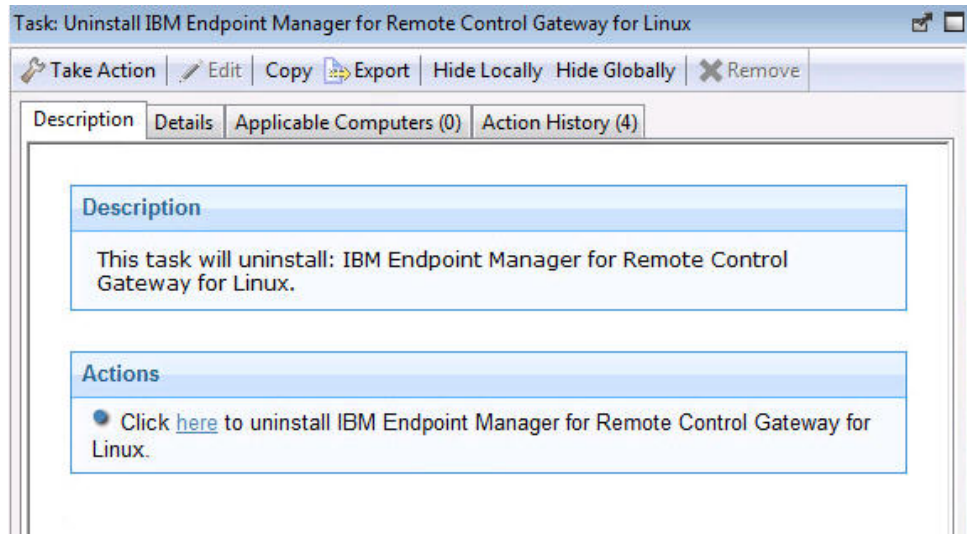
これで、デプロイメント・タスクを実行するときに選択したターゲット・コンピューターにゲートウェイ・サポートがインストールされているはずです。このサポートのファイルは、選択したターゲット・コンピューターの `/opt/IBM/trc/gateway` ディレクトリにインストールされています。

ゲートウェイ・サポートを使用するには、ご使用の環境に合わせてゲートウェイ構成をセットアップする必要があります。「IBM Endpoint Manager for Remote Control 管理者ガイド」を参照してください。

Linux ゲートウェイ・サポートの削除

「IBM Endpoint Manager for Remote Control ゲートウェイ (Linux 版) のアンインストール」タスクを使用すると、ゲートウェイ・サポート・ファイルが既にインストールされている Linux コンピューターからこれらのファイルを削除できます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「インストール」 > 「Linux」をクリックします。
2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control ゲートウェイ (Linux 版) のアンインストール」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「対象」タブで、ゲートウェイ・サポートを削除する対象コンピューター（複数可）を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

ゲートウェイ・サポートは、選択された対象コンピューターにはもう存在しないはずです。

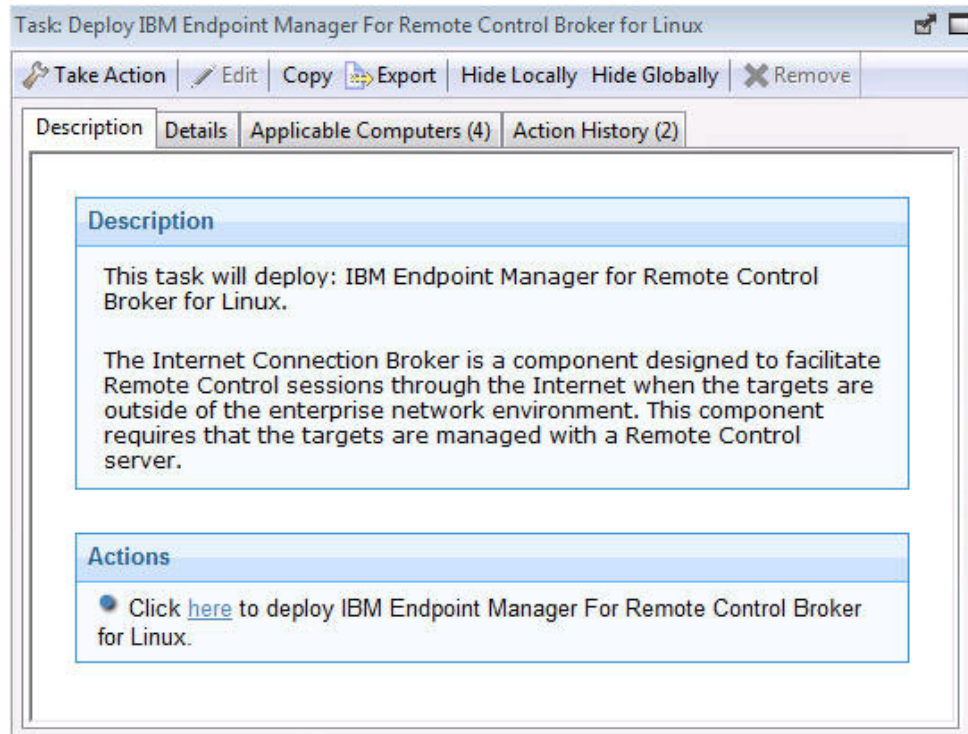
注: ゲートウェイ・サポートの削除後に、いくつかのファイルが残っていることがあります。これらはゲートウェイ・サポート・プログラムの通常実行の中で作成されたものであり、自動的に削除されません。これらのファイルは、`/opt/ibm`、および `/var/opt/ibm/trc/gateway` にあります。

Linux ブローカー・サポートのデプロイ

「IBM Endpoint Manager for Remote Control ブローカー (Linux 版) のインストール (Deploy IBM Endpoint Manager for Remote Control Broker for Linux)」タスクを使用すると、ブローカー・サポートを Linux コンピューターにインストールできます。

このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「インストール」 > 「Linux」をクリックします。
2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control ブローカー (Linux 版) のインストール (Deploy IBM Endpoint Manager for Remote Control Broker for Linux)」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、ブローカー・サポートをデプロイするターゲット・コンピューター（複数可）を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

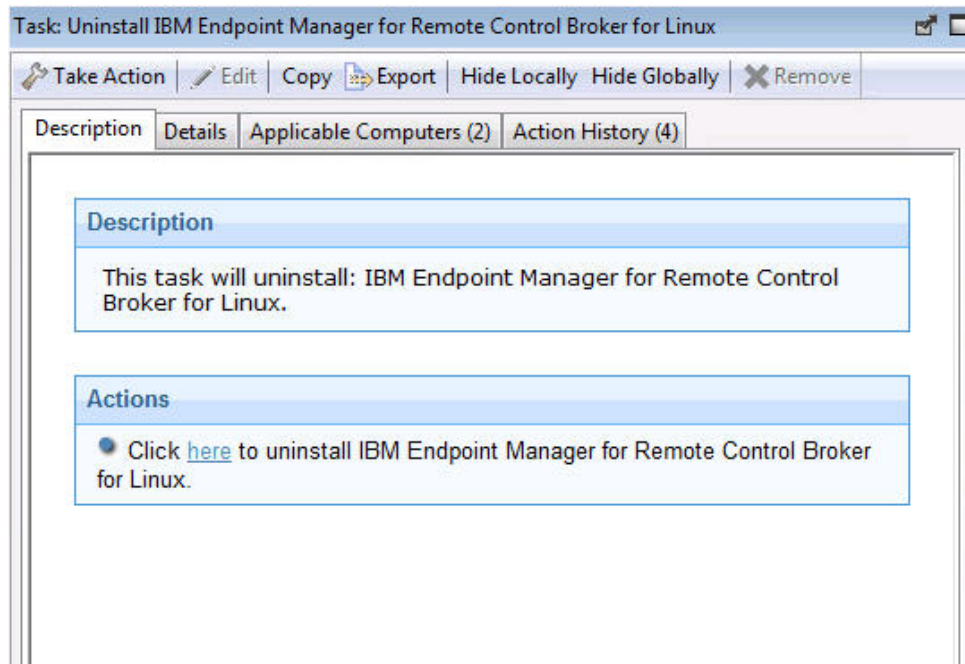
概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。これで、デプロイメント・タスクを実行するときに選択したターゲット・コンピューターにブローカー・サポートがインストールされているはずです。このサポートのファイルは、選択したターゲット・コンピューターの `/opt/IBM/trc/broker` ディレクトリにインストールされています。ブローカー・サポートを使用するには、ご使用の環境に合わせてブローカー構成をセットアップする必要があります。詳しくは、「IBM Endpoint Manager for Remote Control 管理者ガイド」を参照してください。

Linux ブローカー・サポートの削除

「IBM Endpoint Manager for Remote Control ブローカー (Linux 版) のアンインストール (Uninstall IBM Endpoint Manager for Remote Control Broker for Linux)」タスクを使用すると、ブローカー・サポートを Linux コンピューターから削除できます。

このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「インストール」 > 「Linux」をクリックします。
2. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control ブローカー (Linux 版) のアンインストール (Uninstall IBM Endpoint Manager for Remote Control Broker for Linux)」をクリックします。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。

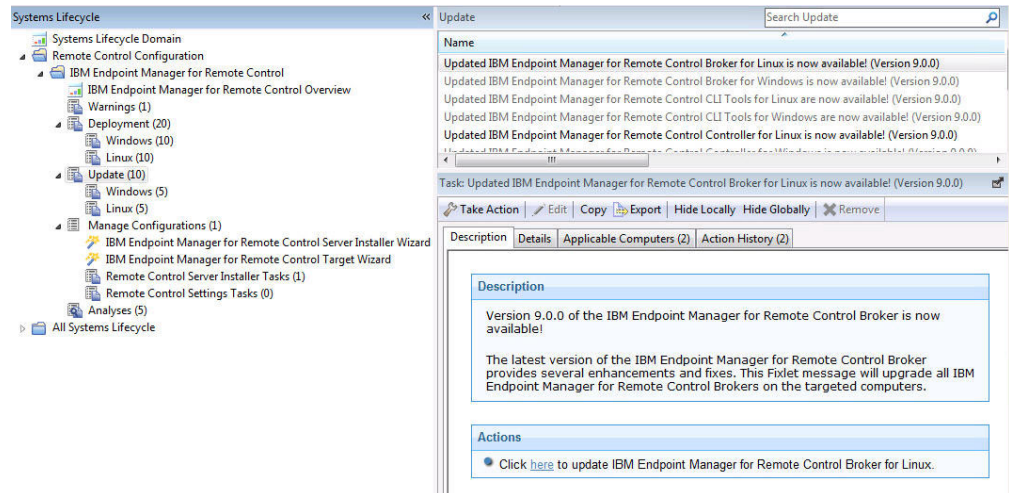


4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、ブローカー・サポートを削除するターゲット・コンピューター（複数可）を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。ブローカー・サポート・ファイルは、選択されたターゲットから削除されます。

IBM Endpoint Manager for Remote Control コンポーネントの更新

IBM Endpoint Manager for Remote Control ナビゲーション・ツリーの「更新」ノードには、オペレーティング・システム固有のサブノードが 2 つあります。これらのサブノードでは、ターゲット・コンポーネントとコントローラー・コンポーネントの最新レベルが提供されます。ご使用の環境に古いバージョンの IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット・コンポーネントおよびコントローラー・コンポーネントが既にインストールされている場合は、「更新」ノードを使用すると、これらのコンポーネントを新しいバージョンにアップグレードします。関連するオペレーティング・システムを選択すると、ノードに、関連 IBM Endpoint Manager for Remote Control コンポーネントのアップグレードに使用できるタスクのリストが表示されます。



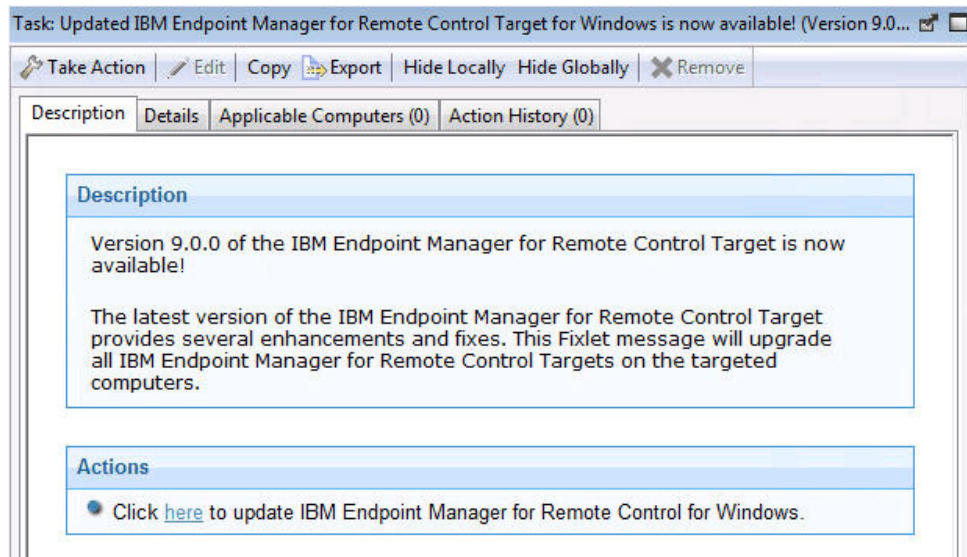
Windows コンポーネントの更新

Windows サブノードには、Windows 環境用の最新レベルの IBM Endpoint Manager for Remote Control コンポーネント・ソフトウェアが用意されています。これらのコンポーネントには、IBM Endpoint Manager for Remote Control に適用された最新の機能拡張およびフィックスが含まれます。

Windows ターゲットの更新

Windows タスクを使用して、Windows コンピューター上のターゲット・ソフトウェアを更新できます。これらのタスクでは、選択したバージョンに適用されている新規機能拡張およびフィックスがインストールされますが、現在インストールされているターゲット構成はそのまま保持されます。例えば、バージョン 9.0.0 タスクを選択すると、現在のターゲット構成を保持しながら、バージョン 9.0.0 に含まれる新規機能拡張またはフィックスがそのターゲット適用されます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「更新」 > 「**Windows**」をクリックします。
2. 必要な Windows ターゲットの更新を選択します。例えば、「**更新された IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット (Windows 版) を提供しています (バージョン 9.0.0)**」を選択します。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、ターゲットの更新をインストールするターゲット・コンピューター（複数可）を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

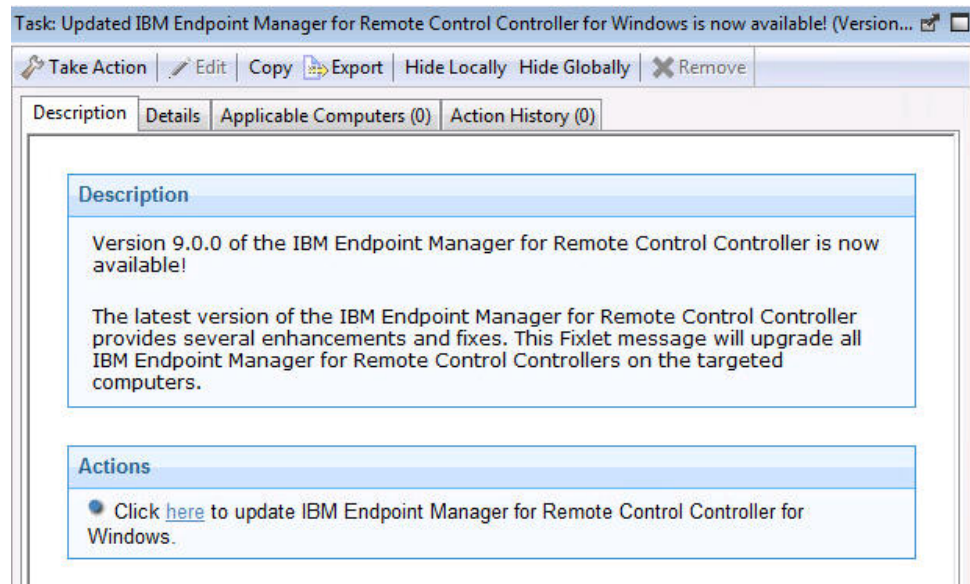
概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

これで、選択されたターゲット・コンピューターは、選択された更新に該当するターゲット・ソフトウェアのバージョンにアップグレードされます。

Windows コントローラーの更新

Windows タスクを使用して、Windows コンピューター上のコントローラー・ソフトウェアを更新します。これらのタスクにより、現在インストールされているコントローラーは、タスクが対象とするバージョンにアップグレードされます。例えば、バージョン 9.0.0 タスクを選択すると、バージョン 9.02.0 コントローラーに含まれる新規機能拡張またはフィックスが現在のコントローラーに適用されます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「更新」 > 「Windows」をクリックします。
2. 必要な Windows コントローラーの更新を選択します。例えば、「更新された IBM Endpoint Manager for Remote Control Controller (Windows 版) を提供しています (バージョン 9.0.0)」を選択します。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、コントローラーの更新をインストールするターゲット・コンピューター（複数可）を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

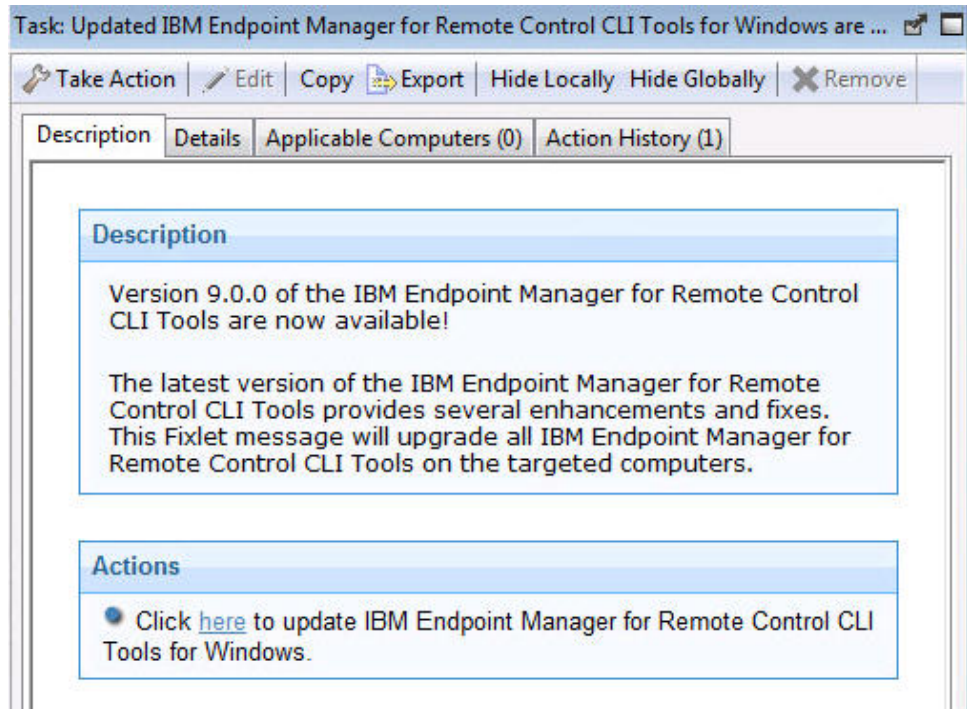
概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

選択されたターゲット上のコントローラー・ソフトウェアは、選択された更新のバージョンにアップグレードされます。

Windows コマンド・ライン・ツールの更新

Windows タスクを使用して、Windows コンピューター上の CLI ツールを更新します。これらのタスクでは、選択したバージョンに適用されている新規機能拡張およびフィックスがインストールされますが、現在インストールされている CLI ツール構成はそのまま保持されます。例えば、バージョン 9.0.0 タスクを選択すると、現在の CLI ツール構成を保持しながら、バージョン 9.0.0 に含まれる新規機能拡張またはフィックスがその CLI ツールに適用されます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「更新」 > 「Windows」をクリックします。
2. 必要な Windows CLI の更新を選択します。例えば、「**IBM Endpoint Manager for Remote Control CLI ツール (Windows 版) を提供しています (バージョン 9.0.0)**」を選択します。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、CLI の更新をインストールするターゲット・コンピューター (複数可)を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

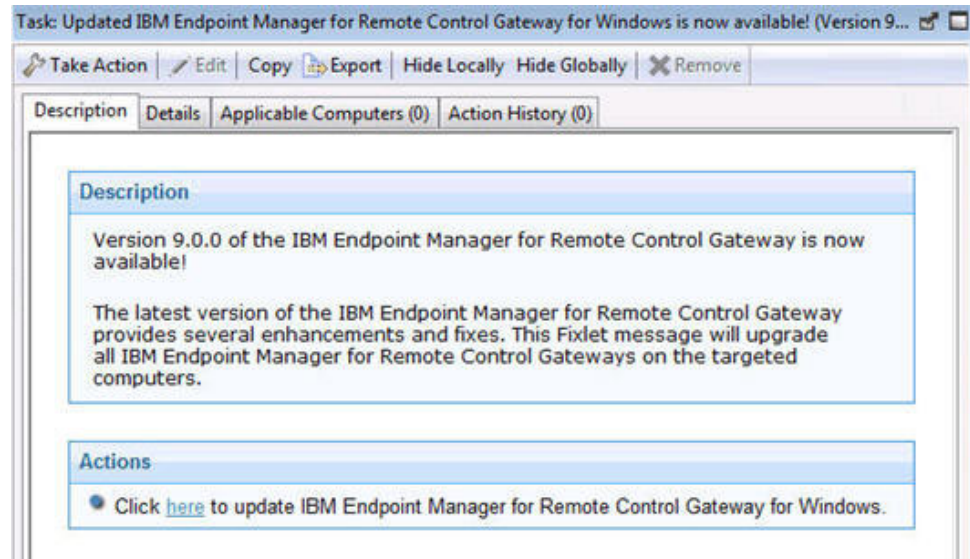
選択されたターゲット上の CLI ツールは、選択された更新のバージョンにアップグレードされます。

Windows ゲートウェイ・サポートの更新

Windows タスクを使用して、Windows コンピューター上のゲートウェイ・サポート・ファイルを更新します。これらのタスクでは、選択したバージョンに適用されている新規機能拡張およびフィックスがインストールされますが、現在インストールされているゲートウェイ構成はそのまま保持されます。例えば、バージョン 9.0.0 タスクを選択すると、現在のゲートウェイ構成を保持しながら、バージョン 9.0.0 に含まれる新規機能拡張またはフィックスがそのゲートウェイに適用されます。

このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「更新」 > 「Windows」をクリックします。
2. 必要な Windows ゲートウェイの更新を選択します。例えば、「更新された IBM Endpoint Manager for Remote Control ゲートウェイ (Windows 版) を提供しています (Updated IBM Endpoint Manager for Remote Control Gateway for Windows is now available!) (バージョン 9.0.0)」を選択します。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、ゲートウェイの更新をインストールするターゲット・コンピューター (複数可) を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

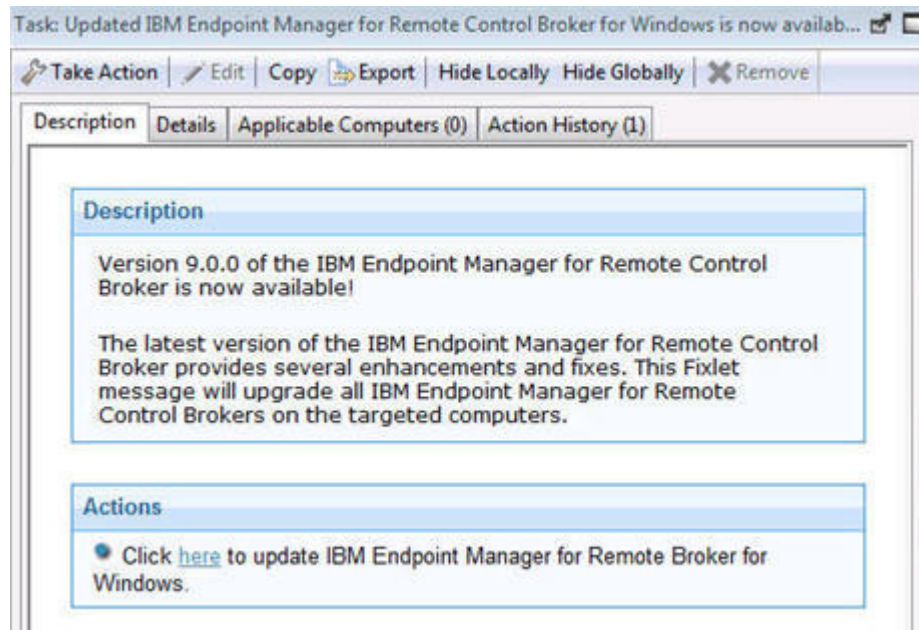
概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

選択されたターゲット上のゲートウェイ・サポートは、選択された更新のバージョンにアップグレードされます。

Windows ブローカー・サポートの更新

Windows タスクを使用して、Windows コンピューター上のブローカー・ソフトウェアを更新できます。これらのタスクにより、現在インストールされているブローカー・サポート・ファイルは、タスクが対象とするバージョンにアップグレードされます。例えば、バージョン 9.0.0 タスクを選択すると、バージョン 9.0.0 ブローカーに含まれる新規機能拡張またはフィックスが現在のブローカー・ファイルに適用されます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「更新」 > 「Windows」をクリックします。
2. 必要な Windows ブローカーの更新を選択します。例えば、「更新された IBM Endpoint Manager for Remote Control ブローカー (Windows 版) を提供しています (Updated IBM Endpoint Manager for Remote Control Broker for Windows is now available!) (バージョン 9.0.0)」を選択します。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、ブローカーの更新をインストールするターゲット・コンピューター（複数可）を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

選択されたターゲット上のブローカー・ソフトウェアは、選択された更新のバージョンにアップグレードされます。

Linux コンポーネントの更新

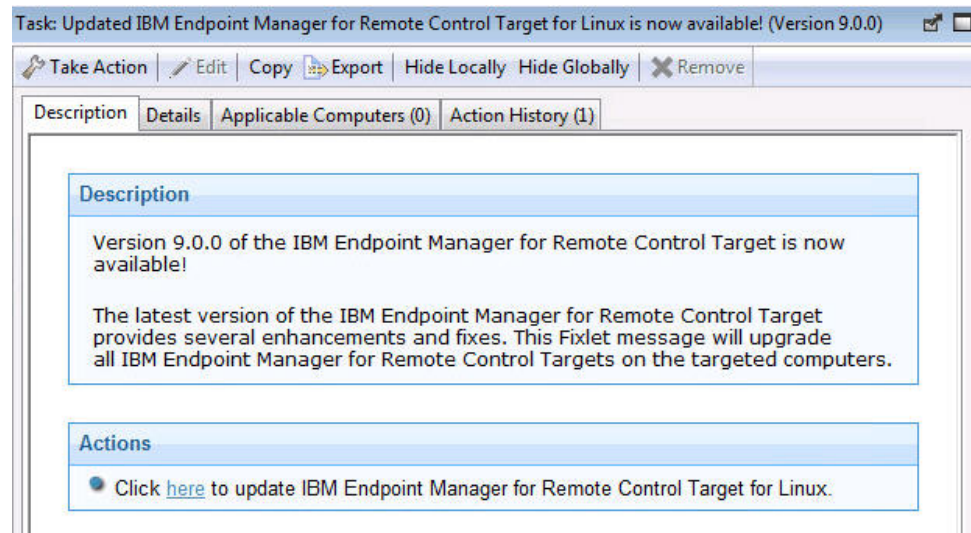
Linux サブノードには、Linux 環境用の最新レベルの IBM Endpoint Manager for Remote Control コンポーネント・ソフトウェアが用意されています。これらのコンポーネントには、IBM Endpoint Manager for Remote Control に適用された最新の機能拡張およびフィックスが含まれます。

Linux ターゲットの更新

Linux タスクを使用して、Linux コンピューター上のターゲット・ソフトウェアを更新できます。これらのタスクでは、選択したバージョンに適用されている新規機能拡張およびフィックスがインストールされますが、現在インストールされているターゲット構成はそのまま保持されます。例えば、バージョン 9.0.0 タスクを選択すると、現在のターゲット構成を保持しながら、バージョン 9.0.0 に含まれる新規機能拡張またはフィックスがそのターゲットに適用されます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「更新」 > 「Linux」をクリックします。
2. 必要な Linux ターゲットの更新を選択します。例えば、「更新された IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット (Linux 版) を提供していません (バージョン 9.0.0)」を選択します。

3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



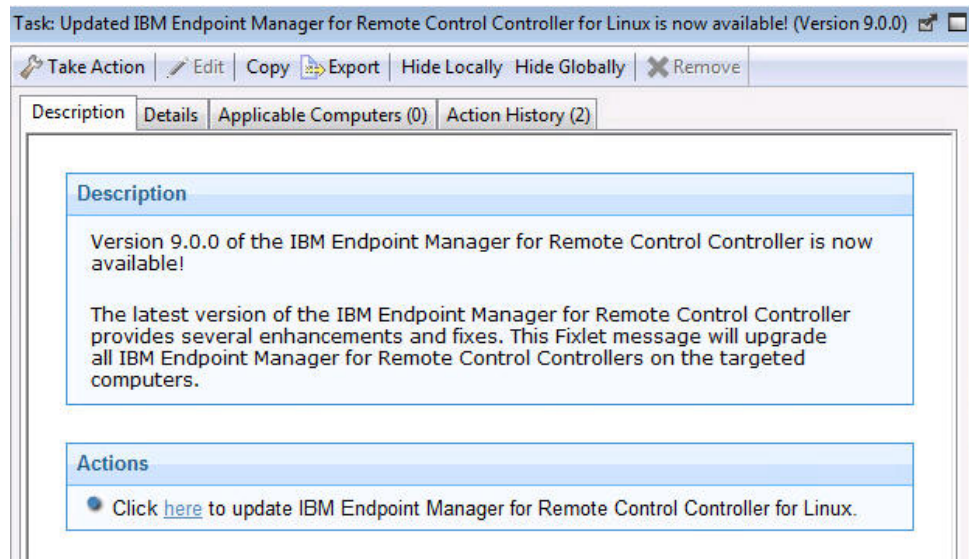
4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、ターゲットの更新をインストールするターゲット・コンピューター(複数可) を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

Linux コントローラーの更新

Linux タスクを使用して、Linux コンピューター上のコントローラー・ソフトウェアを更新できます。これらのタスクにより、現在インストールされているコントローラーは、タスクが対象とするバージョンにアップグレードされます。例えば、バージョン 9.0.0 タスクを選択すると、バージョン 9.0.0 コントローラーに含まれる新規機能拡張またはフィックスが現在のコントローラーに適用されます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「更新」 > 「Linux」をクリックします。
2. 必要な Linux コントローラーの更新を選択します。例えば、「更新された IBM Endpoint Manager for Remote Control Controller (Linux 版) を提供しています (バージョン 9.0.0)」を選択します。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



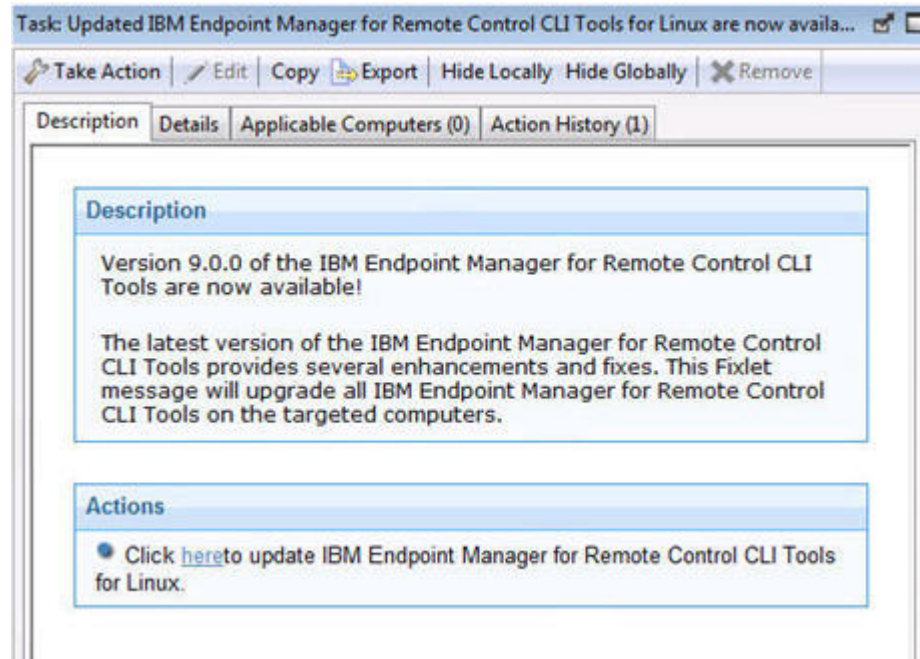
4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、コントローラーの更新をインストールするターゲット・コンピューター（複数可）を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。選択されたターゲット上のコントローラー・ソフトウェアは、選択された更新のバージョンにアップグレードされます。

Linux コマンド・ライン・ツールの更新

Linux タスクを使用して、Linux コンピューター上の CLI ツールを更新します。これらのタスクでは、選択したバージョンに適用されている新規機能拡張およびフィックスがインストールされますが、現在インストールされている CLI ツール構成はそのまま保持されます。例えば、バージョン 9.0.0 タスクを選択すると、現在の CLI ツール構成を保持しながら、バージョン 9.0.0 に含まれる新規機能拡張またはフィックスがその CLI ツールに適用されます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「更新」 > 「Linux」をクリックします。
2. 必要な Linux CLI の更新を選択します。例えば、「**IBM Endpoint Manager for Remote Control CLI ツール (Linux 版) を提供しています (バージョン 9.0.0)**」を選択します。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、CLI の更新をインストールするターゲット・コンピューター (複数可)を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

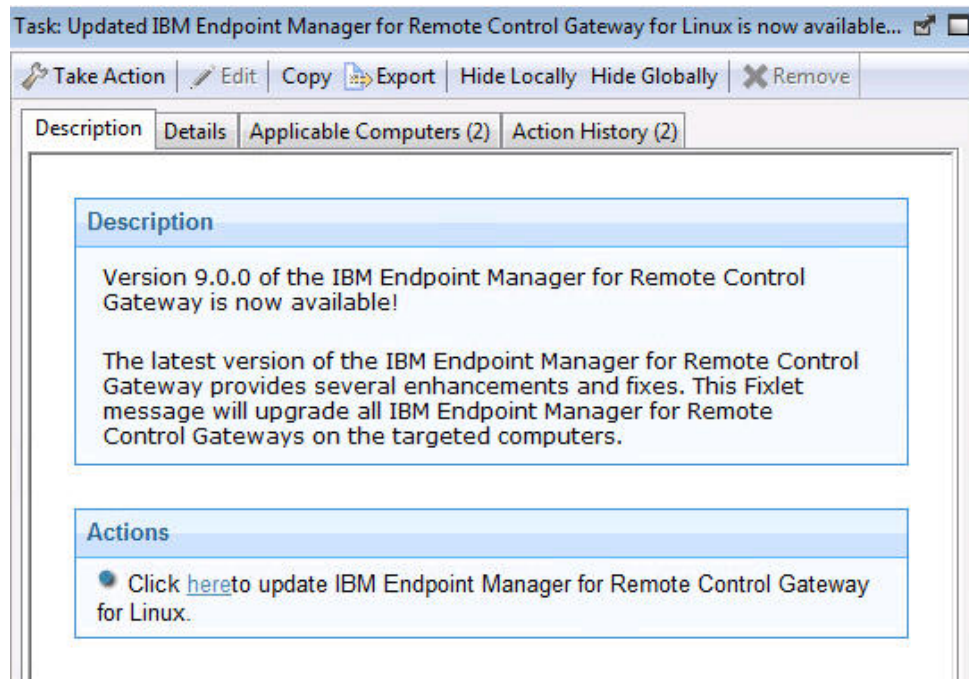
選択されたターゲット上の CLI ツールは、選択された更新のバージョンにアップグレードされます。

Linux ゲートウェイ・サポートの更新

Linux タスクを使用して、Linux コンピューター上のゲートウェイ・サポート・ファイルを更新します。これらのタスクでは、選択したバージョンに適用されている新規機能拡張およびフィックスがインストールされますが、現在インストールされているゲートウェイ構成はそのまま保持されます。例えば、バージョン 9.0.0 タスクを選択すると、現在のゲートウェイ構成を保持しながら、バージョン 9.0.0 に含まれる新規機能拡張またはフィックスがそのゲートウェイに適用されます。

このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「更新」 > 「Linux」をクリックします。
2. 必要な Linux ゲートウェイの更新を選択します。例えば、「更新された IBM Endpoint Manager for Remote Control ゲートウェイ (Linux 版) を提供しています (Updated IBM Endpoint Manager for Remote Control Gateway for Linux is now available!) (バージョン 9.0.0)」を選択します。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、ゲートウェイの更新をインストールするターゲット・コンピューター（複数可）を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

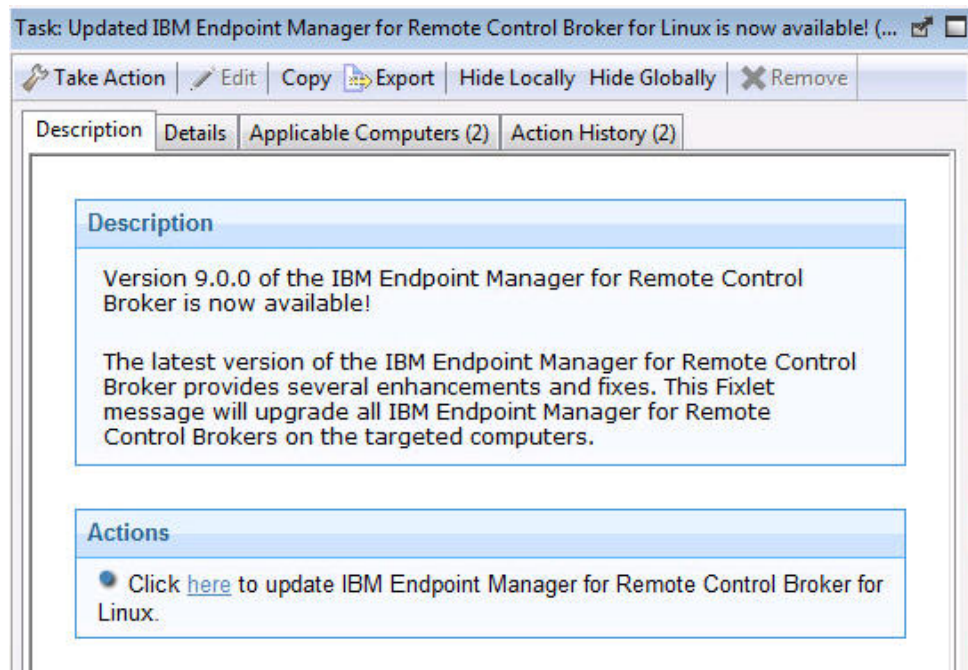
概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

選択されたターゲット上のゲートウェイ・サポートは、選択された更新のバージョンにアップグレードされます。

Linux ブローカー・サポートの更新

Linux タスクを使用して、Linux コンピューター上のブローカー・ソフトウェアを更新できます。これらのタスクにより、現在インストールされているブローカー・サポート・ファイルは、タスクが対象とするバージョンにアップグレードされます。例えば、バージョン 9.0.0 タスクを選択すると、バージョン 9.0.0 ブローカーに含まれる新規機能拡張またはフィックスが現在のブローカー・ファイルに適用されます。このタスクを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ナビゲーション・ツリーの「更新」 > 「Linux」をクリックします。
2. 必要な Linux ブローカーの更新を選択します。例えば、「更新された IBM Endpoint Manager for Remote Control ブローカー (Linux 版) を提供していません (Updated IBM Endpoint Manager for Remote Control Broker for Linux is now available!) (バージョン 9.0.0)」を選択します。
3. タスク・ウィンドウで、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



4. 「アクションの実行」ウィンドウの「ターゲット」タブで、ブローカーの更新をインストールするターゲット・コンピューター（複数可）を決定するために必要なオプションを選択します。
5. 「OK」をクリックして、プライベート・キーのパスワードを入力します。

概要画面にタスクの進行状況が表示され、タスク完了時には完了ステータスが表示されます。

選択されたターゲット上のブローカー・ソフトウェアは、選択された更新のバージョンにアップグレードされます。

リモート・コントロール・セッションの開始

IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー・コンポーネントおよびターゲット・コンポーネントを使用すると、両者の間にリモート接続を確立して、ターゲット・システムをモニターまたは制御することができます。リモート・コントロール・セッションの確立方法としては、ターゲットとコントローラーの間で直接行われる P2P セッションと、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーから起動される管理セッションの 2 つがあります（詳細は 5 ページの『第 2 章 定義』を参照してください）。

リモート・コントロール・セッションの終了方法について詳しくは、「IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー・ユーザーズ・ガイド」を参照してください。

P2P セッションの開始

コントローラーとターゲットの間の P2P リモート・コントロール・セッションを開始するには 2 つの方法があります。

- IBM Endpoint Manager コンソールから行う方法

- コントローラー・コンポーネントを使用する方法

IBM Endpoint Manager コンソールからの P2P セッションの開始

IBM Endpoint Manager コンソールには、コンソールから直接 P2P セッションを開始する方法がメニュー・オプションの形で用意されています。このメニュー・オプションは、セッションを開始するターゲット・マシンを右クリックすると表示されます。

注:

1. ターゲットとのリモート・コントロール・セッションを IBM Endpoint Manager コンソールから開始できるようにするには、コンソールがインストールされているのと同じマシンにコントローラーをデプロイする必要があります。ただし、コントローラーがデプロイされた場合、セッションを開始するためのメニュー項目の表示権限があるのは、デプロイ対象のマシンにログオンしている現行ユーザーのみであり、他のユーザーにはこのメニュー項目が表示されないことに注意してください。詳細については、89 ページの『付録 A. よくある質問』を参照してください。
2. メニュー項目を使用可能にするには、選択されたコンピューターについて「**Remote Control のインストールおよびセキュリティ・オプション**」分析がアクティブであり、IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲットがアクティブであると報告している必要があります。

P2P セッションを確立するには、以下のステップを実行します。

1. ターゲット・コンピューターのリストから、リモート・コントロール・セッションを開始する対象となるターゲットを右クリックします。
2. 「**IBM Endpoint Manager for Remote Control**」を選択します。

注:

- a. このアクションは、コンソールにおいて、コンピューター・リストが表示されるどのセクションでも実行できます。
 - b. ターゲット・システムに古いバージョンのコントローラーがインストールされている場合は、代わりに「**Tivoli® Remote Control**」がメニュー項目として表示される可能性があります。
3. 「接続のオープン」ウィンドウが表示され、接続先となるターゲットの IP アドレスまたは URLが指定されています。

4. プロキシを使用する場合は、「**プロキシの使用**」を選択し、必要なプロトコルを選択して、関連情報を入力します。

サーバー

プロキシ・サーバーのホスト名または IP アドレス

ポート プロキシ・サーバーに必要なポート

プロキシは認証が必要です

プロキシ・サーバーを認証する場合は、このオプションを選択します。認証に必要なユーザー名とパスワードを指定します。

5. 必要なセッション・タイプを選択します。 確立できるセッション・タイプについて詳しくは、「IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー・ユーザーズ・ガイド」を参照してください。

注:

- a. ログイン・ウィンドウが表示された場合は、有効な Windows ID およびパスワードを入力して、先に進みます。
- b. ターゲットに設定されたポリシーに応じて、ユーザー確認ウィンドウがターゲットで表示される場合があります。ターゲット・ユーザーは、セッションを受け入れるか、または拒否することができます。

セッションが受け入れられて開始されると、ターゲットにローカルに設定されたポリシーによって、セッション中に実行できるアクションが決まります。P2P セッションの詳細、およびコントローラー UI で使用できる機能については、「IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー・ユーザーズ・ガイド」を参照してください。

コントローラーを使用した P2P セッションの開始

コントローラー・コンポーネントがインストールされている任意のコンピューターから、P2P セッションを開始できます。コントローラー・コンポーネントを使用して P2P セッションを開始するには、以下のステップを実行します。

1. コントローラーを始動します。

Windows

- a. 「スタート」 > 「すべてのプログラム」をクリックします。
- b. 「IBM Endpoint Manager for Remote Control」 > 「コントローラー」をクリックします。

Linux

コントローラーを始動するには、オペレーティング・システム・アプリケーション・インターフェースから IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー・アプリケーションを見つけるか、以下のコマンドを実行します。

```
java jar /opt/ibm/trc/controller/TRCConsole.jar
```

2. 51 ページの『IBM Endpoint Manager コンソールからの P2P セッションの開始』のステップ 3 (51 ページ) 以降の説明に従って、セッションを開始します。

セッションが受け入れられて開始されると、ターゲットにローカルに設定されたポリシーによって、セッション中に実行できるアクションが決まります。P2P セッションの詳細、およびコントローラー UI で使用できる機能については、「IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー・ユーザーズ・ガイド」を参照してください。

サーバーから起動されるリモート・コントロール・セッションの開始

IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー UI から起動されるリモート・コントロール・セッションを開始するには、サーバー・コンポーネントがインストールされ、稼動している必要があります。サーバー・インストール構成タスクの作成および実行について詳しくは、55 ページの『IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー・インストール・タスクの作成』を参照してください。

注: サーバーは、インストール・ファイルを使用してインストールすることもできます。詳しくは、「IBM Endpoint Manager for Remote Control インストール・ガイド」を参照してください。

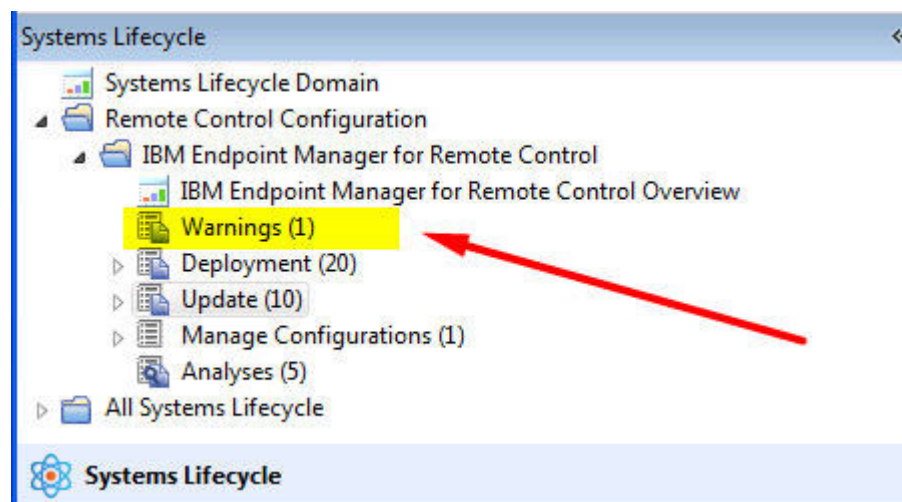
サーバー・コンポーネントをインストールしたら、「IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー・ユーザーズ・ガイド」を使用して、サーバー UI へのアクセスおよびログオン方法の詳細を確認してください。IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーから起動されたりリモート・コントロール・セッションでは、コントローラー・ユーザーとターゲットが所属するグループ間でアクセス許可リンクが設定されている必要があります。このアクセス許可リンクによって、セッションに有効なポリシーが決定されます。ユーザー・グループおよびターゲット・グループの作成、アクセス許可リンクの作成、およびリモート・コントロール・セッションのポリシーの解決方法については、「IBM Endpoint Manager for Remote Control 管理者ガイド」を参照してください。

サーバー・コンポーネントをインストールし、関連グループおよびアクセス許可リンクを作成したら、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー UI を使用してリモート・コントロール・セッションを開始できます。詳しくは、「IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー・ユーザーズ・ガイド」を参照してください。

警告への対処

検出プロセス中に、IBM Endpoint Manager for Remote Control コンポーネントの通常操作を妨げる問題が検出された場合は、IBM Endpoint Manager for Remote Control ナビゲーション・ツリーに「警告」ノードが表示されます。

注: 検出プロセス中に問題が検出されない場合、ナビゲーション・パネルにこのノードは現れません。



このノードには、該当するコンピューターでのアクション実行および問題の解決に使用できる、関連 Fixlet が表示されます。IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット・ソフトウェアをインストールすると、IBM Endpoint Manager for Remote Control の受信ポートを開くためのデフォルト・ファイアウォール・ルールが作成されます。ターゲット・オペレーティング・システムがこのポートをブロックしている場合は、IBM Endpoint Manager for Remote Control の受信 TCP 接続を有効にするためのルールの追加に使用できる、一連の Fixlet が表示されます。

注: SUSE ファイアウォール Fixlet は、ファイアウォールが手動で始動される場合は関連せず、ファイアウォールが自動モードの場合にのみ関連します。

ターゲット構成およびサーバー構成の管理

IBM Endpoint Manager for Remote Control には、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー構成またはターゲット構成をインストールするタスクの作成に使用できる 2 つのウィザードがあります。これらのタスクは、すべてのサーバーまたはターゲットに対して、あるいは特定のサーバーまたはターゲットに対して実行できます。

IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー・インストール・タスクの作成

IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー・インストーラー・ウィザードでは、インストール・タスクを作成できます。このタスクを Windows® および Linux® (Redhat および SUSE) で使用すると、完全に機能する自己完結型の IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーを、次のいずれかのコンポーネント設定でインストールできます。

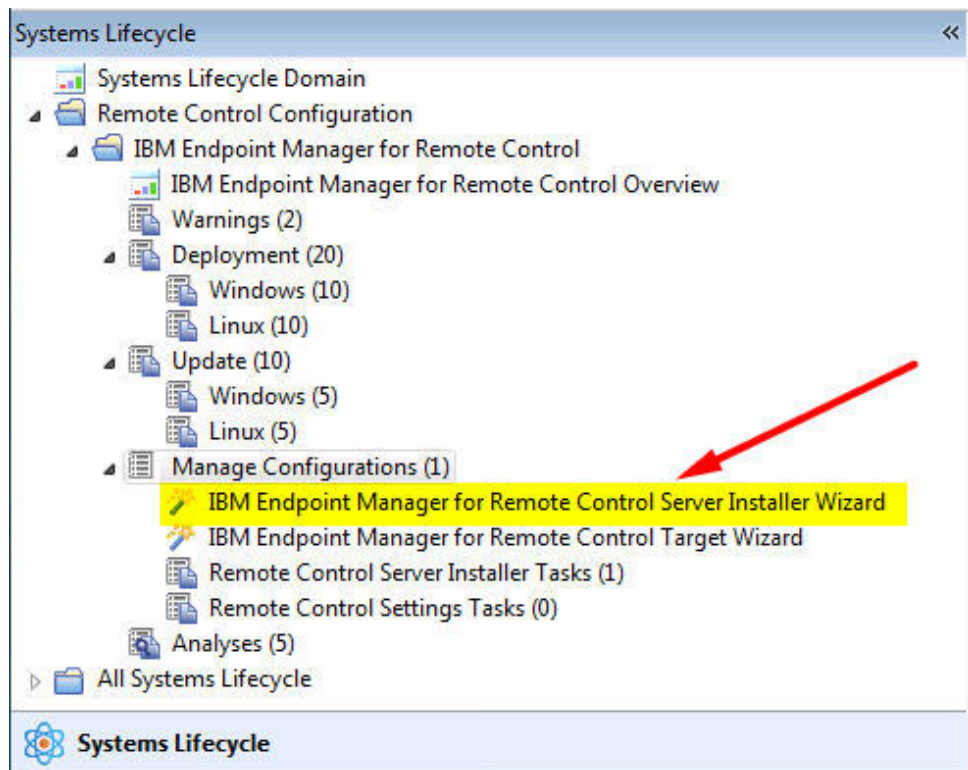
- WebSphere Application Server 8.5 Liberty Profile および Derby データベースを備えた IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー。
- WebSphere Application Server 8.5 Liberty Profile と、IBM DB2 9.x、10.1、または 10.5 (Workgroup(WSE) または Enterprise Edition(ESE))、Oracle 10g または 11g、もしくは MS SQL 2005、2008、または 2012 を備えた IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー。

注:

1. DB2、MS SQL または Oracle データベース・オプションを選択する場合は、サーバー・インストール・タスクを実行する前に、既にデータベースがインストールされ、データベース・インスタンスが作成されている必要があります。
2. DB2 9.7 GA バージョンを使用する場合、DB2 には生成されたキー値で NULL 値が返されるという問題があるため、DB2 9.7 フィックスパック 1 にアップグレードする必要があります。

IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー・インストーラー・ウィザードにアクセスするには、以下のステップを実行します。

1. IBM Endpoint Manager for Remote Control ナビゲーション・ツリーで、「設定の管理」 > 「IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー・インストーラー・ウィザード」を選択します。

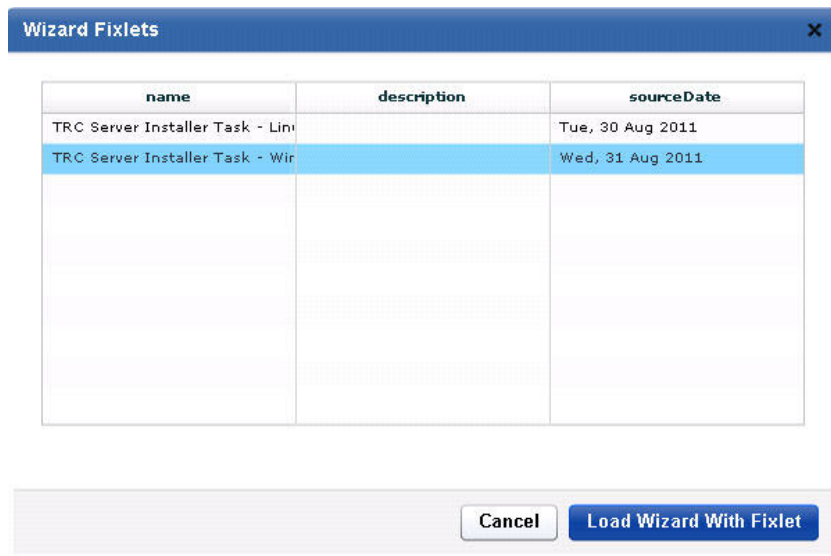


2. 構成値を設定します。

「既存のタスクから設定を読み込む」

ウィザードは最初はサーバー構成のデフォルト値を表示しますが、これらの値は要件に合うように変更できます。サーバー構成を既に作成し保存した場合は、「既存のタスクから設定を読み込む」をクリックすると、保存されている値の表示を選択できます。

- a. 「既存のタスクから設定を読み込む」をクリックします。
- b. 「ウィザードの Fixlet」画面で、必要なタスクを選択します。



- c. 「**Fixlet を使用してウィザードを読み込み**」をクリックします。構成値がウィザードにロードされます。

「デフォルト値にリセット」

この機能を使用すると、すべての選択をクリアし、ウィザード内の値をデフォルト構成値に戻すことができます。

「設定タスクの作成 (Create a configuration task)」

データベースを選択し、必要な値を設定します。

- Derby インストール - 『デフォルト・サーバー構成の作成』を参照してください。
- DB2 - 59 ページの『DB2 サーバー構成の作成』を参照してください。
- MSSQL - 61 ページの『MS SQL サーバー構成の作成』を参照してください。
- Oracle - 62 ページの『Oracle サーバー構成の作成』を参照してください。

3. 必要な値を設定したら、インストール・タスクを保存します。ステップ 5 (58 ページ)を参照してください。

デフォルト・サーバー構成の作成

デフォルト・サーバー構成を使用して、IBM Endpoint Manager for Remote Control のインストールの一部として含まれている組み込み Derby データベースをインストールし、使用します。データベースは、ローカルにインストールされます。デフォルト・インストール・タスクを作成するには、以下のステップを実行します。

1. 関連するオペレーティング・システムを選択します。
2. IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーがインストールされるインストール・ディレクトリーを入力するか、提示されているデフォルトを受け入れます。

注: Websphere Application Server は、名前に英語以外の文字が含まれているディレクトリーにはインストールできません。このインストールでは、組み込みバージョンの WebSphere Application Server がインストールされます。そのため、インストール・ファイルの宛先には、英語以外の文字が含まれているものを選択しないでください。

3. 「**Derby**」を選択し、関連するデータベース・パラメーター値を入力します。

「使用するデータベース名」

IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーで使用されるデータベースの名前を指定するか、提示されているデフォルトを受け入れます。

4. 必要なサーバー・インストール・パラメーター値を入力します。

「デフォルトでターゲットの URL に HTTPS を使用」

サーバーがターゲット・ソフトウェアに http 通信を指示するか https 通信を指示するかを選択します。これを選択した場合は、https が使用されます。

注: https の場合は、「**Websphere サーバーのアドレス**」フィールドで完全修飾ドメイン名を使用する必要があります。

「WebSphere サーバーのアドレス」

IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーの完全修飾名。例: trcserver.example.com

注: 完全修飾名を入力してください。この名前を使用して、ターゲットが初めてサーバーに接続するときにそのターゲットに渡される URL を trc.properties ファイル内に作成します。完全修飾名が誤っていると、ターゲットが次にサーバーに接続する予定のときに、サーバーに正常に接続できない可能性があります。

「URL の Web パス」

サーバー URL の Web パスを指定します (http://trcserver.example.com/webpath)。例: trc の場合 http://trcserver.example.com/trc

「HTTP ポート」

サーバーのポートを指定します。デフォルトは 80 です。

「HTTPS ポート」

SSL を使用する場合は、ポートを指定します。デフォルトは 443 です。

「管理者の電子メール」

管理者の電子メール・アドレスを指定します。例: admin@company.com

注: IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー内で E メール機能を使用するには、メール・サーバーがインストールされている必要があります。E メールを使用可能にする方法については、「IBM Endpoint Manager for Remote Control インストール・ガイド」を参照してください。

「FIPS を有効にする」

サーバーで FIPS 準拠性を使用可能にするには、これを選択します。FIPS 準拠を有効にする方法については、「IBM Endpoint Manager for Remote Control インストール・ガイド」を参照してください。

「NIST SP800-131A 準拠性を使用可能にする (FIPS を使用可能にする) (Enable NIST SP800-131A compliance (Enables FIPS))」

すべての暗号機能について NIST SP800-131A 準拠のアルゴリズムと鍵強度を使用する場合は、このオプションを選択します。NIST SP800-131A 準拠の有効化については、「IBM Endpoint Manager for Remote Control インストール・ガイド」を参照してください。

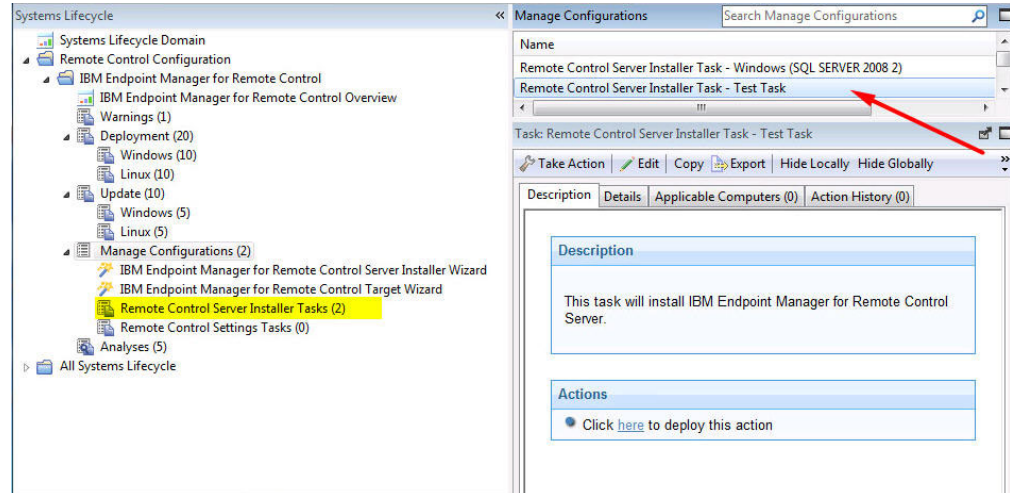
「一部の Web パラメーターを調整する」

追加のポート値を設定するには、このオプションを選択します。

5. 以下のステップを実行して、構成を保存します。

- a. 「サーバー・インストール・タスクの作成 (Create Server Installation Task)」をクリックします。
- b. タスクに関連する情報を入力して、「OK」をクリックします。
- c. プライベート・キーのパスワードを入力し、「OK」をクリックします。

これで、作成したタスクは「Remote Control サーバー・インストーラー・タスク」サブノードのリスト・パネルに表示されます。



DB2 サーバー構成の作成

DB2 データベースを使用するサーバー・インストール構成を作成できます。このデータベースは、ローカルまたはリモートにインストールされていて、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーのインストール前に、データベース・インスタンスが作成されている必要があります。DB2 サーバー構成タスクを作成するには、以下のステップを実行します。

1. 必要なオペレーティング・システムを選択します。
2. IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーがインストールされるインストール・ディレクトリを入力するか、提示されているデフォルトを受け入れます。
3. 関連する DB2 バージョンを選択し、関連するデータベース・パラメーターを入力します。

「データベース・サーバーのアドレス」

データベース・サーバーの IP アドレスまたはホスト名。

注: DB2 がローカルにインストールされている場合は、127.0.0.1 を使用できます。DB2 がリモート・システムにインストールされている場合は、リモート・システムの IP アドレスを入力します。

「データベース接続に使用するポート番号」

DB2 がインストールされているポート

注:

- a. DB2 Windows® のデフォルト・ポートは 50000 であり、Linux® の場合は 50001 です。
- b. リモート DB2 インストールは、タイプ 4 接続に制限されます。ローカル・インストールではタイプ 2 またはタイプ 4 を使用できません。タイプ 2 接続の場合は、ポート値を 0 に設定してください。

「使用するデータベース名」

IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーで使用されるデータベースの名前を指定するか、提示されているデフォルトを受け入れます。

「データベース管理者のユーザー ID」

データベースにログオンするときに使用する管理者ユーザー ID を指定します。このユーザー ID は、データベースへの管理アクセス権限を持っている必要があります。

「データベース管理者のパスワード」

データベースに接続するための管理者パスワードを指定します。

「JDBC ドライバーへのパス」

DB2 jar ファイル (db2jcc.jar および db2jcc_license.jar) へのパスを指定します。

「db2profile スクリプトへのパス」

DB2 インスタンスの db2profile へのパスを指定します。例:
/home/db2inst1/sqllib/db2profile

注: このフィールドは、Linux でのインストールにおいて、データベースの作成を選択する場合にのみ使用可能です。

「DB2 ライブラリーへのパス」

DB2 ライブラリーへのパスを指定します。例: /home/db2inst1/sqllib/lib32

注: このフィールドは、Linux でのインストールにおいて、データベースの作成を選択する場合にのみ使用可能です。

「ローカルの場合、データベースを作成」

DB2 がローカル (127.0.0.1) にインストールされている場合は、サーバー・インストール時にブランク・データベースを作成することを選択できます。既存のローカル・データベースをドロップして新規データベースを作成するように選択することもできます。

注: リモート・データベースを使用する場合は、データベースの作成を選択しないでください。

「ローカルの場合、既存のデータベースをドロップ」

DB2 がローカル (127.0.0.1) にインストールされている場合は、データベースをドロップして新規データベースを作成することを選択できます。

注: リモート・データベースを使用する場合、データベースのドロップを選択しないでください。

「新規データベースの場所 (ドライブ名)/(パス名)」

データベースをインストールできる場所のパスを指定します。インストールがローカルであり、データベースの作成を選択した場合は、上記で指定された管理ユーザーがこの処理を行うための適切な権限を持っている必要があります。Windows で DB2 を使用する場合は **db2admin** ユーザー、Linux では **db2grp1** のメンバーが該当します。

注:

Linux 管理ユーザー ID が読み取り権限および書き込み権限を持つディレクトリーを指定します。

Windows

ドライブ名を指定します。

4. ステップ 4 (57 ページ) に従って、必要なサーバー・インストール・パラメーターを入力します。
5. ステップ 5 (58 ページ) の手順に従って、サーバー・インストール・タスクを保存します。

MS SQL サーバー構成の作成

MS SQL データベースを使用するサーバー・インストール構成を作成できます。このデータベースは、ローカルまたはリモートにインストールされていて、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーのインストール前に、データベース・インスタンスが作成されている必要があります。MS SQL サーバー構成タスクを作成するには、以下のステップを実行します。

1. 必要なオペレーティング・システムを選択します。
2. IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーがインストールされるインストール・ディレクトリーを入力するか、提示されているデフォルトを受け入れます。
3. 関連する MS SQL バージョンを選択し、関連するデータベース・パラメーターを入力します。

「データベース・サーバーのアドレス」

データベース・サーバーの IP アドレスまたはホスト名。

注: MS SQL が Windows 上にローカルにインストールされている場合のみ、127.0.0.1 を使用できます。

「データベース接続に使用するポート番号」

MS SQL がインストールされているポート。

「使用するデータベース名」

IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーで使用されるデータベースの名前を指定するか、提示されているデフォルトを受け入れます。

「データベース管理者のユーザー ID」

データベースにログオンするときに使用する管理者ユーザー ID を指定します。このユーザー ID は、データベースへの管理アクセス権限を持っている必要があります。

「データベース管理者のパスワード」

データベースに接続するための管理者パスワードを指定します。

「JDBC ドライバーへのパス」

MS JDBC java ファイルへのパスを指定します。sqljdbc4.jar ファイルをお勧めします。次のバージョンのドライバーが Microsoft からダウンロード可能です。**Microsoft JDBC Driver 4.0 for SQL Server - sqljdbc_4.0.2206.100_enu.exe。**

「ローカルの場合、データベースを作成」

MS SQL がローカルにインストールされている場合は、サーバー・インストール時にブランク・データベースを作成することを選択できます。既存のローカル・データベースをドロップして新規データベースを作成するように選択することもできます。リモート・データベースを使用する場合は、データベースの作成を選択しないでください。

「ローカルの場合、既存のデータベースをドロップ」

MS SQL がローカルにインストールされている場合は、データベースをドロップして新規データベースを作成することを選択できます。リモート・データベースを使用する場合、データベースのドロップを選択しないでください。

「新規データベースの場所 (ディレクトリが存在している必要があります)」

データベースのインストール・パスを指定します。インストールがローカルであり、データベースの作成を選択した場合は、上記で指定された管理ユーザーがこの処理を行うための適切な権限を持っていない限りなりません。

Linux 管理ユーザー ID が読み取り権限および書き込み権限を持つディレクトリを指定します。

Windows

既存のディレクトリを指定します。

4. ステップ 4 (57 ページ) に従って、必要なサーバー・インストール・パラメータを入力します。
5. ステップ 5 (58 ページ) の手順に従って、サーバー・インストール・タスクを保存します。

Oracle サーバー構成の作成

Oracle データベースを使用するサーバー・インストール構成を作成できます。このデータベースは、ローカルまたはリモートにインストールされていて、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーのインストール前に、データベース・インスタンスが作成されている必要があります。Oracle サーバー構成タスクを作成するには、以下のステップを実行します。

1. 必要なオペレーティング・システムを選択します。
2. IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーがインストールされるインストール・ディレクトリを入力するか、提示されているデフォルトを受け入れます。
3. 関連する Oracle バージョンを選択し、関連するデータベース・パラメータを入力します。

「データベース・サーバーのアドレス」

データベース・サーバーの IP アドレスまたはホスト名。Oracle がローカルにインストールされている場合は、127.0.0.1 を使用できます。Oracle がリモート・システムにインストールされている場合は、リモート・システムの IP アドレスを入力します。

「データベース接続に使用するポート番号」

Oracle がインストールされているポート。

「使用するデータベース名」

データベースの名前を指定します。これは、**tnsnames.ora** ではなくサーバーでの SID 名です。例: TRCDB

「データベース管理者のユーザー ID」

データベースにログオンするときに使用する管理者ユーザー ID を指定します。このユーザー ID は、データベースへの管理アクセス権限を持っている必要があります。Oracle インストールの場合は、**asset** と呼ばれるユーザーが存在する必要があります。

「データベース管理者のパスワード」

データベースに接続するための管理者パスワードを指定します。

「JDBC ドライバーへのパス」

oracle java JDBC ライブラリーへのパスを指定します。これは、Oracle サーバー・インストールから取得するか、Oracle Web サイトからダウンロードできます。例: c:\oracle\ora92\jdbc\lib\ojdbc14.jar

4. ステップ 4 (57 ページ) に従って、必要なサーバー・インストール・パラメーターを入力します。
5. ステップ 5 (58 ページ) の手順に従って、サーバー・インストール・タスクを保存します。

IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット構成タスクの作成

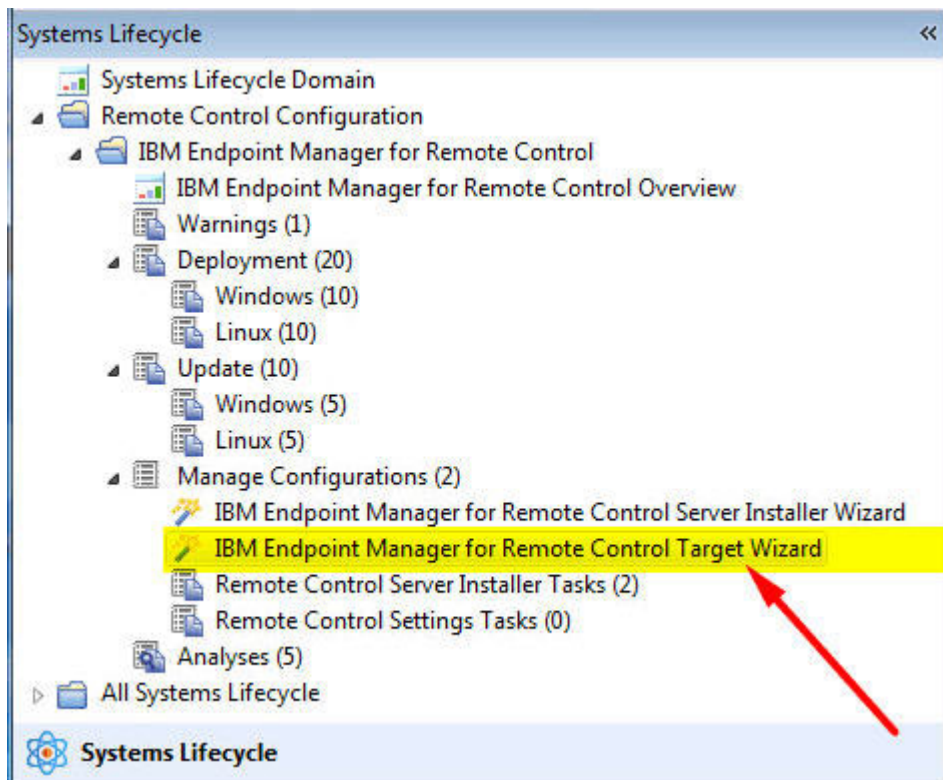
IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット・ウィザードを使用して、一連のターゲット構成パラメーターを作成します。

IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット・ソフトウェアが既にインストールされているすべてのターゲット、または選択したターゲットに対して、パラメーターを適用するタスクを実行します。この構成により、ターゲットが参加できるセッションのタイプが決定され、リモート・コントロール・セッション中にコントローラー・ユーザーがアクションを実行できます。オプションについて詳しくは、「IBM Endpoint Manager for Remote Control インストール・ガイド」を参照してください。

構成タスクを作成するには、以下のステップを実行します。

注: ここで設定された構成値は、ターゲットに対して P2P セッションが要求された場合に限り有効になります。リモート・コントロール・セッションが IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーから起動された場合、セッション・ポリシーはサーバーからターゲットに渡されます。

IBM Endpoint Manager for Remote Control ナビゲーション・ツリーで、「設定の管理」 > 「IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット・ウィザード」を選択します。

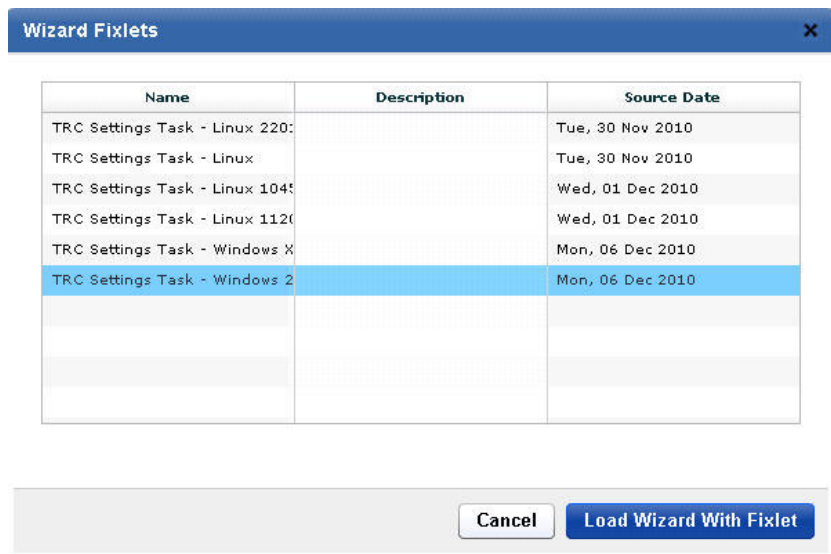


1. 関連するオペレーティング・システムを選択します。
2. 構成値を設定します。

「既存のタスクからの設定の読み込み」

この機能を使用して、以前に作成された構成設定をロードします。

- a. 「既存のタスクからの設定の読み込み」をクリックします。
- b. 「ウィザードの Fixlet」画面で、タスクを選択します。



「Fixlet を使用してウィザードを読み込み」をクリックします。構成値がウィザードにロードされます。

「デフォルト値にリセット」

この機能を使用して、すべての選択をクリアし、ウィザード内の値をデフォルト構成値に戻します。

「構成値の選択 (Selecting configuration values)」

デフォルト構成値を使用してウィザードがロードされます。関連オプションを選択またはクリアすることにより、これらの構成値をユーザー独自の要件に合うように変更できます。

インストール・オプション

表 1. インストール・オプションの説明

インストール・オプション	ターゲット・プロパティ	デフォルト値	説明
サーバー URL	ServerURL	ブランク	ターゲットをサーバーに登録し、サーバーから開始されるリモート・コントロール・セッションに参加させるには、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー URL を指定します。形式は <code>http://servername/trc</code> です。ここで、 <code>servername</code> は IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーの完全修飾名です。 例: <code>http://trcserver.example.com/trc</code> 注: サーバー URL を指定する場合に、ターゲットをサーバーから開始されたりリモート・コントロール・セッションのみに参加させるには、「 p2p モードの許可 」で「 いいえ 」を選択します。
プロキシ URL	ProxyURL	ブランク	プロキシ・サーバーのホスト名または IP アドレス (使用している場合)。
ブローカー・リスト	BrokerList	ブランク	ターゲットの接続先とする、ブローカーおよびそのポートのホスト名または IP アドレスのリスト。形式は <code>hostname1:port,hostname2:port,hostname3:port.</code> です。
ブローカー接続のトラステッド証明書 (Trusted certificates for Broker connections)		該当なし	ブローカー証明書の検証に使用されるトラストストアを構成するには、このオプションを選択します。証明書を追加するには、以下のステップを実行します。 1. 証明書ファイルをテキスト・エディターで開きます。 2. 証明書を選択してクリップボードにコピーします。 注: BEGIN CERTIFICATE および END CERTIFICATE の行を含むすべてを選択する必要があります。 3. 「 保存 」をクリックします。
ターゲットをグループに登録	GroupLabel	ブランク	構成の適用時にターゲットがメンバーになるターゲット・グループ名を入力します。このターゲット・グループは、IBM Endpoint Manager for Remote Control データベースに存在していなければなりません。 注: GroupLabel プロパティを使用できるのは、ターゲットがまだサーバーに登録されていない場合のみです。ターゲットが既に登録されている場合は、ターゲット・グループに割り当てられません。 GroupLabel プロパティ値を適用するには、サーバー上の <code>trc.properties</code> ファイルの allow.target.group.override プロパティを <code>true</code> に設定する必要があります。
Remote Control ポート	PortToListen	888	ターゲットが listen する TCP ポートを指定します。

表 1. インストール・オプションの説明 (続き)

インストール・オプション	ターゲット・プロパティ	デフォルト値	説明
p2p モードの許可	AllowP2P	なし (Never)	P2P モードを有効にするために使用されます。 なし (Never) コントローラーとこのターゲットの間に P2P セッションを確立できません。ServerURL が指定されている場合、ターゲットは、サーバーから開始されたりモート・コントロール・セッションにのみ参加できます。 サーバーと通信不能な場合のみ IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーがダウンしているか、通信不能である場合のみ、コントローラー・ユーザーとこのターゲットの間に P2P セッションを確立できます。 「常時」 コントローラー・ユーザーとこのターゲットの間に P2P セッションを確立できます。 注: このオプションが選択され、サーバー URL が指定された場合、ターゲットは、P2P セッションと、サーバーから開始されたセッションの両方に参加できます。
FIPS を有効にする	FIPSCompliance	未選択	このオプションを選択すると、すべての暗号化機能について、FIPS 準拠の暗号化サービス・プロバイダーの使用が有効になります。FIPS 準拠を有効にする方法について詳しくは、「IBM Endpoint Manager for Remote Control インストール・ガイド」を参照してください。 注: ターゲットで FIPS 準拠を有効にする場合は、インストールしたコントローラー・コンポーネントでも FIPS 準拠を有効にしてください。FIPS 準拠モードでは、IBM Java Run-time Environment (JRE) のみがサポートされます。JRE はコントローラー・ソフトウェアのインストール時にインストールされます。コントローラーで FIPS 準拠を有効にするには、以下のステップを実行します。 1. コントローラーがインストールされているシステムで、trc_controller.cfg ファイルを編集します。 Windows <pre>[controller installation dir]¥trc_controller.cfg</pre> ここで、[controller installation dir] はコントローラーがインストールされているディレクトリーです。 Linux opt/ibm/trc/controller/trc_controller.cfg 2. fips.compliance プロパティを true に設定し、ファイルを保存します。

表 1. インストール・オプションの説明 (続き)

インストール・オプション	ターゲット・プロパティ	デフォルト値	説明
NIST SP800-131A 準拠性を使用可能にする (FIPS を使用可能にする) (Enable NIST SP800-131A compliance (Enables FIPS))	SP800131ACompliance	未選択	すべての暗号機能について NIST SP800-131A 準拠のアルゴリズムと鍵強度を使用する場合は、このオプションを選択します。NIST SP800-131A 準拠の有効化について詳しくは、「<i>IBM Endpoint Manager for Remote Control インストール・ガイド</i>」を参照してください。 注: ターゲットで NIST SP800-131A 準拠を有効にする場合は、インストールされているコントローラー・コンポーネントでも NIST SP800-131A 準拠を有効にしてください。NIST SP800-131A 準拠モードでは、IBM Java Run-time Environment (JRE) のみがサポートされます。JRE はコントローラー・ソフトウェアのインストール時にインストールされます。コントローラーで NIST SP800-131A 準拠を有効にするには、以下のステップを実行します。 1. コントローラーがインストールされているシステムで、trc_controller.cfg ファイルを編集します。 Windows <pre>[controller installation dir]¥trc_controller.cfg</pre> ここで、[controller installation dir] はコントローラーがインストールされているディレクトリーです。 Linux opt/ibm/trc/controller/trc_controller.cfg 2. sp800131A.compliance プロパティを true に設定し、ファイルを保存します。
ユーザー補助	ユーザー補助	未選択	ユーザー補助 UI を有効にするには、このオプションを選択します。オペレーティング・システムとして Windows が選択されている場合に使用できます。

セッション・オプション

表 2. セッション・オプションの説明

ユーザー・オプション	ターゲット・プロパティ	デフォルト値	説明
モニター・モードの許可	AllowMonitor	選択	ターゲットがモニター P2P セッションに参加できるかどうかを決定します。確立できるリモート・コントロール・セッションのさまざまなタイプについて詳しくは、「<i>IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー・ユーザーズ・ガイド</i>」を参照してください。 選択 ターゲットはモニター P2P セッションに参加できます。コントローラー・ウィンドウのセッション・タイプ・リストで、「モニター」オプションを選択できます。「接続のオープン」ウィンドウにも「モニター」オプションがリストされます。 未選択 ターゲットはモニター P2P セッションに参加できません。コントローラー・ウィンドウのセッション・タイプ・リストで、「モニター」オプションは選択できません。

表 2. セッション・オプションの説明 (続き)

ユーザー・オプション	ターゲット・プロパティ	デフォルト値	説明
ガイダンス・モードの許可	AllowGuidance	選択	ターゲットがガイダンス P2P セッションに参加できるかどうかを決定します。 選択 ターゲットはガイダンス P2P セッションに参加できます。コントローラー・ウィンドウのセッション・タイプ・リストで、「ガイダンス」オプションを選択できます。「接続のオープン」ウィンドウにも「ガイダンス」オプションがリストされます。 未選択 ターゲットはガイダンス P2P セッションに参加できません。コントローラー・ウィンドウのセッション・タイプ・リストで、「ガイダンス」オプションは選択できません。
アクティブ・モードの許可	AllowActive	選択	ターゲットがアクティブ P2P セッションに参加できるかどうかを決定します。 選択 ターゲットはアクティブ P2P セッションに参加できます。コントローラー・ウィンドウのセッション・タイプ・リストで、「アクティブ」オプションを選択できます。「接続のオープン」ウィンドウにも「アクティブ」オプションがリストされます。 未選択 ターゲットはアクティブ P2P セッションに参加できません。コントローラー・ウィンドウのセッション・タイプ・リストで、「アクティブ」オプションは選択できません。
チャットの無効化	DisableChat	未選択	ターゲットでチャット・セッションを開始し、P2P セッション中にコントローラー・ユーザーとチャットすることができるかどうかを決定します。 選択 「接続のオープン」ウィンドウで接続タイプとして「チャットのみ」が選択された場合、セッションは拒否されます。セッション中、コントローラー・ウィンドウでチャット・アイコンは使用できません。 未選択 「接続を開く (Open connection)」ウィンドウから「チャットのみ (Chat Only)」セッションを開始できます。セッション中、コントローラー・ウィンドウでチャット・アイコンが使用できます。
コントローラーへのファイル転送機能の無効化	DisableFilePull	未選択	セッション中にターゲットからコントローラーにファイルを転送できるかどうかを決定します。 選択 ファイルをターゲットからコントローラーに転送できます。 未選択 ファイルをターゲットからコントローラーに転送することはできません。
ターゲットへのファイル転送機能の無効化	DisableFilePush	未選択	セッション中にコントローラーからターゲットにファイルを転送できるかどうかを決定します。 選択 ファイルをコントローラーからターゲットに転送できます。 未選択 ファイルをコントローラーからターゲットに転送することはできません。

表 2. セッション・オプションの説明 (続き)

ユーザー・オプション	ターゲット・プロパティ	デフォルト値	説明
クリップボード転送の無効化	DisableClipboard	未選択	クリップボード転送メニューを使用できるかどうかを決定します。メニューは、リモート・コントロール・セッション中にコントローラーとターゲットとの間でクリップボードの内容を転送する場合に使用します。 選択 クリップボード転送メニューはセッション中は使用可能であり、ターゲットとの間でクリップボードの内容を転送できます。 未選択 セッション中、クリップボード転送メニューは使用できません。
ローカル記録機能の許可	AllowRecording	選択	コントローラー・ユーザーは、セッションのローカル記録を作成し、それを制御側のシステムに保存することができます。 選択 コントローラー・ウィンドウで、記録オプションが使用できます。 未選択 コントローラー・ウィンドウで、記録オプションは使用できません。
コラボレーションの許可	AllowCollaboration	選択	複数のコントローラーがセッションに参加できるようにするには、このプロパティを使用します。コントローラー・ウィンドウでコラボレーション・アイコンを使用可能にするかどうかを決定します。 選択 コントローラー・ウィンドウで、コラボレーション・アイコンが使用できます。 未選択 コントローラー・ウィンドウで、コラボレーション・アイコンは使用できません。
ハンドオーバーの許可	AllowHandover	選択	コラボレーション・セッションでは、マスター・コントローラーがセッションの制御を新規コントローラーに引き渡すことができます。コラボレーション・コントロール・パネルでハンドオーバー・ボタンを使用可能にするかどうかを決定します。 選択 コラボレーション制御パネルに「ハンドオーバー」ボタンが表示されます。 未選択 コラボレーション制御パネルに「ハンドオーバー」ボタンは表示されません。
「セッションの切断要求を許可する (Allows requests to disconnect session)」	AllowForceDisconnect	未選択	ターゲットに接続しようとするときに表示されるメッセージ・ウィンドウで、「セッションの切断」ボタンを使用できるかどうかを決定します。「セッションの切断」オプションを使用すると、現行セッションを切断することができます。 選択 メッセージ・ウィンドウに切断ボタンが表示されます。 未選択 メッセージ・ウィンドウに切断ボタンが表示されません。
切断猶予時間 (Disconnect grace time)	ForceDisconnectTimeout	45	現行セッションを切断するよう求めるプロンプトに現行コントローラーが応答するのを待つ時間 (秒数)。指定された時間内に応答しない場合は、セッションから自動的に切断されます。このタイマーは、AllowForceDisconnect および CheckUserLogin が「はい」に設定されている場合のみ有効になります。デフォルト値は 45 です。

表 2. セッション・オプションの説明 (続き)

ユーザー・オプション	ターゲット・プロパティ	デフォルト値	説明
ログイン時に接続	AutoWinLogon	選択	ターゲット・ユーザーがログオンしていないターゲットで、ユーザー確認ウィンドウを表示するかどうかを決定します。 選択 ターゲットに確認ウィンドウは表示されず、セッションが確立されます。 未選択 ターゲットにログオンしているユーザーがおらず、セッションの受け入れができないため、セッションは拒否されます。
セッション前スクリプトの実行	RunPreScript	未選択	リモート・コントロール・セッションの開始前にユーザー定義スクリプトを実行するかどうかを決定します。このスクリプトは、セッションが許可された直後で、かつコントローラー・ユーザーがターゲットにアクセスできるようになる前に実行されます。スクリプト実行の結果およびセッションの続行は、「開始前/終了後スクリプトの失敗時も続行」で設定される値によって決まります。 選択 リモート・コントロール・セッションが要求されると、定義済みスクリプトは、コントローラー・ユーザーがターゲットへのアクセス権を持つ前に実行されます。 未選択 セッション前にスクリプトは実行されません。セッション前スクリプトおよびセッション後スクリプトのセットアップについて詳しくは、「IBM Endpoint Manager for Remote Control 管理者ガイド」を参照してください。
セッション後スクリプトの実行	RunPostScript	未選択	リモート・コントロール・セッションの完了後にユーザー定義スクリプトを実行するかどうかを決定します。 選択 リモート・コントロール・セッションが終了すると、ユーザー定義スクリプトが実行されます。 未選択 セッション後にスクリプトは実行されません。セッション前スクリプトおよびセッション後スクリプトのセットアップについて詳しくは、「IBM Endpoint Manager for Remote Control 管理者ガイド」を参照してください。
開始前/終了後スクリプトの失敗時も続行	ProceedOnScriptFail	未選択	前スクリプトまたは後スクリプトの実行が失敗する場合に取るアクション。正の値または 0 の場合は、前スクリプトまたは後スクリプトの実行が成功したとみなされます。負の値の場合や、スクリプトが見つからない場合、あるいは実行が 3 分以内に完了しなかった場合は、失敗とみなされます。 選択 開始前スクリプトまたは終了後スクリプトの実行が失敗した場合でも、セッションは続行します。 未選択 前スクリプトまたは後スクリプトの実行が失敗した場合、セッションは続行されずに終了します。

表 2. セッション・オプションの説明 (続き)

ユーザー・オプション	ターゲット・プロパティ	デフォルト値	説明
RDP コンソール・セッション後にコンソールをリセット	WorkaroundW2K3RDP	未選択	リモート・デスクトップ・コンソール・セッションの後、コンソールを自動的にリセットします。リモート・デスクトップ・ユーザーが <code>/admin</code> または <code>/console</code> のオプションを使用して Windows Server 2003 システムでのリモート・デスクトップ・セッションを開始する場合、ユーザーがこのリモート・デスクトップ・セッションの前後または最中にこのターゲットとのリモート・コントロール・セッションを開始すると、リモート・コントロールは表示を取り込むことができません。その結果、コントローラーにはグレイ画面が表示されます。この問題は Windows Server 2003 の制限事項です。そのため、このプロパティには、選択された値に応じて、各リモート・デスクトップ・セッションの終了後か、あるいはリモート・コントロール・セッションの開始前に、Windows セッションをリセットするという回避策が導入されています。 0 回避策は無効になります。この値はデフォルト値です。 1 リモート・コントロール・セッションが開始したときに、セッションを自動的にリセットします。 注: Windows セッションは初期化するのに数分かかるため、コントローラーでは初期化が完了するまでデスクトップ画面がブランクになります。セッションはリセット中であり、数分かかる可能性があることをコントローラー・ユーザーに知らせるメッセージが表示されます。 2 リモート・デスクトップ・ユーザーがログアウトしたときに、セッションを自動的にリセットします。

ユーザー確認オプション

表 3. ユーザー確認オプションの説明

ユーザー・オプション	ターゲット・プロパティ	デフォルト値	説明
着信接続の確認	ConfirmTakeOver	選択	リモート・コントロール・セッションが要求されたときに、ターゲットに確認ウィンドウを表示するかどうかを決定します。 選択 ユーザー確認ウィンドウが表示され、ターゲット・ユーザーはセッションを受け入れるか、拒否することができます。 未選択 ユーザー確認ウィンドウは表示されずに、セッションが確立されます。
モードの変更の確認	ConfirmModeChange	選択	コントローラー・ユーザーがコントローラー・ウィンドウのセッション・モード・リストから別のセッション・モードを選択した場合に、ユーザー確認ウィンドウを表示するかどうかを決定します。 選択 セッション・モードの変更が要求されるたびにユーザー確認ウィンドウが表示され、ターゲット・ユーザーは要求を受け入れるか、拒否する必要があります。 未選択 ユーザー確認ウィンドウは表示されず、セッション・モードは自動的に変更されます。

表 3. ユーザー確認オプションの説明 (続き)

ユーザー・オプション	ターゲット・プロパティ	デフォルト 値	説明
ファイル転送の確認	ConfirmFileTransfer	選択	コントローラー・ユーザーがターゲットとコントローラーの間でファイルを転送することを選択した場合に、ユーザー確認ウィンドウを表示するかどうかを決定します。 選択 確認ウィンドウは以下の 2 とおりの場合に表示されます。ターゲット・ユーザーは、ファイル転送を受け入れるか、拒否する必要があります。 • コントローラー・ユーザーが、コントローラー・ウィンドウの「ファイルの転送」メニューから「ファイルをプル」を選択した場合。ターゲット・ユーザーは、要求を受け入れた後、転送するファイルを選択する必要があります。 • コントローラー・ユーザーが、ターゲット・ウィンドウの「アクション」メニューから「コントローラーへファイルを送信」を選択した場合。 未選択 要求された場合、確認ウィンドウは表示されず、ファイルは自動的にターゲットからコントローラー・システムに転送されます。
システム情報の確認	ConfirmSysInfo	選択	コントローラー・ユーザーがターゲット・システム情報の表示を要求した場合にユーザー確認ウィンドウを表示するかどうかを決定します。 選択 コントローラー・ユーザーがコントローラー・ウィンドウの「システム情報」をクリックすると、ユーザー確認ウィンドウが表示されます。ターゲット・ユーザーは、要求を受け入れるか、拒否する必要があります。ターゲット・ユーザーが「同意する」をクリックした場合は、ターゲット・システム情報がコントローラー・システムで別のウィンドウに表示されます。「拒否する (refuse)」をクリックした場合は、コントローラーにメッセージが表示され、システム情報は表示されません。 未選択 コントローラー・ユーザーがシステム情報アイコンをクリックすると、ターゲット・システム情報が自動的に表示されます。
記録機能の確認	ConfirmRecording	選択	コントローラー・ユーザーがコントローラー・ウィンドウで記録アイコンをクリックした場合に、ユーザー確認ウィンドウを表示するかどうかを決定します。 選択 コントローラー・ユーザーがコントローラー・ウィンドウの記録アイコンをクリックすると、メッセージ・ウィンドウが表示されます。ターゲット・ユーザーが「受け入れ」をクリックした場合は、コントローラー・ユーザーが記録の保存ディレクトリーを選択できます。ターゲット・ユーザーが「拒否」をクリックした場合は、記録が拒否されたことを示すメッセージがコントローラーに表示されます。 注: ターゲット・ユーザーが記録要求を受け入れた後に、コントローラー・ユーザーがローカル記録を停止して再開した場合、確認ウィンドウは表示されません。 未選択 コントローラー・ユーザーがコントローラー・ウィンドウの記録アイコンをクリックすると、メッセージ・ウィンドウは表示されません。コントローラー・ユーザーは、記録の保存先ディレクトリーを選択できます。

表 3. ユーザー確認オプションの説明 (続き)

ユーザー・オプション	ターゲット・プロパティ	デフォルト値	説明
コラボレーションの確認	ConfirmCollaboration	選択	別のコントローラー・ユーザーがターゲットとのコラボレーション・セッションへの参加を要求した場合に、ユーザー確認ウィンドウを表示するかどうかを決定します。 選択 コラボレーション・セッションにコントローラー・ユーザーが参加しようとする、ユーザー確認ウィンドウが表示されます。ターゲット・ユーザーは、この追加コントローラーのセッション参加許可の要求を受け入れるか、拒否する必要があります。ターゲット・ユーザーが「同意する」をクリックした場合、追加コントローラーはコラボレーション・セッションに参加します。「拒否する (refuse)」をクリックした場合は、コントローラーにメッセージが表示され、追加コントローラーはコラボレーション・セッションに参加できません。 未選択 追加コントローラーは、セッションのマスター・コントローラーに接続しようとしたときに、自動的にコラボレーション・セッションに参加します。
確認待ち時間	AcceptanceGraceTime	45	セッションの開始またはタイムアウトまでのターゲット・ユーザー応答の待ち時間 (秒数) を設定します。これは、「着信接続の確認」と使用します。 許容値は 0 から 60 です。0 に設定した場合、ターゲット・ユーザーはセッション要求への応答を求められません。 注: 「着信接続の確認」を選択した場合は、「確認待ち時間」には必ず 0 より大きい値を設定して、ターゲット・ユーザーが応答するのに十分な時間を与えてください。
確認要求のタイムアウト時も続行	AcceptanceProceed	未選択	ユーザー確認ウィンドウがタイムアウトになる場合に実行されるアクションです。ターゲット・ユーザーは、「受け入れ猶予時間」に定義された秒数内に「受け入れ」または「拒否」をクリックしませんでした。 選択 セッションが確立されます。 未選択 セッションは確立されません。
ウィンドウの非表示	HideWindows	未選択	「着信接続の確認」も選択された場合に、ユーザー確認ウィンドウに「ウィンドウの非表示」チェック・ボックスを表示するかどうかを決定します。 選択 ユーザー確認ウィンドウに「ウィンドウの非表示」チェック・ボックスが表示されます。 未選択 ユーザー確認ウィンドウに「ウィンドウの非表示」チェック・ボックスは表示されません。

セキュリティ・オプション

表 4. セキュリティ・オプションの説明

セキュリティ・オプション	ターゲット・プロパティ	デフォルト値	説明
システム・ログオンを使用した認証	CheckUserLogin	選択	「接続のオープン」ウィンドウでセッション・タイプが選択されたときにログイン・ウィンドウを表示するかどうかを決定します。 可 ログイン・ウィンドウが表示されるので、コントローラー・ユーザーは有効な Windows ID およびパスワードを使用してログインする必要があります。ログオン資格情報が無効な場合、ターゲットはセッションを拒否します。 不可 ユーザー確認ウィンドウは表示されずに、P2P セッションが確立されます。

表 4. セキュリティー・オプションの説明 (続き)

セキュリティー・オプション	ターゲット・プロパティー	デフォルト値	説明
指定ユーザー・グループ	CheckUserGroup	説明を参照	デフォルト値は、以下のとおりです。 Windows BUILTIN\Administrators Linux wheel 「指定ユーザー・グループ」に値が設定されている場合、認証に使用するユーザー名は、リストされているグループのうちのいずれかのグループのメンバーでなければなりません。ユーザーがメンバーではない場合、セッションは拒否されます。複数のグループを指定する場合は、セミコロンで区切る必要があります。例: wheel;trcusers 注: Windows の場合、デフォルトでは、管理者ユーザーのみにアクセス権限が付与されます。Linux の場合、デフォルトではどのユーザーにもアクセス権限は付与されません。この問題を解決するには、以下のいずれかのステップを実行します。 1. ユーザーに管理者権限も付与するために、それらのユーザーを Administrators グループ (Windows の場合) または wheel グループ (Linux の場合) にメンバーとして追加します。 2. 管理者権限を持たないユーザーについて、以下のステップを実行します。 a. グループを作成するか、既存のグループを使用します。 例えば、root として次のコマンドを実行できます。 groupadd trcusers. b. ユーザーをこのグループに追加します。例えば、root として次のコマンドを実行して、bsmith を trcusers に追加します。 usermod -a -G trcusers <bsmith> c. このグループを「指定ユーザー・グループ」フィールドのリストに追加します。
監査結果のシステム・ログへの記録	AuditToSystem	選択	リモート・コントロール・セッション中に実行されるアクションが、ターゲット上のアプリケーション・イベント・ログに記録されるかどうかを決定します。このファイルは、監査の目的で使用できます。 選択 セッション中に実行された各アクションに対応するエントリーが、ターゲットのアプリケーション・イベント・ログに記録されます。 未選択 アプリケーション・イベント・ログにエントリーは記録されません。

表 4. セキュリティー・オプションの説明 (続き)

セキュリティー・オプション	ターゲット・プロパティー	デフォルト値	説明
チャット・メッセージの保存	AutoSaveChat	未選択	チャット・セッション中に入力されたダイアログを保存できるかどうかを決定します。 選択 チャット・ダイアログは html ファイルとして保存されます。ファイル名は chat で始まります。このファイルは、ターゲットの作業ディレクトリーに保存されます。作業ディレクトリーの場所は、ターゲット・プロパティー WorkingDir で定義されます。例えば、Windows で、chat-m15.html という名前のファイルを次の場所に保存します。 c:\Documents and Settings\All Users\Application Data\IBM\Tivoli\Remote Control 未選択 チャット・ダイアログはファイルに保存されません。
接続切断時にターゲットをロック	SessionDisconnect	未選択	リモート・コントロール・セッションが終了したときに、ターゲット・コンピューターを自動的にロックするかどうかを決定します。 選択 セッションの終了時に、ターゲット・コンピューターは自動的にロックされます。 未選択 セッションの終了時に、ターゲット・コンピューターは自動的にロックされません。
プライバシーの保護	AllowPrivacy	選択	リモート・コントロール・セッション中に、コントローラー・ユーザーがターゲットのローカル入力および画面をロックできるかどうかを決定します。コントローラー・ウィンドウに「プライバシーの有効化」オプションを表示できるかどうかを決定します。 選択 「プライバシーの有効化」オプションは、コントローラー・ウィンドウの「ターゲット内のアクションを実行」メニューで選択できます。 未選択 「プライバシーの有効化」オプションは、コントローラー・ウィンドウの「ターゲット内のアクションを実行」メニューで選択できません。

表 4. セキュリティー・オプションの説明 (続き)

セキュリティー・オプション	ターゲット・プロパティー	デフォルト値	説明
入力ロックの許可	AllowInputLock	選択	このプロパティーは、「プライバシーの保護」と組み合わせても、単独で使用しても機能します。「入力ロックの許可」を使用すると、リモート・コントロール・セッション中にターゲット・ユーザーのマウスおよびキーボードをロックできます。 選択 コントローラー・ウィンドウの「ターゲット内のアクションを実行」メニューで、「ターゲットの入力をロック」メニュー項目が有効化されます。「ターゲットの入力をロック」を選択すると、リモート・コントロール・セッション中にターゲット・ユーザーのマウスおよびキーボードはロックされます。その場合でも、ターゲット画面はターゲット・ユーザーに表示されます。 未選択 コントローラー・ウィンドウの「ターゲット内のアクションを実行」メニューの、「ターゲットの入力をロック」メニュー項目が有効化されません。 注: セッション中に「プライバシーの有効化」オプションを選択すると、リモート・ユーザー入力自動的にロックされます。入力のロックを同時に行わずにプライバシーを有効にすることはできません。
プライバシーの有効化	EnablePrivacy	未選択	すべてのセッションでローカル入力および画面をロックするかどうかを決定します。これにより、ターゲット・ユーザーは、リモート・コントロール・セッション中にターゲットで入力を含むあらゆる操作ができなくなります。 選択 セッションが開始されると、プライバシー・ビットマップによってターゲット画面がブランクになるので、ターゲット・ユーザーはセッション中は画面を操作できなくなります。その場合でも、コントローラー・ウィンドウでは、ターゲット・デスクトップがコントローラー・ユーザーに表示されます。 未選択 セッションが開始されたときにターゲット画面はブランクにならず、ターゲット・ユーザーは画面を操作することができます。
入力ロックの有効化	EnableInputLock	未選択	このプロパティーは、「プライバシーの有効化」との組み合わせで機能します。プライバシー・モードが有効な場合は、「入力ロックの有効化」を使用して、リモート・コントロール・セッション中、ターゲット・ユーザーがターゲット画面を表示できるようにするかどうかを決定します。 選択 プライバシー・モードの場合、セッション中、ターゲット画面はターゲット・ユーザーに表示されますが、ユーザーのマウスおよびキーボードの制御はロックされます。 未選択 ターゲット画面はターゲット・ユーザーに表示されません。セッション中、プライバシー・ビットマップがターゲットに表示されます。ターゲット・ユーザーのマウスおよびキーボードの入力も無効になります。 注: 「入力ロックの有効化」を有効にするには、「プライバシーの有効化」を選択する必要があります。

表 4. セキュリティー・オプションの説明 (続き)

セキュリティー・オプション	ターゲット・プロパティー	デフォルト値	説明
パニック・キーの無効化	DisablePanicKey	未選択	ターゲット・ユーザーが Pause/Break キーを使用してリモート・コントロール・セッションを自動終了することができるかどうかを決定します。 選択 ターゲット・ユーザーは Pause/Break キーを使用してリモート・コントロール・セッションを自動終了できません。 未選択 ターゲット・ユーザーは Pause/Break キーを使用してリモート・コントロール・セッションを自動終了できます。
画面上のセッション通知の有効化	EnableOSSN	未選択	リモート・コントロール・セッションが進行中であることを示す半透明のオーバーレイをターゲット・コンピューターに表示するかどうかを決定します。このプロパティーは、プライバシーが懸念される場合に使用します。これによりユーザーは、自分のコンピューターを誰かがリモートで表示または制御できる場合には、そのことがはっきりと通知されます。 選択 ターゲット画面に、IBM Endpoint Manager for Remote Controlというテキストと、進行中のリモート・コントロール・セッションのタイプを示す、半透明のオーバーレイが表示されます。例: IBM Endpoint Manager for Remote Control - アクティブ・モード。このオーバーレイはキーボードまたはマウスのアクションを妨害するものではないため、ユーザーは引き続き自分の画面を操作できます。 未選択 ターゲット・コンピューターにオーバーレイは表示されません。 注: このポリシーは、Windows オペレーティング・システムがインストールされているターゲットでのみサポートされます。
GUI の無効化	DisableGUI	未選択	リモート・コントロール・セッションの開始時およびセッション中にターゲット GUI を表示するかどうかを決定します。 注: このオプションは、ターゲットが P2P モードでインストールされ、ターゲット・プロパティー「管理対象」が「いいえ」に設定されている場合にのみ機能します。サーバー URL が指定されたときに、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー・モードを使用してインストールされたターゲットに適用すると、このオプションは無視されます。 選択 ターゲットにターゲット GUI は表示されず、セッションが開始したことはターゲット・ユーザーには分かりません。IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット・アイコンは、Windows システム・トレイに表示されません。 未選択 ターゲット GUI は、セッションが開始するときにターゲットに表示され、リモート・コントロール・セッション中もターゲット・ユーザーに対して使用可能です。

パフォーマンス・オプション

表 5. パフォーマンス・オプションの説明

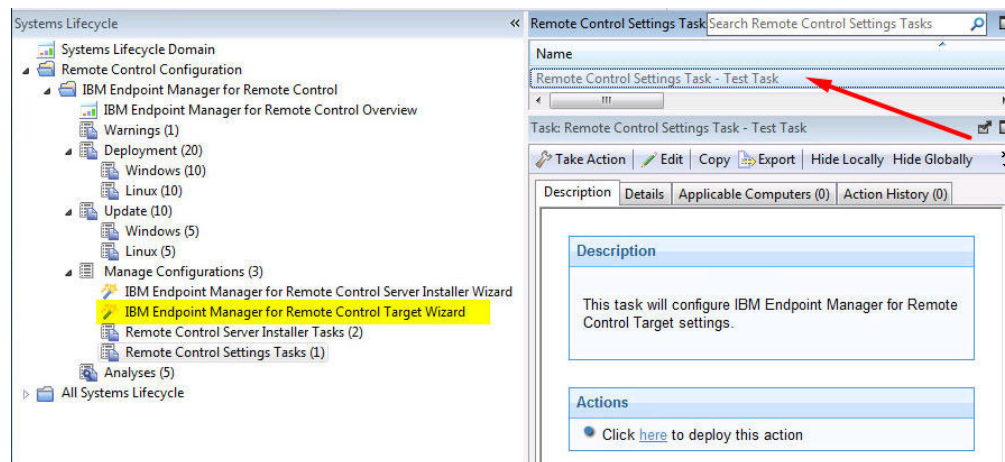
セキュリティー・オプション	ターゲット・プロパティ	デフォルト値	説明
無操作状態のタイムアウト	IdleTimeout	360	リモート・コントロール・セッションのアクティビティーがない場合に接続を終了するまでの待機時間 (秒数) を指定します。タイマーを無効にして、セッションが自動的に終了しないようにするには、この値を 0 に設定します。最小タイムアウト値は 60 秒です。そのため、0 より大きく 60 より小さい値の場合は、約 60 秒でタイムアウトになり、60 より大きい値の場合は、その値に到達したときにタイムアウトになります。デフォルト値は 360 です。コントローラーからターゲットへの情報の送受信を伴わないセッションの場合は、この値を 0 に設定してください。例えば、モニター・セッションの場合などです。
ツール・カラーの有効化	EnableTrueColor	未選択	コントローラー・ウィンドウでツール・カラーの「有効化/無効化」アイコンを使用可能にするかどうかを決定します。「カラー階調のロック」とともに使用します。 選択 コントローラー・ウィンドウで、ツール・カラーの「有効化/無効化」アイコンが使用できます。「色深度の固定」プロパティが選択されていない場合、このアイコンを使用すると、ターゲット・デスクトップのコントローラー・ウィンドウ・ビューにおけるツール・カラーを有効化できます。 未選択 コントローラー・ウィンドウで、ツール・カラーの「有効化/無効化」アイコンが使用できません。
色深度の固定	LockColorDepth	未選択	「ツール・カラーの有効化」と共に使用して、リモート・コントロール・セッションが確立された場合の色深度を決定します。 選択 リモート・コントロール・セッションに対して選択された色深度は固定され、セッション中に変更することはできません。 未選択 「ツール・カラーを使用可能にする」プロパティも選択されている場合は、選択したカラー階調をセッション中に変更できます。
デスクトップの削除	RemoveBackground	未選択	リモート・コントロール・セッション中にデスクトップ背景画像をビューから削除できるかどうかを決定します。 選択 リモート・コントロール・セッション中、ターゲットのデスクトップ背景画像は表示されません。 未選択 リモート・コントロール・セッション中、ターゲットのデスクトップ背景画像は表示されます。

表 5. パフォーマンス・オプションの説明 (続き)

セキュリティー・オプション	ターゲット・プロパティー	デフォルト値	説明
スクリーン・セーバーの更新を停止	NoScreenSaver	未選択	スクリーン・セーバーがアクティブであることが検出された場合は、ターゲットによる画面更新の送信を停止します。 選択 ターゲット・システムでスクリーン・セーバーがアクティブであるときに、ターゲットによる画面更新の送信が停止されます。コントローラー・コンピューターには、シミュレートされたスクリーン・セーバーが表示されるので、コントローラー・ユーザーはスクリーン・セーバーがリモート画面でアクティブになっていることを認識します。コントローラー・ユーザーは、キーを押すかマウスを動かすことによりスクリーン・セーバーを閉じることができます。 未選択 シミュレートされたスクリーン・セーバーはセッション・ウィンドウに表示されません。ターゲット画面が通常どおりに表示され、ターゲットは画面更新を送信し続けます。

3. 「設定タスクの作成」をクリックします。タスクに関連する情報を入力して、「OK」をクリックします。
4. プライベート・キーのパスワードを入力し、「OK」をクリックします。

これで、作成したタスクは「Remote Control 設定タスク」サブノードのリスト・パネルに表示されます。



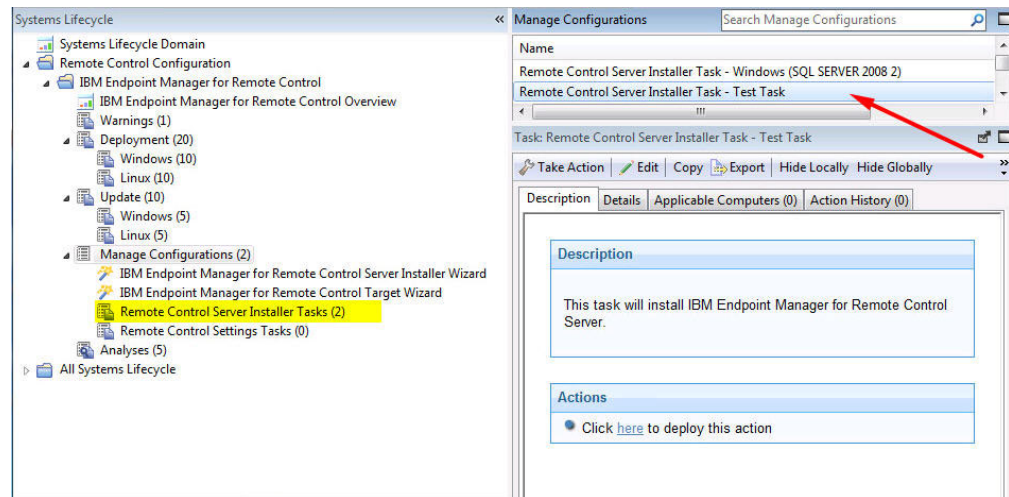
IBM Endpoint Manager for Remote Control タスクの実行

サーバーおよびターゲットの構成ウィザードを使用した構成タスクの作成が完了したら、これらのタスクを実行して、選択した対象コンピューターに IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー・ソフトウェアをインストールしたり、既にインストールされているターゲットの構成を変更したりできます。

サーバー・インストーラー・タスクの実行

「Remote Control サーバー・インストーラー・タスク」サブノードを使用して、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー・インストーラー・ウィザードで作成したタスクを実行します。必要なタスクをタスク・ウィンドウで選択して、

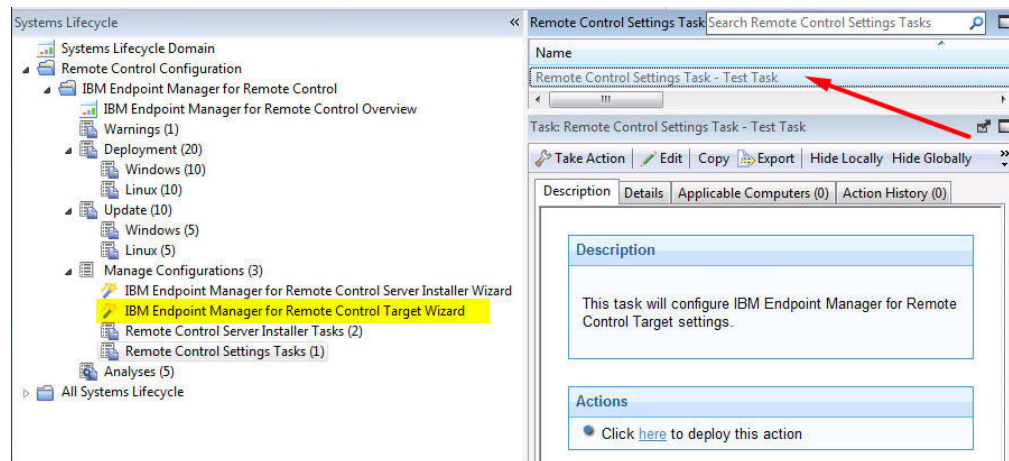
説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。これらのタスクにより、選択したコンピューターに IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー・ソフトウェアがインストールされます。



注: サーバー・インストーラーが失敗した場合、このタスクは失敗し、終了コードが表示されます。

ターゲット構成タスクの実行

「Remote Control 設定タスク」サブノードを使用して、IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット・ウィザードで作成した構成タスクを実行します。必要なタスクをタスク・ウィンドウで選択して、説明を確認し、「アクション」ボックス内の指示に従ってタスクを開始します。



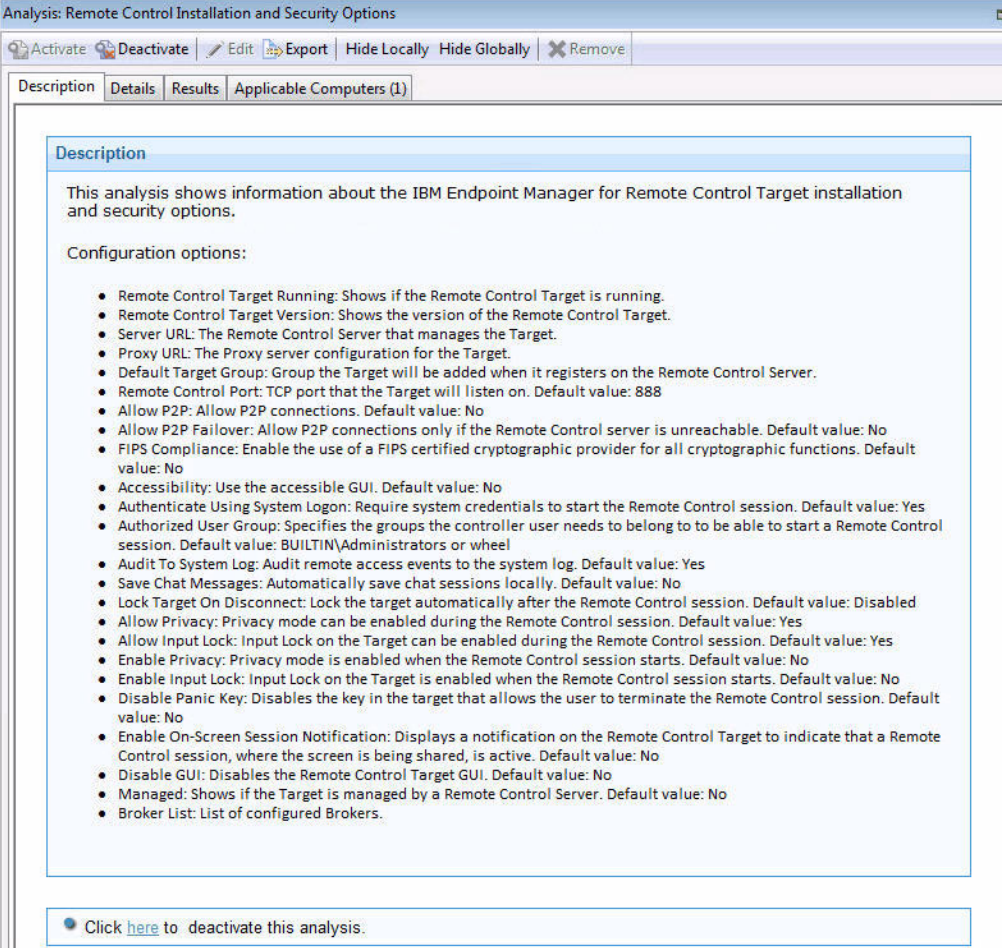
分析

「分析」サブノードには、インストール、ユーザー、および監査の情報を収集する一連の分析が用意されています。このデータは、コントローラー・コンポーネントまたはターゲット・コンポーネントがインストールされている環境内のコンピューター上で発生したりモート・コントロール接続イベントの履歴を提供します。これ

らの分析は全体でアクティブ化されるため、環境内で分析が関連しているどのコンピュータについても、値が報告されます。

ターゲットのインストールおよびセキュリティー・データの取得

「Remote Control のインストールおよびセキュリティー・オプション」分析は、IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット・ソフトウェアが稼働している環境内のターゲットから、インストールおよびセキュリティーのプロパティー値に関する情報を収集するために使用されます。これらのプロパティーについて返される値を使用すると、ターゲットに関するさまざまな事柄（ターゲットは P2P セッションへの参加を許可されるかどうか、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバーから起動されたりリモート・コントロール・セッションに参加できるかどうか、など）を確認できます。プロパティー値の定義については、ステップ 2 (64 ページ) を参照してください。



Analysis: Remote Control Installation and Security Options

Activate Deactivate Edit Export Hide Locally Hide Globally Remove

Description Details Results Applicable Computers (1)

Description

This analysis shows information about the IBM Endpoint Manager for Remote Control Target installation and security options.

Configuration options:

- Remote Control Target Running: Shows if the Remote Control Target is running.
- Remote Control Target Version: Shows the version of the Remote Control Target.
- Server URL: The Remote Control Server that manages the Target.
- Proxy URL: The Proxy server configuration for the Target.
- Default Target Group: Group the Target will be added when it registers on the Remote Control Server.
- Remote Control Port: TCP port that the Target will listen on. Default value: 888
- Allow P2P: Allow P2P connections. Default value: No
- Allow P2P Failover: Allow P2P connections only if the Remote Control server is unreachable. Default value: No
- FIPS Compliance: Enable the use of a FIPS certified cryptographic provider for all cryptographic functions. Default value: No
- Accessibility: Use the accessible GUI. Default value: No
- Authenticate Using System Logon: Require system credentials to start the Remote Control session. Default value: Yes
- Authorized User Group: Specifies the groups the controller user needs to belong to to be able to start a Remote Control session. Default value: BUILTIN\Administrators or wheel
- Audit To System Log: Audit remote access events to the system log. Default value: Yes
- Save Chat Messages: Automatically save chat sessions locally. Default value: No
- Lock Target On Disconnect: Lock the target automatically after the Remote Control session. Default value: Disabled
- Allow Privacy: Privacy mode can be enabled during the Remote Control session. Default value: Yes
- Allow Input Lock: Input Lock on the Target can be enabled during the Remote Control session. Default value: Yes
- Enable Privacy: Privacy mode is enabled when the Remote Control session starts. Default value: No
- Enable Input Lock: Input Lock on the Target is enabled when the Remote Control session starts. Default value: No
- Disable Panic Key: Disables the key in the target that allows the user to terminate the Remote Control session. Default value: No
- Enable On-Screen Session Notification: Displays a notification on the Remote Control Target to indicate that a Remote Control session, where the screen is being shared, is active. Default value: No
- Disable GUI: Disables the Remote Control Target GUI. Default value: No
- Managed: Shows if the Target is managed by a Remote Control Server. Default value: No
- Broker List: List of configured Brokers.

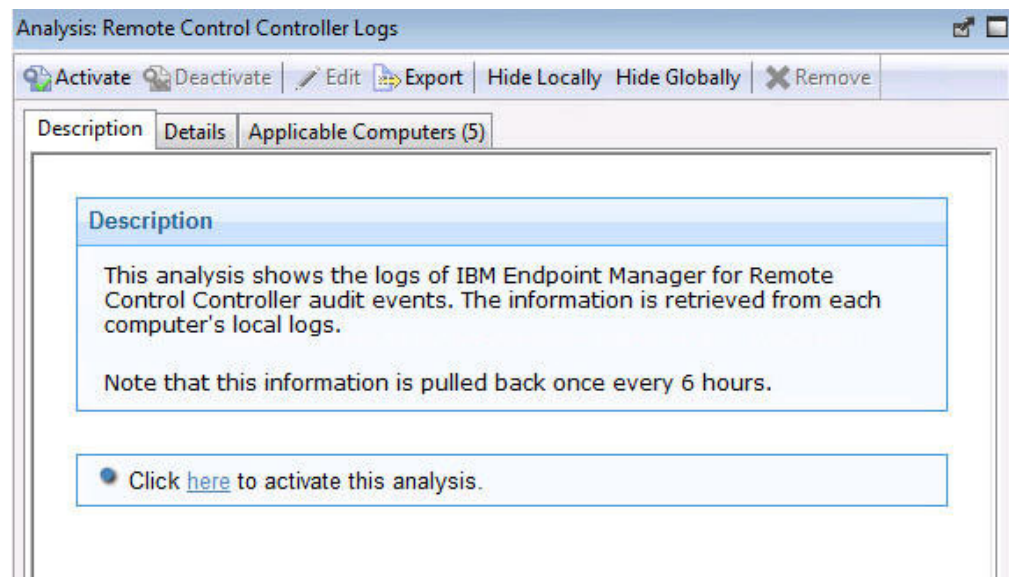
Click [here](#) to deactivate this analysis.

分析がアクティブな場合、「結果」タブには、この分析が関連したコンピュータがリストされ、インストールおよびセキュリティー・オプションの値が表示されます。「適用可能なコンピュータ」エントリーを展開し、取得プロパティーによってデータをさらにフィルタリングすることができます。この操作は、P2P リモート・コントロール・セッションに参加できるターゲットを確認する場合や、さまざまな IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲットにインストールされているターゲット・ソフトウェアのバージョンを表示する場合など、いろいろな面で役に立ちます。

例えば、特定のバージョンの IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲットを実行しているターゲットを確認するには、「適用可能なコンピューター」 > 「取得プロパティ別」 > 「Remote Control ターゲットのバージョン別 (By Remote Control Target Version)」を展開して、リストから特定のバージョンを選択します。選択したバージョンのソフトウェアがインストールされているターゲットのリストが表示されます。

監査イベント・データの取得

「Remote Control コントローラー・ログ」分析は、IBM Endpoint Manager for Remote Control コントローラー・コンポーネントがインストールされている環境内のコンピューターから監査イベントを収集するために使用されます。この情報は、6時間ごとに回取得され、更新されます。この情報は、監査の目的で使用できるほか、コントローラー・ユーザーが実行したセッション・アクティビティをモニターするためにも使用できます。



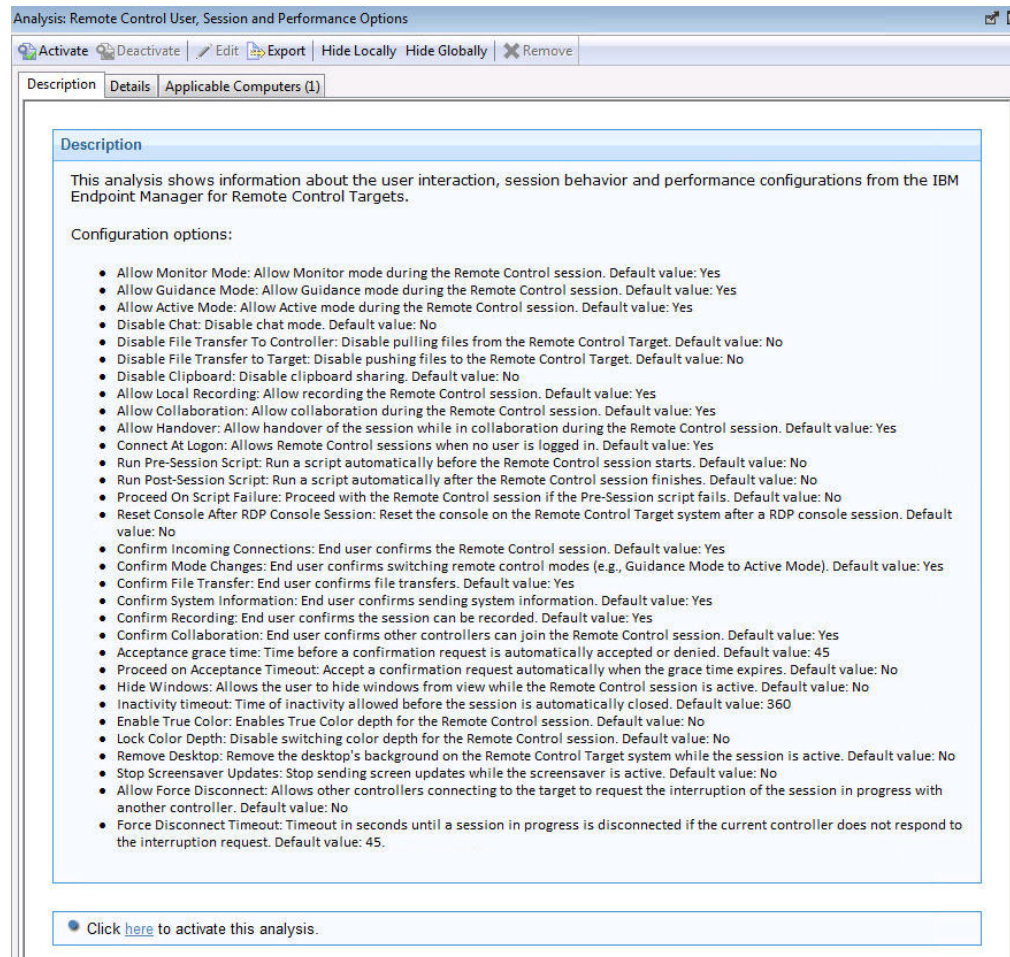
分析がアクティブな場合、「結果」タブには、この分析に関連していたコンピューターがリストされます。コンピューターをダブルクリックすると、選択したコンピューターの概要データが表示され、その中には「Remote Control コントローラー・ログ」分析によって取得されたコントローラー・ログ・エントリーのセクションが含まれています。「適用可能なコンピューター」エントリーを展開し、特定の取得プロパティによってデータをさらにフィルタリングすることもできます。

注: コントローラー・コンポーネントがリモート・コントロール・セッションでアクティブである場合に、分析でそのコントローラーからデータを収集しようとする、ファイルが使用中であることを示すエラーが分析結果で報告される可能性があります。

ユーザー、セッション、およびパフォーマンス・データの取得

「リモート・コントロール・ユーザー、セッションおよびパフォーマンス・オプション」分析は、IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット・ソフトウェアが稼働している環境内のターゲットから、ユーザーの操作、セッションの動作、

およびパフォーマンスのプロパティ値を収集するために使用されます。これらのプロパティを使用すると、このターゲットとのリモート・コントロール・セッション中にコントローラー・ユーザーが実行できるアクションを確認できます。プロパティ値の定義については、ステップ 2 (64 ページ) を参照してください。

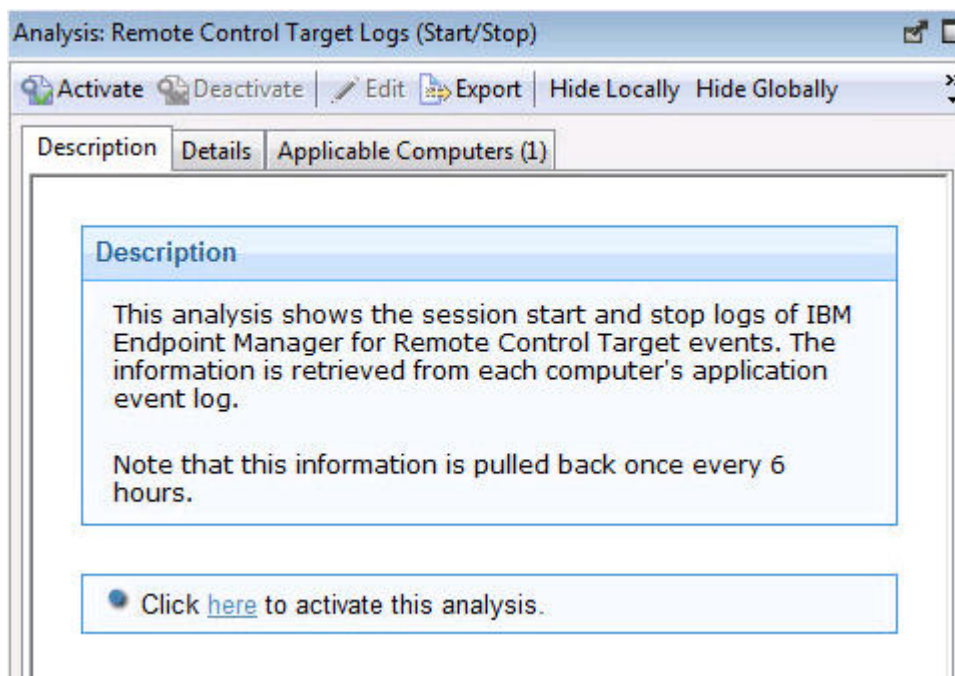


分析がアクティブな場合、「結果」タブには、この分析が関連したコンピューターがリストされ、ユーザー操作プロパティの値が表示されます。「適用可能なコンピューター」エントリーを展開し、特定の取得プロパティによってデータをさらにフィルタリングすることができます。

セッション接続データの取得

「Remote Control ターゲット・ログ (開始/停止)」分析は、IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット・コンポーネントがインストールされている環境内のコンピューターから監査イベントを収集するために使用されます。この情報は、6 時間ごとに回取得され、更新されます。この分析で返される情報は、各セッションについて返されるセッション接続の開始および停止イベントのみなので、特定ターゲットでのリモート・コントロール・セッション使用アクティビティーを表示するのに役立ちます。リモート・コントロール・セッション・アクティビティーに関する情報が必要な場合は、「Remote Control ターゲット・ログ」分析を使用してください。

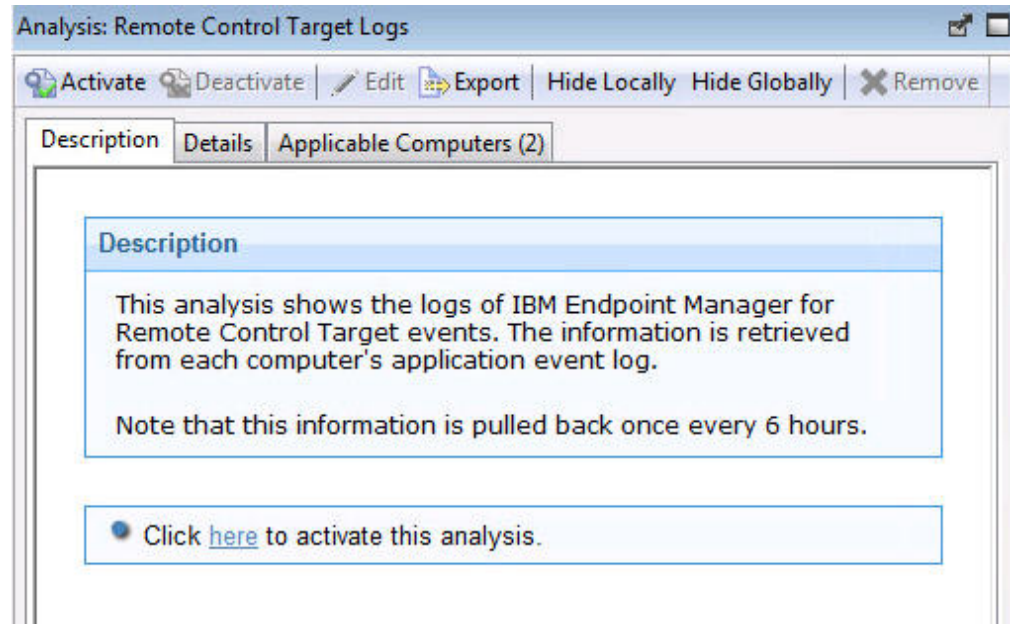
注: この分析は、Windows ターゲットにのみ有効です。



分析がアクティブな場合、「結果」タブには、この分析に関連していたコンピューターがリストされます。コンピューターをダブルクリックすると、選択したコンピューターの概要データが表示され、その中にターゲット・ログ開始/停止エントリーのセクションが含まれています。「適用可能なコンピューター」エントリーを展開し、特定の取得プロパティによってデータをさらにフィルタリングすることもできます。

セッション・アクティビティ・データの取得

「Remote Control ターゲット・ログ」分析は、IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット・コンポーネントがインストールされている環境内のコンピューターから監査イベントを収集するために使用されます。この情報は、6 時間ごとに回取得され、更新されます。この情報は、監査の目的に役立つものであり、リモート・コントロール・セッション中に実行されたアクションの詳細（例えば、セッション・タイプの変更やファイルの転送など）を提供します。セッションを実行していたコントローラー・ユーザーも表示されます。



分析がアクティブな場合、「結果」タブには、この分析に関連していたコンピューターがリストされます。コンピューターをダブルクリックすると、選択したコンピューターの概要データが表示され、その中には「**Remote Control ターゲット・ログ**」分析によって取得されたターゲット・ログ・エントリーのセクションが含まれています。「適用可能なコンピューター」エントリーを展開し、特定の取得プロパティによってデータをさらにフィルタリングすることもできます。

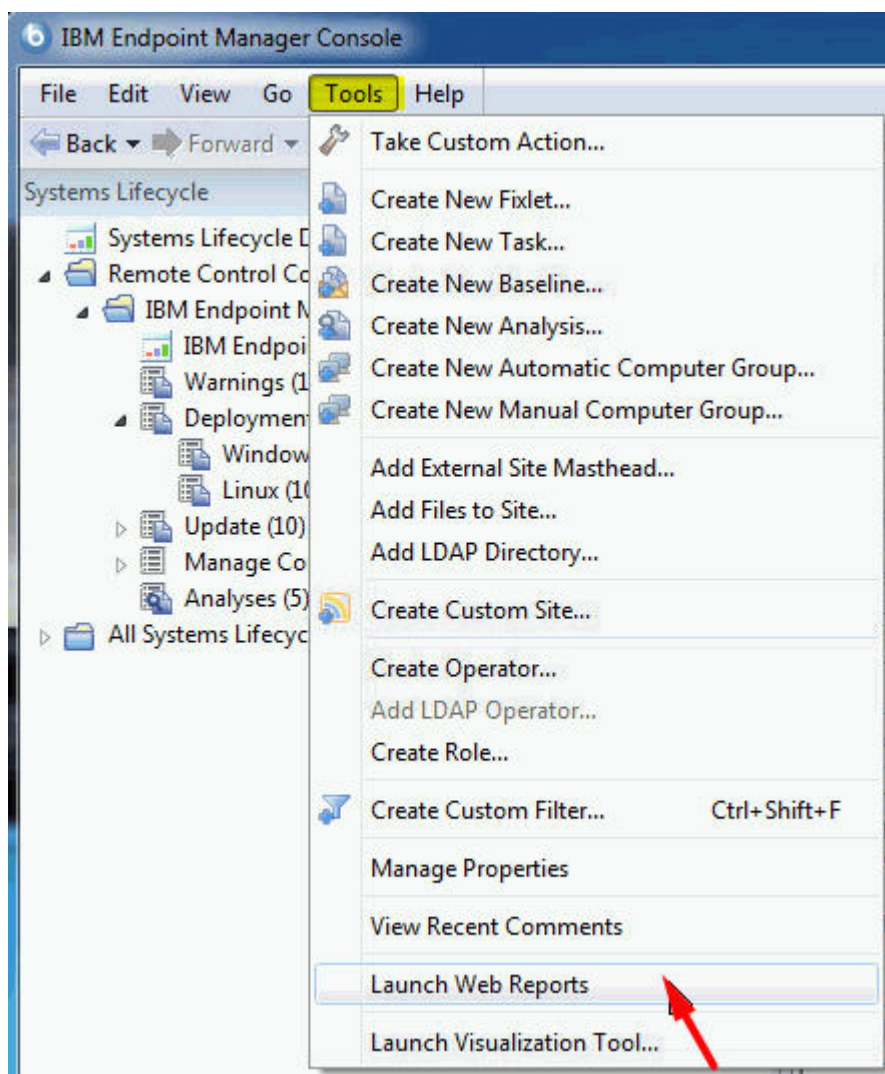
注: このデータで返される理由コードを完全に表示するには、Web レポートを使用して出力を表示します。詳しくは、87 ページの『第 6 章 Web レポートの表示』を参照してください。

第 6 章 Web レポートの表示

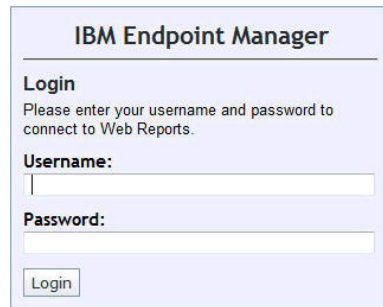
IBM Endpoint Manager for Remote Control は、アプリケーションの Web レポート・コンポーネント内で使用可能なレポートを提供します。この Web レポートは、コントローラーから収集されたログ・データと、特定の対象コンピューターに関連するターゲット・ログを提供するように作成されています。このデータは監査目的に使用したり、環境内の特定のマシンについてのリモート・コントロール・アクティビティをモニターしたりするために使用できます。

IBM Endpoint Manager for Remote Control Web レポートにアクセスするには、次に示す手順を実行します。

1. 「ツール」 > 「Web レポートを起動」をクリックします。



2. Web レポートのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザー名またはパスワードがわからない場合は、管理者に確認してください。



ログインした後、メインの「Web レポート」ページが新しいブラウザーに表示されます。

3. 「システム・ライフサイクル」を選択すると、IBM Endpoint Manager for Remote Control レポートを含むレポートのリストが表示されます。 以下のように、「レポート一覧」メニューの下に表示されるレポート・リストに「IBM Endpoint Manager for Remote Control イベント」のエントリーがあります。
4. 「**IBM Endpoint Manager for Remote Control イベント**」をクリックします。
5. 情報を表示する対象のコンピューター名を入力し、「**イベントの表示**」をクリックします。

指定された対象コンピューターについて、コントローラーおよびターゲット・ログから収集されたすべてのログ・データが関連するセクションに表示され、リモート・コントロール・イベントを確認することができます。

付録 A. よくある質問

1. 環境内の対象コンピューターにターゲット・ソフトウェアをインストールしましたが、IBM Endpoint Manager コンソールでコンピューターを右クリックしたときにリモート・コントロール・セッションを開始するオプションがありません。

この方法を使用してリモート・コントロール・セッションを開始するには、以下の条件が満たされていることを確認してください。

- IBM Endpoint Manager コンソールがインストールされているシステムに、コントローラー・コンポーネントもインストールされていること。
- メニュー項目が表示されるようにするには、「**Remote Control のインストールおよびセキュリティ・オプション**」分析が選択されたコンピューターについてアクティブであり、IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲットがアクティブであると報告している必要があります。
- コントローラーがデプロイされた場合、セッションを開始するためのメニュー項目の表示権限があるのは、デプロイ対象のマシンにログオンしている現行ユーザーのみです。他のユーザーはメニューを表示できません。以下のレジストリー・キーも作成することができます。

キー名: HKEY_CURRENT_USER¥Software¥BigFix¥Enterprise
Console¥Settings¥ComputerListContextMenuExtensions¥TivoliRC

以下の値を使用します。

ComputerApplicabilityRelevance = value of results (current computer, property 1 of fixlet 4 of bes site whose (name of it starts with "Tivoli Remote Control")) = "True"

MaxComputerSetSize = 1

MenuDisplayName= &IBM Endpoint Manager for Remote Control

ShellCommandRelevance = "%22C:¥Program Files¥IBM¥Tivoli¥Remote Control¥Controller¥jre¥bin¥javaw.exe%22 -jar %22C:¥Program Files¥IBM¥Tivoli¥Remote Control¥Controller¥TRCConsole.jar%22 --host " & hostname of current computer

2. ターゲット・ソフトウェアを P2P モードでデプロイしましたが、今度はこのターゲットを IBM Endpoint Manager for Remote Control に登録する必要があります。ターゲットをサーバーに接続するにはどうすればよいですか？

IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット・ウィザードを使用して構成タスクを作成し、必要なサーバーのサーバー URL を指定します。選択したターゲットでこのタスクを実行すると、ターゲットは再構成され、サーバーに接続できるようになります。詳しくは、63 ページの『IBM Endpoint Manager for Remote Control ターゲット構成タスクの作成』を参照してください。

3. IBM Endpoint Manager for Remote Control の使用についての詳細な情報はどこで見つけられますか？

IBM Endpoint Manager for Remote Control のインストール、使用、および管理に関する情報は、IBM Endpoint Manager for Remote Control インフォメーション・センターで見つけることができます。

4. IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー・コンポーネントがインストールされている場合、IBM Endpoint Manager for Remote Control の追加の機能を使用できますが、サーバー・コンポーネントはどこから取得できますか？

IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー・インストーラー・ウィザードを使用してサーバー・インストール・タスクを作成し、IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー構成を作成することができます。詳しくは、55 ページの『IBM Endpoint Manager for Remote Control サーバー・インストール・タスクの作成』を参照してください。

また、インストール済みの DB2、MS SQL、または Oracle データベースを使用する、インストール済みの Websphere Application Server インスタンスを指すサーバーをインストールすることもできます。詳しくは、「IBM Endpoint Manager for Remote Control インストール・ガイド」の『サーバーのインストール』のセクションを参照してください。

5. 環境に適したサーバー・インストールのタイプはどのように判別できますか？

インストールを計画する際の考慮事項に対するガイドラインについては、「IBM Endpoint Manager for Remote Control インストール・ガイド」を参照してください。

付録 B. サポート

この製品について詳しくは、以下のリソースを参照してください。

- IBM Endpoint Manager サポート・サイト
- IBM Endpoint Manager Wiki
- 知識ベース
- フォーラムおよびコミュニティー (英語)

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。

国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
2Z4A/101
11400 Burnet Road
Austin, TX 78758 U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

表示されている IBM の価格は IBM が小売り価格として提示しているもので、現行価格であり、通知なしに変更されるものです。卸価格は、異なる場合があります。

本書はプランニング目的としてのみ記述されています。記述内容は製品が使用可能になる前に変更になる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラット

フォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

Adobe、Adobe ロゴ、PostScript、PostScript ロゴは、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

IT Infrastructure Library は英国 Office of Government Commerce の一部である the Central Computer and Telecommunications Agency の登録商標です。

インテル、Intel、Intel ロゴ、Intel Inside、Intel Inside ロゴ、Centrino、Intel Centrino ロゴ、Celeron、Xeon、Intel SpeedStep、Itanium、および Pentium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

ITIL は英国 The Minister for the Cabinet Office の登録商標および共同体登録商標であって、米国特許商標庁にて登録されています。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Cell Broadband Engine は、Sony Computer Entertainment, Inc. の米国およびその他の国における商標であり、同社の許諾を受けて使用しています。

Linear Tape-Open、LTO、LTO ロゴ、および Ultrium および Ultrium ロゴは、HP、IBM Corp. および Quantum の米国およびその他の国における商標です。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アンインストール

ゲートウェイ・サポート

Linux 36

Windows 25

コントローラー

Linux 32

Windows 20

ターゲット

Linux 30

Windows 19

CLI ツール

Linux 34

Windows 23

インストール

概要 15

ゲートウェイ・サポート

Linux 35

コントローラー

Linux 31

Windows 20

ターゲット

Linux 28

Windows 16

CLI ツール

Linux 33

Windows 21

Linux 27

Windows 16

インストール・データ

表示 11

ウィザード

サーバー・インストール構成 55

ターゲット構成 63

[カ行]

概要 1

監査イベント

データの取得 82

管理モードのセッション

開始 53

ゲートウェイ

更新

Linux 48

Windows 43

ゲートウェイ・サポート

アンインストール

Linux 36

Windows 25

インストール

Linux 35

デプロイメント

Windows 23

警告 54

更新

ゲートウェイ

Linux 48

Windows 43

コントローラー

Linux 46

Windows 41

コンポーネント 39

ターゲット

Linux 45

Windows 40

ブローカー

Linux 49

Windows 44

cli

Linux 47

Windows 42

Linux 45

Windows 40

コントローラー

アンインストール

Linux 32

Windows 20

インストール

Linux 31

Windows 20

更新

Linux 46

Windows 41

コントローラー・ログ

データの取得 82

[サ行]

サーバー・インストール構成

作成 55

db2 55, 57, 59

derby 55

サーバー・インストール構成 (続き)

MS SQL 61

mssql 55

oracle 55, 62

サーバー・インストール・タスク

作成 55

実行 79

セッション接続データ

取得 83

セッション・アクティビティ・データ

取得 84

[タ行]

ターゲット

アンインストール

Linux 30

Windows 19

インストール

Linux 28

Windows 16

更新

Linux 45

Windows 40

ターゲット構成およびサーバー構成の管理

54

ターゲット構成タスク

作成 63

実行 80

ターゲット・インストール・データ

取得 81

ターゲット・セキュリティ・データ

取得 81

ターゲット・データ

インストール 81

セキュリティ 81

プロパティ 81

ターゲット・プロパティ

構成 63

データの取得 81

ターゲット・ユーザー・データ

取得 82

対処

警告 54

タスク

実行 79

ダッシュボード 11

IBM Endpoint Manager for Remote
Control の概要 11

データ

収集 80

定義 5

デプロイメント

ゲートウェイ・サポート

Windows 23

[ハ行]

ファイアウォール・ルール 54

ブローカー

更新

Linux 49

Windows 44

分析 80

アプリケーション・ログ 84

リモート・コントロール・ユーザー、

セッションおよびパフォーマンス・

オプション 82

Remote Control コントローラー・ログ

82

Remote Control ターゲット・ログ (開

始/停止) 83

Remote Control のインストールおよび

セキュリティ・オプション 81

[ヤ行]

よくある質問 89

[ラ行]

リモート・コントロール・セッション

開始 50

コンソールから起動される 51

IBM Endpoint Manager for Remote

Control サーバーの使用 53

P2P 50

リモート・コントロール・セッションの開

始 50

C

cli

更新

Linux 47

Windows 42

CLI ツール

アンインストール

Linux 34

Windows 23

インストール

Linux 33

Windows 21

D

db2

サーバー・インストール構成 55, 59

derby

サーバー・インストール構成 55, 57

I

IBM Endpoint Manager for Remote Control

使用 15

IBM Endpoint Manager for Remote Control

の概要 11

IBM Endpoint Manager for Remote Control

の使用 15

IEM コンソール

概要 7

コンポーネント 7

ダッシュボード 11

L

Linux ブローカー・サポートのアンインス

トール

コンソールから 38

Linux ブローカー・サポートのデプロイ

コンソールから 37

M

MS SQL

サーバー・インストール構成 61

mssql

サーバー・インストール構成 55

O

oracle

サーバー・インストール構成 55, 62

P

P2P セッション

コントローラーから起動される 53

M コンソールから起動される 51

R

Remote Control サーバー・インストーラ

ー・タスク

実行 79

Remote Control 設定タスク 80

W

Web レポート

表示 87

Web レポートの表示 87

Windows ブローカー・サポートのアンイ

ンストール

コンソールから 27

Windows ブローカー・サポートのデプロ

イ

コンソールから 25



Printed in Japan